

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

とある科学の因果律

### 【作者名】

oh！お茶

### 【あらすじ】

学園都市、230万人の頂点。

とある研究により生み出された、8人しかいないレベル5の第8位、鵜沼恭弥。

そんな彼が持ち前の自由奔放さでこの街を飛び回る。

これはそんなアホみたいな物語。

(処女作。たどたどしい文章でしょうがそこは勘弁してください)

## 1話「もやし」

学園都市。

東京西部の未開拓地を切り開いて作られ、面積は東京の三分の一ほどであるこの区画の人口はおよそ230万人であり、その八割は学生である。

その巨大都市の表の顔は外部より数十年進んだ最先端科学技術が研究・運用されている科学の街。そのため、学園都市内の情報は極秘事項に当たり、警備体制は常に厳重である。

自由に出入り出来ないのは勿論の事、外周は高い壁に覆われており、内部は監視カメラのみならず人工衛星によっても監視されている。

そんな、ありとあらゆる科学技術を研究し、学問の最高峰とされるこの街は、もう一つの顔を持つ。

人工的かつ科学的なプロセスを経て組み上げられた、超能力者養成機関である。

学生を対象に『開発』されるこの能力は各人によって様々な種類に分かれるが、その価値や強さ、応用性などによって、無能力者<sup>レベル0</sup>、低能力者<sup>レベル1</sup>、異能力者<sup>レベル2</sup>、強能力者<sup>レベル3</sup>、大能力者<sup>レベル4</sup>、超能力者<sup>レベル5</sup>と六段階で分類される。

そんな一昔前まではファンタジーの領域にあつたものが科学の領域へと引きずり込まれたこの街で、とある頭のネジが外れた男の物語が始まる。

\*\*\*\*\*

夏休み真っ只中、夕方時に学園都市に八人しかいないレベル5の第八位、鵜沼恭弥<sup>くけぬま きょうや</sup>は欠伸を噛み殺しつつ第七学区の大通りを歩いていた。

右手に長財布を持ちつつフラフラと歩くその姿は無防備以外の何物でもない。誰が見てもギョツとするような警戒の無さ。

だが、周囲の生徒達がそれに気付く事は無い。まるで彼の存在に気付いてすらいないかの様に。

そんな恭弥は長財布を掃除ロボットの前に放り投げ、気にした風も無くコンビニへ入って行く。

蒸し暑い外とは別世界の様に、店内はクーラーが効いて快適な涼しささが保たれていた。

快適な温度に再び襲ってきた睡魔に対抗しつつ、良い加減頬を叩いて目を覚ました彼の眼に最初に映ったのは、――

「……………遂にイカレたか……」

――気持ち悪いくらい馬鹿みたいに缶コーヒーをカゴに放り込むモヤシ野郎だった。

つい先ほどまで続いていた眠気を覚ますためにコーヒーを買いに来た恭弥だったが、モヤシの<sup>第一位</sup>そんな行動を見て完全に目が覚めた。

一心不乱に缶コーヒーを求めるその姿は、魔法の白い粉クスリを欲するラリった人を連想させる。見知らぬ顔ならスルーするのだが、流石に知人がやっているのと殴り飛ばしたくなる衝動が湧き上がるな、と恭弥は呆れつつ彼に近寄った。

もつとも、殴り飛ばすことが出来ないことは承知しているが。

そして、先ほど捨てた財布から抜き出した金(21円)をポケットに捻じ込んで、口を開いた。

「おいモヤシ、気持ち悪い事この上ないぞ。ぶっちゃけキモい」

マトモな返答が返ってくる訳がないので、ちゃんとした会話をしよ

うとも思わなかったのだろう。拳以外の返事を期待せず、その人物を知る者にとっては自殺宣言にも等しい言葉を吐く恭弥。

その言葉にピタリと動きを止め、ゴミ虫を見る様な視線を向けてから相手を認識し、対等な者へ向ける視線へと変える第一位。

どうやら返答代わりのベクトルパンチは免れたようだ。

「アン…？」

「ああ、オマエか。あまり巫山戯た事ぬかすとぶつ殺すぞ」

そう答えるのは第一位、モヤシの異名を持つ学園都市の頂点、アクセラレタ一方通行。

一方通行って……キラキラネーム通り越してワラワラ笑笑ネームだよな、と今更ながらにそんな感想を抱く恭弥。なかなか辛辣。

「なんでこんなゴミみたいな缶コーヒーにハマってんだよ。舌の肥えて無さも第一位ってか？」

そんな辛辣な彼が言及するのは、あまり美味モヤシの大好きなしくない缶コーヒー。一本110円と他のものに比べて少しだけ安い、学園都市製ガラナ青汁と同じレベルの後味を残すコーヒーである。

これなら喫茶店でマトモなコーヒー飲めや、オマエ一位だし金あんだろと思わずにはいられない。

そんな彼の心優しいただの罵倒気遣いもどうやら一方通行には届かなかったようだ、いや、罵倒ならば届いたが。

一方通行は殺気をゆらりと纏い、死の宣告を彼に「――」

「オーケー。喧嘩売ってんだな？」

表に出……ってちょっと待て。

なんで当然であるかの様に俺のカゴに握り飯投げ入れてんだ？」

「――しようとしたが、出鼻を挫かれて力が抜けた。」

というのも、恭弥が一方通行の殺気を飄々と受け流しつつ、なんの躊躇いもなくお握りをカゴの中に入れたため。

あまりにも自然過ぎるその一連の動作に、ワンテンポ気づくのが遅れた一方通行。

『H A H A H A お茶あ』も入れとくか。金が切れた。奢れ」

「」

そう、彼の所持金はポッケの中の21円。叩けば二倍になるなどという魔法のポッケではないため、現在彼の財力はうまい棒2本分ではないのだ。

困った。これでは何も買えない。

そんな彼にできる事は一つ。そう、モヤシにたかる事だったのだ。

「オマエ、口座から金引き落とせよ。八位だから金貰ってんだろ」

「通帳どっかいった」

そう、彼に退路はない。

「キマッタぜ……！」

「いや、締まってねエからな」

「いや、お握りの種類が」

「ややこしいんだよ。殺すぞ」

\*\*\*\*\*

コンビニから出て二人は並んで歩く。時刻は既に正午を過ぎており、お昼時終盤とも言つべき時間帯。そのためか、人通りも多く活気が溢れている。そんな中で明らかに彼らは浮いていたが、それを気にした様子もなく2人は物騒な会話を繰り返す。

「で？第八位にして俺と互角レベルの能力を持つオマエが何の用だ？」

そう言うのは学園都市最強の超能力者、一方通行。あれだけズタボロに言われたにもかかわらず結局購入した110円の缶コーヒーを啜りながら、視線を恭弥に投げかけた。

そんな彼に恭弥は完結な一言を。

「は？俺がお前にわざわざ会いに来たと思ってるの？馬鹿なの？自意識過剰も甚だしいよ？」

否、ただの罵倒。

しかも神経を逆撫でするような、盛大に相手を馬鹿にした表情で。これにはキレル、キレルしかない、キレてしまった第一位。

「よォし、いつペン死ぬかア？」

飲んでいる途中の缶コーヒーを豆腐のように握り潰し、ギロリと赤い眼で恭弥を見据えた。まだ中に残っていたコーヒーが溢れ出す、第一位の反射は顕在である。一方通行の皮膚はおるか、服にすら付着することなく地面にこぼれ落ちた。

「ハハハ、やなこった。それに互角じゃなくて相性の問題だろ。ほら、

武装集団と警備員みたいな。

あ、武装集団って言えば、昨日も武装集団に絡まれたってな。ざまみるモヤシ。クソワロウ」

コーヒーで濡れない服を見て、わーお反射ちよー便利、と思いつつもそれを口に出すことなく(表情に出さないとはいってない)、さらなる言葉で火に油を注ぐ。

もっとも、「火に油」どころか、「火に核弾頭」のような気がしてならないが。

「……………オーケー…引き金を引いたのはオマエだからな？」

どうやらしっかりと炎上したようだ。

だが、

「ほ〜ね、よしよし。」「ミミだぞ〜」

「話を聞けよ!!」

怒りが沸点に達し殺意を振りまく一方通行を無視し、背を向けて掃除ロボットに握り飯の包装を回収させる恭弥。

背後に立つ第一位などなんのその。話が飛びまくる上に常にマイペース。そんな自由奔放の権化である彼に一方通行はただただ疲れが溜まるばかり。

一気に興を削がれながらもツッコむ一方通行をカラカラと嗤い、恭弥は口を開く。

「ハハハ…ま、いいんじゃないね？」

暇つぶしにもならねえだろうけどお優しい一方通行サンは誰一人殺してねえんだろ？

カックイー」

茶化すのは恭弥の十八番<sup>オハコ</sup>。火に油を注いだくらいで殺されてはたまらないと一方通行をヨイシヨする。自業自得という言葉など彼は知らない。故に一方通行の怒りが己に向かないよう全力を尽くした。怒りを促した本人がそれを他所に押し付けようというのだからなんとも無責任極まりない。

しかし、天は彼に味方した。

なんと、あの一方通行が、

「うるせエエ」

怒りを収めたのだ。コレには恭弥も驚いた。驚きのあまり、

「でも知ってる？人殺して犯罪なんだぜ？カツコ良くもなんともないよ。当たり前だよ。あと、怪我させるだけでも傷害罪だよ。明らか  
に過剰防衛だし」

即座に手のひら返し。

「褒めんのか貶めんのか、どっちかにしろ」

「いや、お前の照れ具合が予想以上に見てられなかった。こっちが恥ずかしくなりそうだった」

「死ね」

殺気を収めた一方通行に悪びれる様子もなく恭弥は巫山戯続ける。  
そんな下らない言葉のやり取りの中、一方通行はハツとする。

(そオいや…いつ以来だ？)『下らねエ会話』ってのをすんののは)



あまりに強大な能力を持ったために人との会話…それは常に殺意の籠ったものや実験に関するものなどに占められ高校生という未成年者にとっては精神的負担のかかるものだった。

故に彼は溜息を吐く。

僅かに湧き上がってしまった安堵を嫌悪しながら。

対して鵜沼恭弥は思い返す。

初めて一方通行と出会った時の事を。

「梅すっぱー!」

「シャケは俺のだからな」

「もう食った」

「マジ殺すぞ」

――

――

「わ、悪かった!悪かったって!!」

片腕を抑え、うずくまって震えながらなんとか声を絞り出す少年に、一方通行は何も応えず近づく。

周りには手脚が普通ではあり得ない方向に曲がって呻いている者や、気絶しているもの、ナイフが腹に刺さり血を流している者などが転がっていた。

死者こそいないものの大惨事である事に変わりはない。

事情を知らない人なら、あまりに殺伐としたその光景を見てこう言うだろう。

「わーお、強烈ウ」

「あん？……なんだオマエ？」

路地裏に響いたそんな声に一方通行が未だ意識の残る男に足を踏み降ろそうとした足を止めて声の主に視線を向ける。

そこにはコンビニ袋を提げて呆れた様な顔をした男子学生、鵜沼恭弥が立っていた。

「たっ、助けてくれえ!!」

うずくまっていた少年はこそぞとばかりに恭弥に助けを求める。だが、

「ハハハ知るかボケ。」

見ず知らずの他人を巻き込もうとすんな

一蹴。

そもそも彼の顔見知りはここに一人もいないのだ。

わざわざ面倒事に首を突っ込んでまで助けてやる義理はどこにもない。

「か、金ならいくらでも払うからよお!!」

嘘つけお前、台詞が三下ですな、と恭弥は苦笑いを零して一方通行に声をかける。

「サッサとドメをせば、鬱陶しいんだけど」

「そオカ。悪いな」

ウンザリした口調でそういう恭弥に応え、一方通行は目の前の少年を蹴り飛ばす。

緩くボールをパスするような軽い蹴り。

だが、それだけで少年は10m近く吹き飛ばす。

間違いなく肋骨は砕けているだろう。

「あーらら。流石にそこまでやったら死ぬんじゃないね？」

「知るか。そオナソねエために風紀委員やら警備員やらいるんだろオガ。そのうち来ソだろ」

そんな一方通行の言葉に呆れたと言わんばかりの口調で恭弥は言う。

「人任せとかガキかお前。」

どんな経緯があったのか知らんが後始末ぐらいしやがれアホタレ」

「…………喧嘩売ってソのか？」

「ハハハ短気なことデ。友達ないだろ、お前？いちいち下らねえ事にキレソなボケナス」

「オーケー、肉塊がもオーっ追加だ」

ギリリと赤い目で恭弥を睨めつけ、ゆらりと両手を横に広げ殺気を垂れ流す一方通行。

そして、――

「あつ、病院ですか？救急車だして。どっかの路地裏ね」

「――恭弥は無視して普通に病院に電話を入れた。しかも説明が超適当。」

しかしここは天下の学園都市。こんな説明でも救急車が来るまでに30分もかからないだろう。

さらに言えば、この行為が一方通行の神経を逆撫でて完全にキレさせる引き金となった事は言うまでもない。

「無視してンじゃねエよ!!」

足下のベクトルを操作して弾丸のように飛び出す一方通行。

筋肉量、体勢などとは釣り合わないその速度に恭弥は怪訝な顔をすがるが、すぐに跳んで上に逃げる。

「おいおい、ちょっとおちよくっただけでキレんなよ。」

まあ別に構わねえけど。

救急車来るしちよっと場所変えるぞ」

そして右手側の壁を蹴って一方通行の後ろに着地した。

そのまま全力で路地裏を突き進む。超能力は使わず、素の身体能力で疾走しつつ後ろを伺うと、一方通行は殺意を振りまきながら肉食獣のように物凄いスピードで付いて来ていた。

（あー、…ったく…いつからここはサファリパークになったんだよ

…

まあ超能力者がいる時点で動物園みたいなモンだけどさ）

実際は実験場なんだけどねえと呟き、更にスピードを上げて詰められていた間隔を僅かに広げる。

その後暫く走り、第十九学区、再開発に失敗し寂れた学区の二画で足を止めた。

その中のボロいスーパーの屋上で向かい合う二人。

「どオやら死ぬ覚悟はできたみてエだなア」

結局振り切れなかったなと溜息を吐き、恭弥は面倒くさそうに一方通行と向き合う。

「あー、ハイハイ。早く俺をぶっ飛ばしたいんだろ？」

常套句並べてないでサッサとかかって来いよ」

「ほオ……………面白レエ。」

「まアせいぜい足掻けエ、三下ア！」

くるりと向き直った恭弥の肝の据わった様子に一方通行は獰猛な笑みを浮かべて足下に転がるコンクリートの塊を蹴って飛ばす。

遺憾無く発揮された能力により銃弾以上の速度で放たれたそれは恭弥の顔面へと吸い込まれていく。

が、恭弥は首を横に倒してそれを避けた。

そんな彼の反応速度に驚きを隠せない一方通行。

(!?今のを躲すか……………ふざけた動体視力してやがんな)

だが、それくらいやってくれた方が潰し甲斐があるとして再び笑みを浮かべ、一方通行は続けて足下の床を力強く踏みつける。

すると少し離れた床から一本ずつ、計四本の鉄骨が飛び出て来た。

冷静にその現象を観察し、恭弥は相手の能力を分析しようと頭を働かせる。

(急加速……………高速移動……………コンクリに鉄骨……………統一性がねえな……………いや、

無くもないか)

思考する恭弥に対し、一方通行は次の一手を打つ。

「オラオラオラオラァ！それで凌いだつもりかア!!」

再び一方通行が床を踏みつけると、四本の鉄骨は右手側に集まった。

それに向けて拳を打ち付けると鉄骨は一斉に恭弥の下へ飛んでいく。

が、恭弥は動かない。

ボンヤリと鉄骨を眺めているだけであり、動く様子もなければ慌てる様子もない。

今の立ち位置だと間違いなく鉄骨が突き刺さる。

先ほどの様に少し体を捻るだけで避けられる程度のものではない。しかし彼は動かない。

そんな様子に今度は一方通行が怪訝に思う。

(あん？なんで動かねェんだ……?)

そして、鉄骨と恭弥の距離が5m程になった瞬間、

「いや、まあ凌ぐも何も無いからな」

内三本が止まり床に落ちた。

「なっ?!?」

あまりにも物理法則を無視した現象が目の前で起き、自分の事を棚に上げて目を見張る一方通行。

そんな彼を眺めて恭弥が考える事は一つ。

(多分アイツだろうなあ……念動力の可能性も無くはないが。ま、予測が正けりゃ、コレがまた飛んで来るんだだろうなあ)

片手で数えるほどしかないが、今までに見た現象と、目の前の少年の姿形から、彼の能力及び人物にあたりをつけた。

そして脚を前後に開き、腰を落として構える。

最後の鉄骨が恭弥の右脇腹に当たる——直前にその先端は彼の右手に掴まれた。

さらに能力を使用し、加えて寸勁の要領で鉄骨を一方通行に弾き返す。その速度は当初のスピードよりも僅かに速い。それを見てとった一方通行はある情報を記憶の底から引き出した。

(!!……他人の能力なぞ興味なかったからあんま知らねエが……今の拳法みてエな技……一人だけ……心当たりがあるな……それに今のは……俺の反射に似ていたな)

一方通行に鉄骨が当たり反射され、再び恭弥の下へ跳ね返る。

同時に恭弥は確信に至った。目の前の人物が誰なのか。

慌てず落ち着いて鉄骨の先端を人差し指でコン、と触れる。

するとそれだけで時速40kmはあったであろう鉄骨は止まり床に落ちた。

「しゅん、しゅん」

これにより一方通行も確信した、とまではいかずとも目の前の人物に当たりを付けた。

暫しの静寂。

相手の出方を探るよつた。

己の優位を確立させるように。  
自分の持つ情報を確かめるように。

そして最初に、一方通行が口を開いた。

「……オマエ、第八位か？」

「ちげえよ」

即座の否定。

珍しく答えを間違えたことに眉をひそめる一方通行。

「…あん？チツ…当てが外れたか」

「俺は鵜沼恭弥だ。レベル5の第八位じゃボケエ」

そして、間違えたことを照れ隠しする頭を掻く一方通行の前に、恭弥は真顔でカミングアウト。

「合ってんじゃないか!!此の期に及んでふざけてんじゃないよ!!」

「つか良く分かったな。俺の能力なんぞそう分かるもんでも無いと思うんだがねえ。」

流星は第一位ってところか」

「チツ…まアな。良く観察すりゃ幾らでもヒントはあった。」

落ちた鉄骨から僅かに見える陽炎、最後の鉄骨の止め方、化け物みてエな身体能力、一回だけオマエの情報を見た事があったからなア。確信とまではいかなかったが、予測程度なら立った。

超能力者のくせに研究の一環で馬鹿みてエに体を鍛えられてやがる能力者、『<sup>アーセナル</sup>因果律』」



彼等の間に一陣の風が吹く。

これが彼等の出会いだった。

だが、この出会いが果たして吉と出るか、凶と出るか、それは誰にも分からない。

## 2話「アイテム」

第十九学区。

開発に失敗し、寂れたこの学区に二人の少年が対峙していた。

一人はLEVEL5の第一位、一方通行。

一人はLEVEL5の第八位、鵜沼恭弥。

二人の間に流れるのは殺気に満ちた空気。

そんな中、先ほどの一方通行の言葉にニヤリと嗤い、鵜沼恭弥は言葉返す。

「ご名答。ま、コッチとしては分かりやすい能力の使い方して貰ったから第一位だって確信はあったね。ま、白髪モヤシとも聞いてたしね」

「ハッ、言っじゃねエか。」

腐った魚みてエな目してっからまさか第八位とは思わなかったぜ」

今度こそ心の底から獰猛に笑い演算を開始する一方通行。

そこにあるのは歓喜。

第八位と言えどレベル5。

故にそこらのゴミ虫より遙かに骨のある相手。

自分の能力の可能性を今まで以上に存分に引き出せるであろうこの相手にひたすら歓喜した。

だが、恭弥は、

「あー、パスパス。お前とやっても勝負つかないし疲れるだけだから。そんなにやりてえなら部屋の隅で一人で擦ってる」

一方通行の尋常でない殺気を受けても一切戦闘体勢に入らず、あまつさえ背を向けて歩き始めた。

「オイ、どオいうつもりだ？」

一気に興が冷め、不快感を露わにしながらそう尋ねる。レベル5との戦闘が有用となるのは相手が全身全霊で向かってくるからであり、レベル5だからではない。

例え相手が同じレベル5だったとしても、一方通行はその頂点なのだ。彼の勝ち揺るがない。自分の負けなど一切考えない。

結局、レベル5は自分の能力を存分に引き出してくれるツールでしかなく彼らが全力であればあるほど喜ばしい、程度の認識だ。

故に闘う気の無い恭弥は最早ゴミ同然。

いくらレベル5と言えどここまで無防備だと低能力者にも劣る。

最早手を出す価値はない。

そう考える一方通行に対して恭弥は応える。

「どうもどうもねえよ。誰も彼もが順列に興味があると思ったら大間違いだ。」

言つとくが、俺はお前とタイムマン張れるぜ？」

立ち止まり、顔だけ一方通行に向けて不気味に嗤う恭弥。

一方通行が眉をひそめたのを見て言葉を紡ぐ。

「そう怪訝な顔すんな。そうだな……あんま情報を垂れ流すのは好みじゃねえが、教えてやるよ。」

俺の能力は『エネルギー変換』だ。

これがどういう事かをしっかり理解できれば俺の言い分も分かるはずだぜ？

ま、なんでもかんでも反射しちまうお前に勝てるとは思ってないよ。だが、お前に負ける事は無いって言ってんだ。

だからお前とは闘いたくない。

逃げ口上だと捉えてくれても構わないさ。

とりあえず近くにある美味しい喫茶店教えてやるから戦闘だけは勘弁してくれや」

未だに闘う素振りを見せない恭弥に一方通行も諦め溜息を吐く。

手招きする恭弥に従いスーパーの屋上を飛び降りて第十九学区を出る為に歩を進める。そして一方通行は当然の疑問を投げかけた。

「分からねエな。それでどオしてオマエが俺とタイムン張れンだ？」

「オツケー、教えてやるからメアド交換な」

「やっばいいわ」

「お前に拒否権なんざねーよ」

「クーリングオフは「ねえよ」……………チツ…好きにしろ」

恭弥にいいように遊ばれているが、やはり気になるのだろう。ベクトルパンチを放ちたい衝動を抑え話を促す。

「何度も言うが、俺の能力は『エネルギー変換』。それはつまり、ありとあらゆるエネルギーを他のあらゆるエネルギーへと変えるモンだ。

お前も分かっているように、さっき鉄骨でやったことだが、熱エネルギーへの運動エネルギーの変換。光エネルギーへの熱エネルギーの変換。電気エネルギーへの光エネルギーの変換。

幾らでも変換可能だ。

……………面倒になってきた。もういい？」

「そこでやめンじゃねェ!!」

その程度説明なら聞くまでもねェンだよ!!」

「あー、ハイハイ。ま、要はアレだ。ある一つのピースを嵌めるだけで、お前に誰も触れられない様に、俺にも誰も触れられなくなるんだよ」

「…………どオいう事だア？」

「………」

その言葉と共に恭弥は近くの錆び付いた看板を蹴りつける。

「!?!」

すると一瞬にして看板が消えた。

まるで『空間移動』<sup>テレポート</sup>を用いたかのように一瞬で。だが、先ほど目の前の少年が言ったばかりだ。自分の能力は『エネルギー変換』だと。様々な考えが一方通行の頭に浮かんでは消えて行く。

「ほれ、あそこ」

そして恭弥は空の一点を指差し、驚愕に染まる一方通行に視線を上げるよう促す。

その先には、空中を落下する先ほど消えた筈の看板が。

「ま、もう分かると思うが、位置エネルギー……これを変換公式にぶち込むだけでエネルギーを持って俺に触れたものは一瞬にして高所へ移る、って寸法よ。瞬間移動とかにちょっと似てるね。」

そんな訳でぶっちゃけ俺も核撃たれても大丈夫って訳だ」

合点がいった、と言っかのように頷きつつも一方通行は疑問を口に  
する。

「ほオ……確かに厄介そオだな。

だがその程度のチンケな手品で俺と互角だア？

舐めてんのか？」

「ハハハ、自惚れも大概にしとけよ。こんなん氷山の一角に過ぎない  
に決まってるんだろ。

これ以上は割に合わんから言わねえよ。

けども少し考えてもの言えや。

ま、ザックリ言つと……

この世の全ての物質、現象はエネルギーを持ってんだぜ？

つまりどんな物も俺の手の中にあるって言っても過言じゃねえん  
だよ」

それにな、と恭弥は続ける。

「言っただろ？順列には興味無い、って。上位にいたら血の気の多い  
奴に喧嘩ふっかけられそうだし面倒だからな。

つまりは俺は自分の能力を誤魔化してるって訳だ」

その言葉に一方通行はハツとする。

定期的にある検査では数多くの機械の下、厳密に行われる。

どんなに能力を手加減して行使したところで脳波や体温などから  
どの程度制御しているかなどすぐに明らかになるのだ。

そんな中で自分の能力を誤魔化すなど不可能に近い。

恭弥が嘘を付いている可能性は排除できないが、腐っても学園都市  
の頂点のレベル5だ。

しかも『エネルギー変換』という能力を考えると、実際に出来るか

どうかは別として、幾つか策が浮かんでくるのは否定できない。

「ま、こんなん出来たところで何の自慢にもなんねえけどな。

そうだねえ……一発だけなら攻撃受けてやるよ。それでお前が見極める」

いつの間にか一方通行の携帯を奪って勝手にアドレス交換を始める恭弥はヤレヤレ、という風にそう言った。

操作を終えた恭弥から携帯を受け取りつつ一方通行は答える。

「……チツ……人のモン勝手に弄くり回してンじゃねエよ。

まあいい。興が削がれた。今回は勘弁してやるよ」

そして、踵を返し別方向へ向かう一方通行に恭弥は呼びかけた。

「ん？おい、喫茶店行かないのか？」

「興味ねエ。一人で行ってろ」

-----

「……お前友達いる？」

「なんなんだ？急に」

「いや、お前と最初に会った時のこと思い出してな……」

ああ、「いつは可哀想な奴だったって事まで思い出した」

「よし、血液逆流させてやるから右手だせ」

「ハハハ、勘弁。じゃ、俺コツチに用があるから」

「おお、そオカ。またな」

「バイビ〜」

気の許せる間柄でのみ可能となるくだらないやり取り。

そんな穏やかな会話を終えて恭弥は一方通行と別れ、銭湯へ向かう。

ちなみに一方通行の財布はしっかりと掏っていた。

(ひい……ふう……みい………うわぁ、二十万とかよく財布に入れてんな……馬鹿だろアイツ)

財布に入っていた額にドン引きしつつも回収した握り飯を嚙っていると携帯が鳴った。

非通知。

怪訝な顔をして握り飯を飲み込み、電話に出る。

「……モオしもオシイ？こちらアクセラレータァ！世界一のアクセラレータァでエすよオ！これから銭湯行くんですけどオ！電話掛けてくんじゃねエ、三下ア！俺のベクトルパンチが火を吹くぜエ!!」

ふざけたが後悔はしていない、と言わんばかりの清々しい笑顔である。

『相変わらずだな、<sup>アーセナル</sup>因果律。私だ』

聞き覚えのある声にピクリと片眉を上げるが、構わず続ける事を選



んだ。

「あん？校長先生が学園都市の頂オオオオ点ンッ、レベル5の第一位イイイイの俺様になんの用オダア？」

『私を校長先生と呼ぶのは君だけだ。下らない三文芝居はやめたまえ』

相変わらず気持ち悪いほど捉えどころのない学園理事長の声に、恭弥はウエーと顔を顰めてふざけるのをやめる。

「あーハイハイ。で、何？」

『そつだな、本題に入ろう。』

実は君には暗部に入って貰いたいのだ。

君のあまりに自由な行動には目を瞑って来た。それもあくまで想定内であるからプランに問題はない。

だが、少し裏が騒がしくなって来てね、君の助力を借りようと言う訳だ』

「……………本音を言え。」

勝手に学園都市を抜け出されるのが嫌だから暗部に入れて出来る限り縛りつけない、だろ？

「アンタの事だ。俺の行動も、学園都市内の事も全部想定内なんだから？」

『……………ふむ、やはり取って付けたような理由では駄目か。その通りだ。』

二日前にオーストラリア、その三日前にはアマゾン、その前日には

イギリス、さらにその二日前にはイタリアにいたな？こちらの許可も受けずに』

「お土産なんざねーよ」

『そうか。それはそれで構わない。』

ただ、プランに支障は出ないのだがな、こும்自由に動き回られては気がでない。

大きな力を持つ犬の手綱を握っていたい、という事だ』

「なるほどね。」

まあいいよ。

正直に言ってくれたしね。それに俺もアンタの言うプランとやらに興味があった。

暗部とやらに入ってるよ」

『話が分かるようだなにより。』

相手側にも君の加入は伝えてある。詳細は自動消去されるメールで送るから確認してくれ』

「はいよ。じゃ、またな」

『ああ』

とても携帯を通してなされるとは思えないほどの重大な会話の後、携帯を切って恭弥は虚空に呟く。

「校長先生……名前なんだっけ？」

ピリッピ

ピッ」「もっもっ」

『アレイスターだ』

「サンキュッ

略してアイターWWWな」

『おい、ちょーーー』ピッ

\*\*\*

翌日、鵜沼恭弥はコンビニで購入した缶コーヒーを片手に指定された集合場所へと向かっていた。

携帯片手に缶コーヒーを飲み干して一言。

「……………ゲロ不味……………」

あのモヤシこんなん買い込んでアホちゃうか？と一方通行の味覚を疑いつつ、凄まじい速さで携帯を操作していく。

映し出される画面は瞬時に切り替わっていき、並大抵の動体視力では内容を理解することはおろか文字を把握することすら難しいだろう。

そんな携帯を操作していく彼が今している事は、ハッキングでの機密事項の閲覧である。

(おー出た出た。ハック完了)。

えーっと…………『アイテム』…………うわっ女ばっかやん。

はあ？第四位？

……………校長にプラスチック爆弾贈っとくか)

自分が所属することになる『アイテム』というグループが全員女であるだけでなく、第四位がいるという事を知り、僅かに辟易する。集合場所であるファミレスが視界に入ったところで、まあいいかと気を取り直して空になった缶を道端に放り投げてファミレスに入った。

待ち合わせしていた旨を店員に告げ、『アイテム』のメンバーが揃っているテーブルにつく。

四人の少女が座る席で、皆の様子を伺うが、全員顔を見てくるだけで話し出そうとしない。

どうしようかと考えた後、店員を呼び止めシーザーサラダと Pasta、ドリンクバーを注文し、ドリンクを取りに行く。

まずはメロンソーダ。

合成着色料をふんだんに使用した甘ったるい飲み物を持って席に戻り、数秒で飲み干す。

ドリンクを取りに行く。

次にコココーラ。

ふんだんに砂糖をぶち込んだ炭酸水を持って席に戻り、数秒で飲み干す。

ドリンクを取りに行く。

お次はカルピスソーダ。

よくわからない白濁色の液体を持って席に戻り、数秒で飲み干す。

「いつまでその超不可解な行動をとり続けるのでしょうか。」

「お前等が俺に話し掛けるまでだバカヤロー。」

俺は新人りだぞ。どう話題を出せばいいかなんて知るかボケ」

見ているだけで胸焼けしそうなその行動を見かねた少女、絹旗最愛が突っ込むと、恭弥は、いやいや頑張れよと言いたくなるような返答をする。

そんな突然の罵倒に一人を除いて全員が頬を引き攣らせたが、それを気にした風もなく恭弥は話し始める。

「ま、いいか。取り敢えず突っ込んでくれて有難う。

……胸焼けヤバいけど自己紹介でもしておこうか」

やはり胸焼けはしていたようだ。

早くも出されたシーザーサラダを隣に座る絹旗の前に押しやり自己紹介を始める。

「あの、…シーザーサラダ超いらななんですけど」

「遠慮するな。

俺は鵜沼恭弥だ。ま、一つよろしく」

「わかったわ。恭弥ね。

麦野沈利よ。よろしく」

目の前に座る茶髪で長髪が特徴のグラマラスな少女がそんな恭弥の挨拶に応えた。

「……………滝壺理后…よろしく」

続いて斜め前に座るジャージを着た眠たそうな少女がそう言う。

そして今度は恭弥の隣の隣、つまり絹旗の隣に座るベレー帽が特徴の金髪の少女が口を開く。

「私はフレンダ。よろしく」

最後に隣のオレンジのパーカーを着た小柄な少女が自己紹介をした。

「絹旗最愛です。超よろしくお願いします」

「はいよ。よろしくね。」

でっ？ どっすんのっ？」

恭弥は暗部に入ってもらっつ、そしてここが集合場所、という事しか聞いていないのだ。

故に当然の疑問を抱くが、それに麦野が答えた。

「この後仕事が入ってるわ。だから今の内に打ち合わせをしようと思っの」

「なるほどね。うーん……連携とかやっば必要だよね。」

じゃ、まずは俺の事でも話そうか」

早速仕事があるというなら残された時間は有効活用しなくてはならない。

従って恭弥は上手く連携を取れるようにリーダーである麦野沈利に自分の能力について軽く話し始めるのだった。

### 3話「お初任務」

打ち合わせがある程度終わり、迎えが来るまでまだ一時間程あるということで、恭弥は買物へ出ていった。

残された少女四人はドリンクを飲みつつ彼について話す。

「それにしても第八位って事には超驚きましたね」

「ええ、確かにね。まさかあんな即戦力になる奴が入ってくるとは思ってなかったわ」

「しかもギャラはいらないって言うし。」

結局、私の心配は杞憂だったって訳よ」

そう言うフレンダに苦笑しつつ、絹旗は麦野に問う。

「同じレベル5としてどう思いましたか？」

「そうねえ……話を聞く限りじゃ本当に第八位なのかしら、とは思ってたわね。」

ま、そう簡単に負ける気はしないけど下手したら私より上かもしれないわ」

「ふえ!? 麦野のより強いのか!？」

「あくまで聞いた限りだとね。」

『エネルギー変換』、この能力の応用性は間違いなく第三位より上よ。応用性が強さに直結するとは限らないけど多分私の攻撃は一切届かない可能性があるわね」

「……確かにその可能性は超ありますね」

「え？結局、どういう事？」

「麦野の『原子崩し』を受けてもそれを光エネルギーや熱エネルギーに超変換すれば無傷で済む、って事です」

「ええ。第一位や絹旗みたいな演算を行っているなら間違いなく私、いや、第三位よりは上よ」

「ええー……結局、すごい奴だったんだ……」

「ま、第八位って事だから限界はあるだろうけどね。味方になってくれるならこれほど有難い事はないわ。

今日の仕事は比較的早く終わるかもね」

「……………シーザーサラダ……美味し……」

\*\*\*\*\*

「ヒイ！見逃してくれアギャツ!!」

「すまんねい。仕事なもんでい」

「オラア！死ねアガツ!？」

「オラア、死ねないがあ」

恐怖に顔を引きつらせ逃げ惑う者、殺気を撒き散らし銃を構える者、三者三様の様子を見せる人間を次々と殺していく恭弥。



「あの……その超ぶざけた口調やめてくれませんか？  
緊張感が超なくなるんですけど……」

「超嫌どす」

「ムカツ」

「チツチツチツ、『超ムカツ』」

目の前の研究所から出てくる人間を全員殺した後、絹旗の窒素  
パアンチ を躲していると、馬鹿でかい爆発音が聞こえた。

「お、そろそろ終わりか？」

「はあ……はあ……そうですね……」

そして目の前の建物から数本の光線が飛び出た後、建物が崩れ始め  
る。

「わーお、猛烈ウ。こりゃ敵に回したくないな」

あれを食らったらお腹に大きな穴が空いちゃうだろうなあと感嘆  
の声を漏らす恭弥。

そんな彼の緊張感の欠片もない様子に呆れつつ絹旗は口を開く。

「能力を一切使わずに弾丸を躲す貴方も超大概ですけどね」

「ま、そこら辺は研究と鍛練の成果だよ」

今、恭弥は絹旗最愛と共に建物の外で待機している。

周りにはただの肉塊と成り果てた元人間が何人も倒れている。

やる事がなくなって手持ち無沙汰になった恭弥と絹旗が欠伸混じりに建物が崩れていく過程を見守っていると、漸く中にいた三人が出てきた。

「わああああ!!恭弥!絹旗!結局、助けて欲しい訳よ!!」

「……崩れてく」

「ちよっとやり過ぎたかしらね。

絹旗、恭弥お疲れ様。終わったわ。帰るわよ」

「はいよ」

「了解です」

飛んでくるコンクリートの塊を弾き返し、砕き、消し飛ばして五人は合流する。

ガン、と恭弥が近くに止まっていた無人のキャンピングカーを蹴るとエンジンがかかり、ドアが開いた。

「ふうん……だから今回はアイツ等私達を送っただけで帰ったのね」

「超便利な能力ですね」

そんな軽口を叩きつつ、五人はキャンピングカーに乗り込む。

「ほんじゃ捕まってるね。俺の運転はちよっと荒いよ」

そしてざらりと第八位による警告。

「はっ……ひび……ひび……」

次の瞬間急発進。

加速を一切せずに速度0から一気に時速50kmに達する。  
中にいる人間は勿論、

「「「キヤアアアア！」「」」

「……………わぁ」

後方に叩き付けられる。

が、相乗りしているのはエネルギーを司る第八位。

「…え？……………衝撃がないわね」

「ああ、それなら俺の頭を働かすエネルギーとして貰ったよ」

四人が叩き付けられた際に生じたエネルギーを全て己に取り込み、  
無事に事を済ませた。

それだけでなく、

「……………あの、運転席に人が見えないんですが…」

「ああ、エンジンで生まれたエネルギーをそのままこの車の運動エネルギーに変えてるからアクセルとか踏む必要ないよ。

大雑把になら方向性を持たせる事も出来るからハンドルを握る必要もないしね」

なんと言う高性能。

一家に一人欲しいくらいである。

当の本人は前など一切見ずに先程の黒服から拝借した拳銃を暇つぶし感覚で弄くり回しているのだ。

良質過ぎる手駒を手に入れた『アイテム』の四人はただただ啞然と  
していた。

「あ、事故った」

「前を見る!!前を!!」

「超適当!」

「結局、碌な事にならなかつた訳よ!!」

「大丈夫。私はそんな恭弥を応援してる」

#### 4話「ほのぼの回」

現在、鵜沼恭弥はコンビニで買ったシャケ弁、サバ缶、e t c . の入った袋を片手に裏路地を歩いていた。

そう、所謂パシリである。

初仕事から二日経っている現在、恭弥は『アイテム』の拠点の一つの部屋で生活していた。

勿論寮は有るのだが、今までに使った回数など五回にも満たないのどの部屋か忘れてしまったのだ。

わざわざ帰って探すのも面倒になり、結局その拠点で過ごす事にした。

だが、そこは今まで女子四人で使っていた花園である。彼女達にとってはそう簡単に良しとできるものでもない。

そう言われた恭弥は

『じゃあ屋上で寝てるからなんかあったら呼んで』

と言い出したので流石に彼女達にも同情というものが湧いた。

結果として、裏の仕事の時の活躍も考慮され、恭弥が買い出し担当となる事で入室を許したのだ。

そんな彼がついでに買ったチョコレートを嚙りつつ拠点へ戻ろうとしていると、

「あん？なんでオマエがここにいるんだ？」

モヤシ体型の白髪少年と、軍用ゴーグルを装着して鈍く黒光りする銃を構えた茶髪の短髪少女に遭遇した。

「あー……んー……ほー……」

……………ああ、なんかの実験？  
「ゴメンね続けていいよ」

あまりに理解不能な状況に呆然とするが、すぐに一つの可能性を弾き出し、そう告げる。

「あとモヤシ、財布は返さないからな」

続けてなんと突然のカミングアウト。

「はアああああ!! やっぱデメエか!!」

すると茶髪の少女が、それに反応し背を向けた一方通行に向けて数発発砲するが、

「マジで死ぬね!!」

一方通行に当たった瞬間、ベクトルを操作され、全弾恭弥の下へ向かう。

しかし、銃弾が当たると彼はその場から消えた。

チツと舌打ちする一方通行の上の方から声が飛んでくる。

「じゃな。あんまやり過ぎないよっ!!」

恭弥はビルの屋上からそれだけ言うと、拠点に向かう。

「チツ…位置エネルギーか」

一方通行は恭弥の姿が見えなくなったビルの屋上へ視線を向け続ける。そして茶髪の少女はチャンスとばかりに引き金を引き、――

「ああ？悪いな。忘れてたわ、オマエの存在」

——少女の眉間に彼女が発砲した筈の弾丸がぶち込まれた。

恭弥の事は諦めた様子で、欠伸交じりに路地裏を抜けていく一方通行。

彼が去った後に影から幾つもの人影が出て来て死体と化した少女に群がる。暫くの後、気味が悪いほどいつもと変わらない空間がそこにはあった。

こうしてとある人物の、二万体のクローンの内の一体は単価十八万円  
円の儚い命を終えた。

\*\*\*

く 絹旗との絡み

「何見てるんですか？」

「校長先生に送るお土産用の通販カタログ」

「……火薬とか鉄材とか毒物しか載っていない様に見えるのは超錯覚  
でしょうか？」

「ハハハ、爆弾作ってあいつに一泡吹かせてやるぜ」

「どちらかというと血反吐超吹きそつですよね!？」

「殺っちゃったぜ とか言いたいよね」

「まさかの先週見た作品のタイトル!？」

〜麦野のターン〜

「あれ？沈りん自炊？」

「沈りんって何よ？沈りんって。」

「コンビニ弁当をレンジで温めるのを自炊って言うなら自炊ね」

「え？じゃあその手に持つてるフライパンは何よ？麦のん」

「ちょっとそのふざけた渾名止めて貰えるかしら？」

「これはこの拠点に最初からあったものよ。フレンドが壊したから捨てようと思ったの」

「ハハハ、半分になったフライパンで料理とか狂ったのかと思っただぜ。そゆことね。」

鮭野沈利、この三つめのシャケ弁貰っていい？」

「よーし、ちょっとキレたわよー？ビーム撃ち込んだじゃうわよー？」

「んまー」

「勝手に食ってんじゃねえええええ！」

〜フレンドがゆ〜

「フレンドちゃん爆弾作るの下手だな」



「フレンダね。あとちょっとムカつくんだけど」

「フレイムちゃん、ちょっとその材料貸せよ。俺が一発ドデカイの作ってやるぜ」

「だから、フレンダね。じゃあ作ってみてよ」

5分後――

「ほらできたぜ、スライムちゃん」

「だからフレンダ!!結局、私の爆弾とたいして変わってないし!」

「いやいや、威力は保証するぜ、はぐれメタルちゃん?なんなら今から爆発させてやるよ」

「だからフレンダ!結局、名残が跡形も無くなってるし!

あと爆発させないでよ!?!」

「オラア!!」ドゴオオオオオンツツツ!!!

「うわっひゃっ!!??」

「ハハハ、これで校長先生も一泡吹くぜ」

「け…結局、…爆弾作りもレベル5だったって訳よ……」

「フレンダアアア!!」

「麦野!?私じゃないよ!!恭弥がやった訳よ!!」

〜滝壺が寝る〜

「……………眠そうだね」

「……………お休みなさい」

「お休み」

「……………ZZZZZZZZ」

「ZZZZZZZZZZ」

\*\*\*

トテトテトテ

「ん？…はぁ……………真昼間からこの時間まで寝続けるなんて超無職のオッサンですか。」

全く少しはー…」

部屋のど真ん中で爆睡している恭弥に溜息を吐きつつ絹旗がまた「じつとすると、

「……………んん…」

「おべっ!?」

寝返りを打った恭弥に躓き、恭弥倒れこむ形となった。  
それにより恭弥は目を覚ます。



「ん？どおした？フレンooooooooo」

「……………」

「皆さん超どうしtttttttttttt」

静寂。

五人とも唾然として全く動けない。否、動かない。

静寂。

一早く現実に戻って来た恭弥は目の前の光景をしかと目に焼き付ける事に専念する。

レベル5の記憶能力、舐めてもらっては困る。

静寂。

「…………あのさぁ…………これから二十二学区のスーパー銭湯行こうと思ってただけど一緒に行く？」

何事も無かったかのように表情を一切変えず、言いたかった事を言う。

もちろん完全に目に焼き付けた後だ。優先順位というものが世の中にはあるのだ。それを疎かにするほど恭弥は馬鹿ではない。

ポカンとしていた四人はこのような状況でレベル5認定されそうなスルースキルを遺憾無く発揮した恭弥に軽く尊敬の念を抱く。

訳がない。

「サツサと出て行けええええ!!」

「超クロス」

「結局、死にたい訳ね!」

「……………」

滝壺以外の皆が殺意を剥き出しにする。

恭弥は逃げた。

ちなみに拠点からは緑白色の光線と家具、爆弾が飛び出しそこは半壊した。

## 5話「野次馬根性」

「ふうー…いいお湯だったねえ……………ん？」

スーパーリゾート安泰泉を出てビルの屋上を飛び移って移動していた恭弥はある違和感を感じる。

飲み干したコーヒー牛乳の瓶を近くのゴミ箱に放り投げて違和感の原因を探る。

ところで、近くとは言っても50mほど下にあったゴミ箱である。瓶は燃えるゴミのところに入った。

閑話休題。

(人の流れが……不自然だな)

そう、まるでそれが自然であるかのように人の移動が制限されているのだ。

他の場所は学生達が普通にひしめいており、自動車は動き回っている。だが、ある一区画のみ、誰も通っていない所があった。

見たところ交通規制をしている訳でもなく、当然のように皆がそこを避けて通っていた。

少しでも気を抜けば自然と感じてしまいそうな所が非常気味が悪い。

あまりにも不可解な状況に恭弥は熟考する。

そしてまず思い付いたのが、ある『木原』が得意とする化学薬品による精神誘導。

しかし、その実験がこれほど大々的に行われるという事は最近ハックして見た機密事項の中には無かった。

次に思い付くのが、それを扱う事で他の実験を行うための人払いをする、というもの。

だが、それは立て札を立ててしまえばそれで済む話であり、わざわざ薬品をふんだんに消費するメリットなどない。

分からない……分からない……分からない……これか？……いや、効率が悪い……分からない……分からない……これか？……違う……分からない……こういう事か？……いや、無駄が多い……分からない……分からない……

結局、考えても分からないと結論を出して、好奇心に任せその一区画へ向かう。

(ま、いずれにせよ実験はやってるでしょ……どんな実験かな)

野次馬魂全開である。  
すると、

ドガアアアアツツ!!

風力発電のプロペラがスッパリ斬れて橋に突き刺さって行くのが視界に入った。

(ウォー！風力使いか？あんなこと出来る奴書庫バンクに登録されてたっけ？)

ザツと記憶を思い返してみるも元々あまり興味を持って見た訳でもなかったので、該当するような人物が思い当たらない。

判断材料の足りない現状に思考を切り、空を駆けて向かう事に専念した。

「七閃」

「ぐあああああー」

現場には二名の男女が対峙していた。

ついでに緞旗風に言つと女性の方は超良いカラダである。

(名も知らぬ男よ……あんな別嬪さんに殺されるなんて羨ましい限りだなあ……………)

二名が「ちやちや」やっているのにも全く気に留めず、訳の分からない事を考える恭弥。

いや、分からなくも無いが……ともかく完全に野次馬である。

頭の中の妄想を爆発させて悶える彼のキモさはレベル5。

「もういいでしょっ?」

「ガッー」

(なっ!?足蹴プレイ!?)

くっそ!俺と代われ!いや、Mではないですけども……

つか俺があ姉ちゃんを踏みたいなあ……………)

なんて煩惱だらけの人間なのだろう。もう少しマトモな思考がでないのだろうか?

いくらなんでも酷すぎる。もう目も当てられない。

「うつせえんだよー!ド素人が!!」

そんな女性の叫びに恭弥は漸く現実に戻された。

どれどれ?と見てみると、



「春を過ぐしー夏を過ぐしー秋を過ぐしー冬を過ぐしー」  
「ガッ！ゴッ！グアア！」

少年がボコボコにされていた。うわあ、ありや痛いぜと内心少年に同情するも、出方を考える恭弥。

それとはかくどちらも感情的。  
とても実験とは思えない有様だ。

(…………ふむ、今日予定されている実験は特にないな…………二人ともあんなだし実験じゃなかったのか?)

野次馬しつつもちゃっかり携帯で調べていた彼。  
手元にある情報を瞬く間に整理して状況を把握する。  
そして彼が次に取った行動は、

「ストォ〜プ」

「えっ!？」

「……………は？」

二人の間に割って入る、というものだった。  
突然現れた男に戸惑い驚愕する二人。

それもそうだろうここ一帯には人払いの魔術が施されているのだ。  
故に女性と男性の両者、神裂火織と上条当麻はすぐに警戒する。

一方は得体の知れない科学サイドの人間に。  
他方は敵かもしれない新たな刺客に。

対して鵜沼恭弥は心の中で強く…ただ強く思う。

(ケンカ…………ダメ、絶対)

何人も人を殺しておいて何を今更、と言いたいところだが、常にその場のノリで生きている彼にはそんなツツコミなどなんのその。

とりあえず見知らぬ人間が割って入ったらこの痴話喧嘩も終わるだろう、と安直な考えで割り込んだのである。

完全に失策である。

今や先ほどとは比べ物にならないほどの緊張感が場を支配していた。

ヤツベエと頬を引き攣らせる沼恭弥。こんなんでも流石に空気は読める男。

故に現場を打開するために今までにないくらい全力でレベル5の脳味噌を回転させる。そして、一言。

「……………話は聞かせてもらったア!!」

嘘である。

## 6話「ピンチー！」

「……………話は聞かせてもらったア!!」

鵜沼恭弥はかつてないほど追い詰められていた。

いや、自ら死地へ飛び込んだと言った方が正しいかもしれない。

やはりレベル5と言えど高校生。

テンパってしまったてはマトモな策など銀河系の外に吹き飛んでしまふのだろう。

完全なる己の失策に自害したくなるも、ポーカーフェイスを維持して出方を伺う。

暫しの沈黙。

そして、警戒を一切解かないで神裂火織が口を開いた。

「……………貴方は何者ですか？ここ一帯には人払いの術式を施しています。普通ならまず入って来れないのですが」

(下手な事を口走ってみる。その瞬間切り捨てる)

神裂の目はそう語っていた。

背中を伝う嫌な汗。

全力で顔面の筋肉を動かし、ポーカーフェイスを維持して言葉を選ぶ恭弥。

そして、心の底から応える。

「俺は……………どんなことがあってもお前の味方であり続けると誓った男だ」

一ヶ月ほど前にやり終えたギャルゲーの言葉を引用した。  
あまりにもバカバカしい答え。

恭弥本人も、（あ、これ詰んだわ）と人生をほぼ諦めかけた。

が、状況はめまぐるしく変わる。

未だ警戒を解かない神裂火織が口を開く前に、若干空気だった上条当麻が恭弥に問う。

「あんた学園都市の生徒か？なんでこんな所にいるんだ？」

尤もな質問。

だが、これがきつかけとなった。

どんなに純粋な水を用意したところで、ほんの少し塩を加えてしまうとガラリと性質が変わる。

先ほどまで、神裂と恭弥のみの対話であった。

間にあっただのは命のかかった緊張感。それほどまでに濃密で誰も入り込む隙などない状況。

上条当麻は隅に追いやられていた、と言っても過言ではない。

だが、今やその上条当麻というイレギュラーにより僅かな異質がそこへ混ざり込む。

重要なのは異質の程度ではない。

混ざり込むことが重要なのだ。

この瞬間、たちまち場の空気が別のものへと切り替わった。

そして鵜沼恭弥はこのタイミングを逃すなどという事はしない。

恭弥にとって、会話の空気は重いものだろうと軽いものだろうと気にするものではないのだ。

彼が重視するのは切り替わるその瞬間のみ。

このような時、人は外部からの情報に無防備になる。

ある『木原』の精神誘導法を学習装置デスタメントによりインプットされていた恭弥は、しめたとばかりにそれを実践する。

「…俺はレベル5の第八位、鵜沼恭弥だ」

「なっ!？」

その告白に二人は驚愕に顔を染めたが、それに構わず恭弥は続ける。

「人払いの術式だかなんだか知らんが、上………空から見てるとな、人の流れが不自然の事に気づいたんだよ。

それにこの一区画に入ってくる際、何故か能力が暴走しかけたしな。

怪し〜と思って……きちゃいました」

面倒臭くなってきて口調がふざけたものへと変わる。

最早精神誘導など知ったこっちゃない、それが現在の彼の心情であつた。

なんとという投げやり感。だが残念なことにこれが第八位である。

「そうですね………ということは貴方は偶然ここへ来たということですね。

では気絶してもらいましょうか。

部外者は黙っていてくれると助かります!」

ゴッ!!

次の瞬間、強風が辺り一帯に吹き荒れた。

その中心には七天七刀を振り下ろす途中の体勢で止まっている神裂と、それを右手一本で受け止める恭弥の姿が。

「っ!？」

「おいおい、まあそう慌てなさんなって。

言っただろうっ?』話は聞かせてもらった』俺はお前達の味方』だと」

恭弥が握りしめていた七天七刀を離すと、神裂は一層警戒して間合  
いを開ける。

が、それを気にした風もなく、恭弥は続ける。

「お前らの抱えている問題、多分俺なら解決できるぜ?」

嘘である。

いや、正確に言えば分からない、と言っただ方が正しいだろう。

なんせ話を全く聞いていなかったのだ。どんな事で二人が揉めて  
いるのか恭弥は知らない。

解決できるかもしれないし、できないかもしれない。

では、なぜ再び墓穴を掘るような事をしたのか?

その理由は、

10%が『上手く誘導して話を聞き出すため』、

90%が『ノリ』である。

だが、この言葉が功を奏した。

「本当か!？」

「ほ、本当ですか!？」

まるで一ヶ月ぶりに肉を与えられたライオンのような二人の食  
いつきに恭弥は自信満々に頷くことで応える。

どっつして自信満々なのかはこの際突っ込まないでおっつ。

だが、まあ無理もない話である。  
両者ともに打つ手が無く、諦めの境地に足を踏み入れていたのだ。  
故に突如現れた希望に、深く考えずに縋り付くのはしょうがない事  
だ。

「ああ。」

とは言っても、もう少し詳しい情報が欲しいな。  
ってな訳でもう一回一から話して貰っていいか？」

こうして鵜沼恭弥は揉め事を把握した。

## 7話「魔術」

「ほほう、つまり完全記憶能力がアーで、頭がポポポーン。魔術がバビューンとアラホラサッサ……的な？」

「訳が分からないけど多分そうだと思う」

一通り説明を終えた後の言葉である。

不安が拭いきれないが、………いや、不安しかないが、もうこの際はレベル5という相手の脳味噌を信じる事にした上条当麻だった。

「でーどうなんですか!？」

「お、おっ……」

藁にも縋る思いで神裂火織は鵜沼恭弥の手を握りしめて上目遣いで問う。

このような女性の行動に対して大して免疫のない恭弥は珍しく戸惑いつつも応えた。

「まあ……解決できるかどうかは手元にあるカードによるね。ま、解決できそうではあるよ」

「「本当( )ですか!？」」

「ああ。」

一つ引っ掛かった点があるからなあ

一つ聞きたい。

そのインデックスっていう子は普通の子なのか？



人工的に魔術とかで作り出された子、とかじゃないよな?」

「あ、当たり前です!いきなり何を言いだすんですか!」

意図の分からないぶしつけな質問に神裂は激昂する。

それを宥めて恭弥は言う。

「おおおつ…落ち着け。気分を害したなら謝るからよ。

ま、それなら打開策はあるぜ。解決できるかどうかはお前ら魔術師にかかっているけどな」

「どっぴろいっことだ?」

「えーっとだな……10万3千冊の魔道書の記憶で脳味噌の85%を使っていて、残り15%は一年の記憶しか詰められない…とか言っ  
たっけ?」

「ああ。それがどうかしたか?」

「嘘だよ、それ」

「っ!」

根底から覆された、その事実。

言われてすんなりと信じ込んでしまったが、上条は確かに根拠が一切ない事に気付く。

科学も大して詳しくない魔術サイドがどうやってそのような数字を弾き出せるというのだろうか。

そして神裂はただ愕然とする。

今までの行動は全てそれが前提。

故に今までの行動が全て否定された事に等しかったのだ。

上条は大丈夫だろうと思い、恭弥は神裂を慮って少し間を開ける。手を優しく握り、背中をさすって落ち着かせてから再び口を開く。

ちなみにその際の心情は、

(神裂サンにボディタッチ！最高！)

流石、ゲスい。

やはり第八位も男であったという事だ。

閑話休題。

「そだね、何から話そうか……」

まずね、完全記憶能力、これは確かに珍しい体質だね。けどこれはそんなに絶望的なものじゃないよ。

一年間の記憶だけで脳の15%も使ったのはあり得ないからな。もし仮にそうなら完全記憶能力を持つ奴は6〜7年でパンクするって事になんדר？」

「た、確かにそうですね……」

「人間の脳って本来……えーっと……150年くらいだったか？」

専門家じゃねえから詳しい事は忘れたけど、まあそんなくらいの記憶が可能なんだよ。

詰まる所、記憶の詰め込み過ぎで脳がパンクするなんて事は脳医学上、あり得ないよ」

「ほ、本当か!？」

「ん、なんなら誰かに聞いてみれば？学園都市の教師ならある程度は

知ってると思うよ」

「ですが、現に彼女は苦しんでいましたよ!?最後に私達との記憶を消す時に!」

「だからアレだよアレ。」

『大きな力を持つ犬の手綱は握っていたい』ってヤツだ。

聞いた限りじゃ相当危険なものなんだろ?その10万3千冊の魔道書ってのは。

お前等のとこのトップはそんな危険因子を放って置くような間抜けた奴なのか?」

恭弥の言葉に上条は考える。

「つまり……インデックスの記憶を一年周期で消さないといけないような細工を教会側がしたってことか?」

「教会だの何だのとどういいう構図かはよく分からんがそういうことだ。」

どうせ魔術とやらが使われているだろうから神裂サン達魔術師がそれを解析して解除、ハッピーエンド」

その言葉は二人の背中を押す大きな推進力となった。

上条当麻は立ち上がって言う。

「そうか、だからインデックスが普通の人間かどうかを聞いたんだな。」

……インデックスに魔術が施されているってなら俺の領分だ。  
イマジンブレイカー

俺の右手は幻想殺<sup>イマジンブレイカー</sup>しって言って異能の力を打ち消すことができるんだ。これなら……」

ギツと握りしめられた右手にある思いな何なのか。

イマジンブレイカー  
（幻想殺しって……）

まあ後ででいいか）

上条の言葉に引つかかる恭弥だが、人前で堂々と書庫バンクやら機密事項やらをハックして閲覧する気にはなれなかったため、それは後回しにすることにした。

そして、神裂火織は静かに立ち上がる。

「彼らの事です。恐らくその魔術が破られた際に起動する迎撃魔術も施されているでしょう。援護します」

その鋭い眼光が見抜くものは何なのか。

今、二人の男女がたった一人の少女の為に立ち上がった。

「そういうことなら僕も協力させて貰おう。あの子がもう苦しまずに済むというなら」

違った。もう一人いた。

空気なんてものではないほどの影の薄さ。

と恭弥は思ったが、彼、ステイル＝マグヌスは先ほどまで隠れていたのだ。当たり前であろう。

さて、帰ろうか、とした時にふと気が付いた。気が付いてしまった。

三人の視線が恭弥に集まっている。

その目は『お前はもう部外者なんかじゃない。一緒にインデックスを助けよう』と語っていた。

え？マジ？と頬を引き攣らせるが、空気は読める男。

「ここで引いては男が廃る。

」よし、全て任せた。

……俺はお前等を見守っている！」

それでいいのか第八位。

だが、三人の脳内では以下のように変換されたこの言葉。

『よし、魔術関係は全て任せた。

……他の分野では俺がカバーできるように見守っていてやるから  
存分に力を振るえ!!』

上条当麻、神裂火織、ステイル¨マグヌスが力強く頷いたことに戸  
惑うも三人に付いていくのだった。

\*\*\*\*\*

現在、

上条当麻、インデックス オロオロ

神裂火織 号泣

ステイル¨マグヌス ショボーン

鵜沼恭弥 携帯ピコピコ

事の発端は四人が上条当麻の教師、月読小萌のアパートを訪れイン  
デックスと合流した事による。

出会った瞬間、上条を庇う様に両腕を広げて立ちはだかるインデックス。

続けて土下座して号泣しながら懺悔を始める神裂。同様にステイルもシヨンボリしつつ懺悔した。

ついでに言えば上条がなにやら『ちよつと長いプロローグで絶望してんじゃねえよ』などと説教もしていた。

そして今、上記のような状況になっていた。

(『帰りが遅くなります。ご飯は作れそうにないのでコンビ二弁当で我慢してください』っと)

お母さんが、と突っ込みたくなるようなメールを『アイテム』の全員に送りつけると、すぐに返信が返ってきた。

『from:シヤケ弁

アンタが飯を作ってくれた記憶がないわ  
とりあえず了解

ブ・チ・コ・ロ・シ・確・定・ね』

『from:結局、金髪

結局、逃げたって訳ね！見つけたら爆破してやるんだから！』

『from:超超超C級

超訳が分からないメール有難うございます  
超了解です

P・S・超死んで下さい』

『from:ジャージ

分かった。私はそんな恭弥を応援してる』

(ふむ、……『大して面白くない。全員やり直し』っと)ピアッ!!

「……………へ？」

恭弥が送信を押そうとした瞬間、光線が走り携帯の上半分が消し飛んだ。

『セントジョージの聖域』は侵入者に対し――」

「え？これどういう状況？」

今、右手側にはインデックスが、左手側なら上条、その後ろに神裂とステイルが。

ビームはどうやらインデックスが放つたらしい。現在進行形で上条当麻の右手に射出されているが。

上条が魔術とやらを破壊して迎撃術式とやらが発動したのね、と把握するのに大して時間はかからなかった。

「何をしているんですか！そこは危険です！」

「あ、ハイ……………いつづ！」

神裂の言葉に従いいそいそとその場を離れるが、その際に光線に触れたところ、“痛みを感じた”のだ。

おかしい。彼は全てのエネルギーを上方へ逸らそうとした筈だ。

おかしい。本来なら彼には少しのダメージもないはずだ。

(これが魔術か……………)

自分の演算では間に合わないエネルギー。故に恭弥がそのことを認識するまでにそう時間はかからなかった。

実際、先ほどまで魔術とか馬鹿じゃねーの？学園都市に来てまで宗

教やっつてんじゃねーよ、と全く信じていなかった彼である。  
自分では手に負えない異能。下手をすれば待つているのは死。  
逃げようと決心し、冷や汗をかきつつ窓から逃げ――

「救われぬ者に救いの手を  
Salvare0000!!」

「のわぁぁぁぁ!!」

――られなかった。

神裂が床を切り裂いたことによりインデックスと共にコケたのだ。  
痛つ、と頭と腰をさすりつつ体勢を立て直して周囲の状況を把握す  
る恭弥。

見れば、光線は天井を突き破って空を突き抜けていた。  
すると空から光の羽が舞い落ちてきた。

ふわりふわりと宙を漂い、儂げで美しく光り輝く幾つもの羽。  
皆が茫然とそれを眺める。

「なんじゃこりゃ?」

そんな中、疑問に思い恭弥はそれに手を伸ばし――

「これは……ドラゴンプレス!? 伝説にあるドラゴンの一撃と同義です!  
それにたった一枚でも触れてしまえば大変な事に――」

「うぉおおお!! 怖ええええ!! 危ねっ――」

一瞬でその手を引っ込めた。

神裂がいなければ今頃彼の左手は吹き飛んでいただろう。

ここは一応感謝し、彼らに協力すべき場面である。

が、もうやっつてられるか、と逃走ルートを探し出す恭弥。  
流石、ゲスい。



しかし、すぐにインデックスが糸に吊られているかのように起き上がった。

再び光線が上条を襲う。

そこへ、

『インケンティウス  
魔女狩りの王』！』

ステイルが自慢の炎の巨人を上条の前に出現させる。それは目の前の、たった一人の少女を守る為に構築された魔術。今、彼の信念の塊が伝説のドラゴンの一撃を受け止めた。

「いけー能力者！」

「うおおおおお!!」

ステイルの言葉が合図となり上条当麻は雄叫びをあげてインデックスの下へ駆け出す。

「警告。」

第六章十三節。新たな敵兵を確認。戦闘思考を変更。戦場の検索を開始。

完了。

現状、最も難易度の高い敵兵、上条当麻の破壊を最優先します。

最も有効な魔術の組み込みに成功しました。これより特定魔術、『アルテミスの矢』を発動。」

インデックスの口から機械的な口調でその言葉が漏れるのと同じだった。

彼女の周囲に多くの黄金の矢が何本も展開された。

「止まって下さい上条当麻！」

それは動く者に照準の合わさる矢です！」

「なんだと!?!」

慌てて立ち止まる上条。

あと数歩で手の届く距離にあるのにそれが果てし無く遠く感じる。動けないことにやるせなさを感じ、歯噛みする。

そして、このままでは『魔女狩りの王』が逆算され、破壊されてしまつのも時間の問題であるため、膠着状態に陥ったことにステイルは舌打ちする。

だが、その状態は長くは続かなかつた。

『魔女狩りの王』が破壊されたのではない。

——黄金の矢が一斉に射出されたのだ。

上条当麻、神裂火織、ステイル、マグヌスは息を飲む。

おかしい。誰一人動いていない筈だ、と。

では誰に向かつて『アルテミス』の矢は放たれたのか。

答えは悲鳴という形ですぐに出た。

「じゅおおおおおお?」

そう、鵜沼恭弥である。

三人が三人とも目を見開く。

このままでは不味い状況に陥るとはいえ、それを覆すためにたった一人で一番危険な役目を引き受けたのだ。

しかも彼は魔術に関しては何もつきりのド素人。

故に三人とも彼の勇敢な行動に敬意を表し、また感謝する。

しかし、良く考えてみて欲しい。レベル5の第八位、彼がそんな自らの命を危険に曝すような行動をとるだろうか？  
答えは否である。

先ほどの神裂の説明、もちろん彼が聞いていた訳がない。  
つまり恭弥は逃げ出そうとしたのだ。匍匐前進で玄関に向かって。

結果、

「よっー危ねっ！ほっー！くそっー！」

飛来する全ての矢を避け、逸らし、全てを捌く羽目になった。  
もちろん能力は使っていない。使っても無駄であることは分かっているのだ。

従って、恭弥は実験の一環により得た身体能力、それをもって全てを捌ききる。

彼が生まれて初めて学園都市のドロドロとした研究に感謝した瞬間だった。

全てを知る者ならざまあみると爆笑するところだろう。

「恭弥！ナイスだ！」

ハッとして現実に戻り、チャンスとばかりに上条はインデックスに駆け寄る。

そして、――その右手で彼女の頭に触れた。

ピキユンッ……

そんな音が聞こえた。

「警、こく。最終……章。第、零 ……。『首輪』、致命的な、破壊……再生、不可……消」

ブツン、とスイッチが切れたようにインデックスは意識を失う。

魔法陣が消え、それが全ての終わりを告げる。

インデックスのあどけない寝顔に一名を除いて安堵する面々。

(あ？終わったの？)

……なんだこれ？訳ワカンネ)

果てし無く残念な第八位。

しかも自分が大きく戦況を覆した自覚がないのがどうしようもない。

その時、ふわりと白く輝く羽が上条とインデックスに降りそそぐ。

神裂が何かを叫んだ。

上条はそれに反応するが、羽はゆらりゆらりと宙を舞い、非情にも彼の頭に舞い落ちた。

## 8話「ウチ来る？」

### 第7学区の大学病院。

ここは恭弥が信頼できるという蛙顔の医者が勤務する病院であり、上条当麻の運びこまれた病院である。

その病院の前に建つ建物の屋上に、三人の人間がいた。

金網に腰を下ろしてホットドッグを囓る鵜沼恭弥。

その金網に寄り掛かるようにして立つ神裂火織と別の場所に立ち煙草を吸うスタイル「マゲヌス」。

現在、口を開いてグチグチとインデックスの処遇に対する愚痴を零しているのはスタイルであった。

いい加減ウンザリした恭弥は神裂に話しかける。

「神裂、あのロリコンどうにかしてくんね？」

「済みません……彼は彼女の事となると……」

そんな返答に、はあと溜息をつき空を見上げてホットドッグを食べ切る。

すると神裂が恭弥に尋ねた。

「貴方は……どう思いますか？彼女について上が下した判断について」

「知らね。」

「ま、考えられる限りでは様子見ってところが妥当な線だと思っけどね。」

つつても俺は魔術側について殆ど知らないからな。  
全く分らない、って言うのが正解だな。  
俺の考えなんて当てにしない方がいいよ」

「そうですねか……………」

恭弥の返答はある程度予測していた物だったのだろう。

大して落胆した素振りも見せずになんか言っただけで一旦言葉を切る。

そして改まった様子で彼女は続ける。

「貴方には何かから何までお世話になりました。感謝してもしきれません。本当にありがとうございます」

「……………どうした、急に？」

別に大した事してないと思うけど……………」

突然の事に戸惑う恭弥。

当然の事だろう。本人としては何か手助けした記憶など何も無いのだ。

強いて言えば教会側の嘘を見破った事と上条当麻の入院を手配した事ぐらいであり、感謝される程のものではない。というより途中で逃げようとしたのだ。むしろ責められるだろうと思っていた。

だが、それは彼の視点から見てのことである。

対して、神裂火織からは鶴沼恭弥はこう見えていた。

長い間自分達を苦しめていた嘘をいとも容易く見破り、教会の目的までも看破。

さらに危うい戦況を自分の命を賭けてまで覆し、上条の入院も瞬く間に手配したスーパーマン。

しかも上条当麻とは違い、インデックスと共に過ごした訳でも、彼

女達の中に顔見知りがいる訳でもない完全なる部外者だったのだ。

故にどうしようもないほどの感謝の念で彼女の胸はいっぱいだっ  
た。

「……………器の大きい人ですね……………」

神裂にポツリと呟かれたその言葉は誰に聞かれる事もなく虚空に  
消えゆく。

恭弥は怪訝に思いつつも、感謝されているならそれでいいかと話題  
を変える。

「ま、いいや。」

で？お前等この後どうすんの？ウチ来る？」

そんな軽く放たれた言葉。

実はかなりヤバいものである。

ウチ、というのはもちろん『アイテム』の拠点のことだ。

つまり現在、魔術サイドの暗部を科学サイドの暗部が拠点に招き入  
れようとしている。

彼はアホなのだろうか？

アンダーライン  
滞空回線で状況を見ていたとある人物が、珍しくギョツとしたことは  
言っまでもないだろう。

それを知ってか知らずか、神裂は恭弥の申し出を断った。

「いえ、遠慮させていただきます。」

私達は今日中にイギリスへ戻るのぞ」

後日、『必要悪の教会』に学園都市製最新型掃除機が二台送りつけられた事は余談である。

「あそ。ま、そんなじゃお疲れ様。

……………俺も知り合いが来たしサヨナラだ」

眼下にはふわふわしたニットのワンピースを着た絹旗最愛が歩いてた。

丈が短くかなり際どいが、本人により見えそつで見えない角度に調整されており、最近恭弥が最ももどかしく思つもの一つとなつてゐる。

彼女を目で追いつつそつ言つ恭弥に神裂は別れを告げる。

「そつですか。では、また会えることを願つて。

行きますよ、スタイル」

「……。それでだね、ん？もつそんな時間かい？ならしょうがないね。

おい、くれぐれも彼女に手を出すなよ？」

「出さねえよ、ボケ。じゃあね」

そつてカツン、と静かな音がした。

そこにはもつ誰もいなかった。

\*\*\*\*\*



恭弥達のいる大学病院と同じ学区には、学園都市の中でも一際奇妙なビルが建っている。

窓のないビル。

その言葉が示す通り窓はなく、それどころかドアや排気口など、外部と繋がる出入り口は一つも存在しない。

外壁は『演算型・衝撃拡散性複合素材』という、電磁波や紫外線を使用して向かってくる衝撃のパターンを計測、最適な振動を生み出して衝撃を相殺する、核すら凌ぐ最硬の素材が使用されている。

人が出入りする建物としては全く機能しないこのビルは、大能力者クラスの空間移動がなければ中に入ることには出来ないという堅固さ。

まさに鉄壁。それ以外の形容が合わないほど、その言葉を体現した建物。

室内と呼ぶには広過ぎる空間には照明が灯っていないが、部屋の四方を覆うように配された電子機器から発せられる光である程度の明るさは確保されていた。

それらの機器のケーブルなどは全て部屋の中心に集められている。

部屋の中心にあるのは、人一人容易く収める事が可能な巨大なビーカー。

その中には、このビルの異質さが霞んでしまうほど、異質な人間が入っている。

銀の長髪で緑色の手術衣をその身に纏い、逆さまに浮いているその人間。

男にも女にも見え、大人にも子供にも見え、聖人にも囚人にも見える彼は、あたかも異世界から連れてきた人間であるかのような異質さ

をその身に纏っていた。

学園都市統括理事長、アレイスター・クロウリー。

誰もいない空間に彼の声が響く。

『イマジンプレイカー幻想殺し』の方は予定通り。『アーセナル因果律』の加入は予想外だったが、プランに支障はない」

少し目を閉じて思考した後、彼はビーカーの壁面に映し出された幾つもの映像とグラフを見て愉快そうに笑うのだった。

## 9話「御坂のターン」

「ちょっと待ちなさい!!」

「ハハハ、やなこった」

現在、鵜沼恭弥は真昼間の学園都市を疾走中である。

後ろからの雷撃をひよいひよい躲して大通りに出た。

飲み干した『H A H A H A お茶あ』のペットボトルを近くの回収口  
ボットに投げつけようしようか考え、

「……直後、ハツとした。」

(うそーん) 、 ( ……ペットボトル捨てなきゃよかった)

アホを体現したかのような第八位。

絶縁体であるペットボトルを投げ捨ててしまった事を後悔する恭

弥だが、時すでに遅し。

取り敢えず直線に逃げるのはマズイと判断し、角を曲がった。

ちなみに普段から能力を使うという考えはない。だって詰まらな  
いじゃん、というのが彼の言い分である。

閑話休題。

そして、――

ドガンツツ!!

背後から爆発音が聞こえてくる。

えっ？と思い振り返ると何かが爆発したようで電撃少女が足止めされているのが見えた。

チャンスとばかりに裏路地へ飛び込み、ジグザグと適当に別れ道を選んで走り回る。

右へ曲がり、左へ曲がる曲がる、曲がる、曲がる。壁を飛び越え、ピルを飛び越える、越える、越える。

非常に複雑な経路を走り抜け、最終的に(よっしゃ！撒いたぜ！)と意気揚々に大通りへ飛び出た。

「次に見かけたら……ただじゃおかないわ」

「」

目の前には煙と炎を上げている爆発源と先ほどまで自分を追い回して少女の背中があった。

(……………うそーん(、)……………)

\*\*\*\*\*

名門女子中学の常盤台の制服を着込んでいる茶髪を肩までのぼした少女、御坂美琴は激昂していた。

原因は目の前を疾走する少年にあった。

先日の夜中、もう何回目になるか分からないが、彼女は一晩で三つもの研究所を再起不能にまで破壊してきたばかりであったりする。

その訳は、『絶対能力進化計画』という、残虐な計画を破綻に追い込む為である。

その計画の内容は、レベル5の第三位、『超電磁砲』<sup>レベルガン</sup>の異名を持つ彼女から造られた二万体のクローンを第一位、『一方通行』<sup>アクセラレータ</sup>二万通りの戦場で殺害させることで、彼を絶対能力<sup>レベル</sup>という『神の答えを知る存在』<sup>マ</sup>で引き上げようというものだった。

これを知った御坂美琴は愕然とした。そしてすぐに決意する。

「――実験を中止させよう。」

人格破綻者の集まりなどと呼ばれているレベル5の一人であるが、御坂美琴は優しく思いやりのある少女である。

故に、たとえ単価十八万円の命であろうと、

たとえクローン達のアイデンティティがその実験により確立されていようと、

たとえ気味が悪いと感じてしまった自分のクローンであろうと、御坂はそれを良しとしない。

学園都市を敵に回す事になるとしても、彼女の意志は曲がらない。

施設を悉く破壊し、研究を完膚無きまでに叩き潰す事に今の彼女は全力だった。

そんな時、ポツリと聞こえたこの言葉。

「――ん？おお、あいつと闘って生き延びたんだなあ」

え？と思い振り返ればこちらを感心したように眺めている少年の姿。

「――彼は間違いなく私に言っている。」

そう確信したのと同時に御坂の中で何かが切れた。

睡眠不足が祟ったのだろう。精神疲労が祟ったのだろう。肉体の疲労も原因の一つであろう。

「アンタも……あのイカレた計画に加担しているのね!!」

彼女は怒りに任せて雷撃を放っていた。

だが、少年は首を横に倒すことでも容易くそれを避けた。

「よつと……ん？これだけの火力があつて何で銃なんか持ってたんだ？」

疑問を口にする恭弥だが、それが御坂の耳に届く事はない。

目を見開き、驚きを隠せない御坂。

なぜなら音速など軽く超える速度の雷撃を容易く避けたのだ。

その事実を受け入れた瞬間、彼女は思考を切り替えた。

彼に触れて直接電気を流し込む、という方針に。

結果、ここに学園都市限定、レベル5鬼ごっこが幕を開けた。端からすればいい迷惑である。

いくら走っても詰められない距離に歯噛みするも、雷撃を放ちつつあらゆる手を考える御坂。

すると、前方の少年が突如投げたペットボトルに目が行った。たまたまであるが、何となく気になったのだ。

「……いや、訂正しよう。」

350km/hで投げ出されたペットボトルである。目が行かない方がおかしい。

周囲で見えていた通行人もギョツとしてそのペットボトルに視線を

向けた。

そして、――

ドガンツツ!!

――ゴミ回収ロボットに突き刺さり、爆発させた。

流石、ギャグパート。

御坂本人は至って真面目だが。

ゴミが飛び散りロボットの破片が宙を舞う。

それに気を取られている間に追っていた少年を見失ってしまった。  
ギリ…と歯を食いしばって憎々しげに御坂は呟く。

「……………ありふれた日用品で爆発を起こすなんてやるじゃない。完全に意表を突かれたわ。……………次に見かけたら……………ただじゃおかないわ」

ちなみに彼、鵜沼恭弥のためにも言っておこう。

彼にそんな狙いは無かった、と。

彼は普通に捨てようと思ったただけなのだ。少し余裕がなく、力の加減を間違え能力をちよつと使っただけで。

結局、ゴミを撒き散らす結果となったが。

あらゆる行動が裏目に出る。

それがこの街の第八位である。

\*\*\*

「次に見かけたら……ただじゃおかないわ」

どうやら適当に道を選び過ぎて元の場所に戻ってしまったらしい。目の前の少女の言葉に戦慄する。

あまりの恐怖に何もできず、ただガクブル……………することはなく、ここにて能力を行使。

彼から外部へ漏れ出るあらゆるエネルギーをシャットアウトし、自分の中に取り込む。

微弱に漏れ出る生体電気、それに伴い形成される磁場、生命活動により放出される熱や音など。

外部へ自己の存在を知らしめる要素、それら全てを完全に断つ。こうすることで、恭弥は果てし無く影の薄い存在となり得る。

今の彼は周囲から見て、そこら辺にあるただの無機物に近い存在であり、意識しなければ捉えられないような人間となったのだ。

そのままそつとその場から離れて近くのコンビニへ入って行った。もちろん『ワカチコ。ワカチコ』と呟きながら。

一言言いたい。そこは『エンガチヨ。エンガチヨ』だろ。

汚物扱いされた御坂は涙目である。

\*\*\*\*\*

「おろ？また会ったな、雷撃ガール」

「アンタ……………!？」

夕方時、しばらく歩き回った先で、恭弥は再び御坂美琴に遭遇した。あれから用事を終え、一休みしようと公園に入ってボロボロの自動



販売機からジュースを買おうとしたら、当然の如く十八万円飲まれた時に御坂がやって来たのだ。

桁がおかしい。

おかげで一方通行からパクった金がパーである。

悪銭身につかず、とはこの事であろう。

というより全財産飲み込まれる前に金の投入を止める、という選択肢は無かったのか問いたい。

取り敢えず恭弥は全財産飲まれたのが気に食わなかったので、自動販売機に蹴りを入れた。

エネルギーを変換、種類と方向性を指定、望む現象を引き起こす。

結果、恭弥の飲みたかったジュース、ヤシの実サイダーが出てきた。

が、現象はそれだけに収まらない。

お釣りとして二十万円を引き出した。

桁がおかしい。

普段、目の前の自販機に蹴りを入れていたとはいえ、流石にこれには御坂も頬を引き攣らせる。

「……それ犯罪じゃないの？」

「全部飲まれた分だ。それを取り戻して何が悪い」

恭弥はそう言つとヤシの実サイダーを一口飲む。

飲まれた金額は十八万円。

引き出した金額は二十万円。

しかも元々の金は第一位から掠め取ったもの。

完全に犯罪である。

まあ暗部での仕事が完全にボランティア活動となっているため、上層部は恭弥のこのような些細な行動には目を瞑っているが。

「ふう、飽きたな。これやるよ」

「えっ！ちよー！……っとうん……」

投げ渡すな！中身が零れるでしょうが!!」

驚きである。まだ彼は一口しか飲んでいない。

御坂は驚きつつも、投げ出された缶ジュースを中身が零れないように受け取る。

そして、少し逡巡して口を開いた。

「……アンタ、あのイカれた実験の関係者でしょ？」

「いや、違うよ。何言ってるの？アホなの？」

取り敢えず、恭弥は嘘を吐く。

というより判断材料が非常に少ないのだ。

学園都市で行われたイカれた実験など既に三桁後半まで突入しており、現在行われているものでも二桁はあるのだ。一つだけ思い当たるものがあるが、御坂がその実験の事を言っているのか、または別の実験の事を言っているのか全くわからない。

従って、面倒事は可能な限り避けたいため、無難な言葉を選んだのだ。

「……え、違うの？」

「違う違う。一応、その実験が行われている、って事は知ってるよ。俺はただ、君が一方通行と一戦交えていた所を見ただけだ。憶えてない？」

「えっ？……ああ、ああ！あの時ね！」

鎌をかけてみたが、どうやら考えていたものと一致したようだ。後で調べてみよう、と頭のメモに留めておく恭弥。

一方、恭弥の言葉に御坂は彼がたまたま実験を見かけた一般人である事を理解した。そして、実験の内容から彼が何を言っているのか把握した。

「……恭弥はあの時見たクローンを自分だと勘違いしているのだと。」

慌てて取り繕うその様子に恭弥は僅かに眉をひそめたが、特に気にした風もなくボケっと赤く染まる空を見上げる。

御坂はそれを見て、怪しまれ無かった事に安堵しつつ、彼に問答無用で電撃を放った事を思い出した。彼女の顔から血の気が引いた。

「あ、あの……！」

さっきはいきなり攻撃してすいませんでした！」

「へ？……ああ、あれね。」

本当だよナー。街中でいきなり雷撃放つとかバカなの？」

少しイラっとくるが、恭弥の尤もな言い分に何も言えず、御坂はただ反省する。

そんな様子を視界の端に収め、ま、別にいいよ、と恭弥は続ける。

「間違いは誰にでもあるぞ。見たところ中学生だろ？」

その制服……えーっと……

……『ハリボテ牧場』だっけ？」

「……………」『常盤台中学』です」

「ああ、そうそう、『ちくわ横丁』だろ？」

名門中の名門じゃねえか。

今後はその名に泥を塗らないように気を付けりゃいいぞ。

間違えたあと、どうするのか。反省して改善するのか、気にせず同じ事を繰り返すのか。大事なそこだよ」

鵜沼恭弥にしては珍しくかなりマトモな事を言っている。

が、ある一点により果てし無く台無しになっているのがどうしようもない。

どこをどう捻ったら『常盤台中学』が『ハリボテ牧場』やら『ちくわ横丁』になるのか甚だ疑問である。

分かり切っていると思うが、そんな学校は学園都市には無い。

馬鹿にされてるのかと思う御坂だが、本人は相変わらずボケっと空を眺めたままであるし、実際に非は彼女にあるので頬を引き攣らせて頭を下げた。

## 10話「シーザーサラダ」

「よつと、待たせたか？」

「いえ、超来たばかりなのでお気遣いなく」

あの後御坂と別れ、彼女の言う実験の詳細を知るために近くの研究所に乗り込んでやろうか、と思ったため、そっち方面に歩を進めていた。

いつも機密事項を閲覧しているという恭弥だが、いくらなんでも携帯では限界があり、何処かに繋なれば詳細は閲覧出来ないのだ。

能力を用いて『電撃使用』<sup>エレクトロマスター</sup>のように無理やり保護プログラムをこじ開ける事も出来なくはないが、その際に消費されるのは自身のエネルギーであり、普通の『電撃使用』<sup>エレクトロマスター</sup>より遥かに疲れることになる。

詰まる所、

(かったりい…けど気になるから研究所行こう)

これがその時の恭弥の心境だった。

ちょっとコンビニ行こう、ぐらいの気軽さで第五学区内で最も堅固なセキュリティの敷かれた研究所へ向かうその姿は、やはり彼がレベル5であるということ物語っていた。

そんなところで携帯にメールが入った。

『from:沈リーナ』

最初に会った時のファミレスに集合』

との事だったため、詳細は後回しにしてファミレスへ向かうことにしたのだ。

四人は既に座ってドリンクを飲んでおり、恭弥はとりあえずとシーザーサラダを頼んで視線で麦野に仕事内容の説明を求めた。

\*\*\*\*\*

「ほほう、詰まりその組織を……………シーザーサラダやるよ。」

……………詰まりその組織を壊滅に追い込み密売を中止させればいいのですな?」

「……………シーザーサラダ超いららないんですけど」

「……………そういう事だけどその口調どうにかならない?」

「どうにもなりませんな。」

拙者、裏の仕事の際にはコレで行こうと心に……………シーザーサラダやるよ。

……………裏の仕事の際にはコレで行こうと心に……………(あれ?どんな口調だったっけ?)……………心に決めていたんだべさ」

「……………シーザーサラダ超いららないんですけど」

「オイ、早速口調変わってるぞ」

「結局、もうシーザーサラダは飽きた訳よ!!なんで恭弥は二十四皿も頼

んだの!？」

現状の描写、カオスである。  
この一言に尽きる。

まず、事の発端は恭弥がシーザーサラダを二十皿注文した所まで遡る。

店員は絶句し、啞然とし、言葉を詰まらせた。  
が、頼まれたからには出すのが彼らの仕事。  
故に迅速にシーザーサラダ二十皿を暗部『アイテム』のテーブルまで持っていった。

続けて頬を引き攣らせる麦野、絹旗、フレンド。  
ドヤ顔で『俺の奢りだ』と言われても、シーザーサラダ二十皿である。  
笑うしかない。いや、最早笑えない。

結局、一人五皿ずつ分けて食べることになったのだが、恭弥は二皿食べた時点で絹旗に押し付け始めた。

麦野は一皿を残して全てフレンドに押し付けた。  
静かに黙々と食べているのは滝壺だけである。  
そんな彼女達を放って元凶とリーダーは仕事の話 시작했다。  
無論、絹旗とフレンドの顔には絶望が浮かんでいる。

通り過ぎる客はこのテーブルを見た瞬間、皆が皆、同様にギョッと  
した反応を示してそそくさと離れていく。

生き地獄、晒し者、とはこの事であろうか。

フレンドと絹旗が、

(<sup>エリ</sup>神よ、<sup>エリ</sup>何故私を見捨てたのですか<sup>レマ</sup> )  
<sup>サバ</sup>クッタニ  
と思い始めた時、それは起きた。

ピーーーーー。

突然静かな、だがよく響く音が鳴った。

五人とも怪訝そうに眉をひそめる。

そして、刹那――

ドゴオオオオツツ!!

――彼等の座っていたテーブルは爆発により吹き飛んだ。

\*\*\*\*\*

とあるファミレスの外、建物の影にタバコを加えた一人の男が佇んでいた。

黒いスーツにグラスンをかけていかにも『ワタシ暗部デース』と言わんばかりの格好。

そんな彼の視線の先には悲鳴が上がり、多くの人間が出てきている炎上中のファミレス。

「爆発を確認しました。……………ええ。きちんと爆発しています。」

……………しかし、彼の能力から考えて生きているなら爆発は抑えられると思うのですが。

……………わかりました。死体が確認出来なかった場合、連絡します」



そう言って携帯を切った彼は懐に手を伸ばす。  
そこには一丁の拳銃。

最悪の場合、彼はこの頼りない鉄オモチャの塊で人間兵器に対抗しなければ  
ならないのだ。

まともにもやり合えば死ぬ。

が、上の命令は絶対。

背けばそれ相応の仕打ちが待っている。

心を落ち着け、拳銃を引き抜いて人目に付かないように移動を開始――

「シーザーサラダだべさ」  
「!？」

――する直前だった。

突如顔面に叩きつけられる平らな硬い物体。

わしゃわしゃとした物が間に入っており衝撃は和らいだが鼻は折れた。

こんな半端な攻撃をしてきて、相手の意図は何なんだ？と彼は思うが、直後、別の物に気づく。

何かの液体が付着しており、それが目に入って染みただ。

硫酸？硝酸？王水？学園が開発した毒物？

瞬時に様々な考えが巡るが痛みが顔にやって来ない。

取り敢えず拳銃を前に向けようとす。

が、何故か腕が上がらない。

そして、ようやく硬い物体がずり落ちた。

目の前には、何度も資料で確認した顔が並んでいた。

獰猛な笑みを浮かべる第四位。

ニヤニヤとしているフレンダ＝セイヴェルン。

先ほどまで自分が持っていた筈の拳銃を握り潰す絹旗最愛。

ポーっと突っ立っている滝壺理后。

シーザーサラダを豪快に食らう第八位。

そして視線を落とせば、

「……ああ、シーザーサラダだったのか……」

野菜が転がっていた。

「ちょーっと話を聞かせてもらっていいかなー？」

第四位の言葉に目の前が真っ暗になる。

「だめだべさ、妻のん。拷問には手順ってモンがあるんだべさ。おらに任せるべさ」

第八位のその言葉とともに死んだ方がマシと思えるほどの苦痛のスパイラルが彼を襲った。

\*\*\*

五分後、恭弥は千切れた右腕を脇に放り投げ、口を開いた。

「やっば、あの情報ダミーだったねー……………ってどうした、お前ら？」  
四人を見れば皆が青い顔をして口元を抑えていた。

「……アンタえげつないわね……………流石に私でもあれはちょっとくるわ……………」

「……口を割らないのが超常識の暗部の人間に五分で喋らせるとか……………超吐きそうなんですけど……………」

「……………結局……………恭弥の拷問はもう見たくない訳よ……………」

「……………体晶使わずにここまで気分悪くなったの初めて……………」

あれまー、やり過ぎたか、と少し反省する恭弥。するとそこで全員の携帯が鳴った。

しかし、全く出る素振りを見せない『アイテム』のメンバー。  
遂に痺れを切らして恭弥は麦野に尋ねた。

「……………沈リーナ、出ないの？」

「……………その呼び方やめてくれない？  
出る気がない時は私は出ない」

「絹ちゃんは？」

「超面倒です。……………絹ちゃん……………」

「ベレ金は？」

「……………何その出目金みたいな渾名……………麦野が出ないなら私が出る必要はない訳よ」

「タツキーは？」

「……………私が出るまでもない」

「え？」

滝壺の返答に、お前キャラ違くない？と少し戸惑う恭弥だが、いつまでもピリピリピリピリなり続ける携帯が鬱陶しくなり、溜息を吐いて出ることにした。

途端、皆の携帯の音が途絶える。

「はあ……………もしもーし」

『ちょっと早く出なさいよー！こっちだって忙しいんだからーっ!!』

周囲にいる麦野達にもしっかり聞こえる大音量の声が恭弥の携帯から飛び出てきた。

声の主は女性のもので、いつも『アイテム』に指示を出してくる謎の人物である。

そんな人物の不愉快な声量に顔を顰め、恭弥は応える。

「……………フェッフフェッフエ……………『アイテム』のメンバーの事か？彼女達なら始末しましたぞ？」

ギョツとする麦野、絹旗、フレンド、滝壺。  
それもそつだろつ。

もう仕事は始まっていると言っても過言ではない。

いや、襲撃された事から、命の奪い合いがスタートしている事は確実なのだ。

それにもかかわらず、こんな冗談を言う目の前の男の神経が信じられない。

そして、電話をかけてきた女性はそんな三文芝居に容易く騙された。

『えっ!?嘘!?!』

「嘘じゃボケ。

お前、暗部舐めてんのか!!」

『え?なんで私が怒られてるの?私なんかしたっけ?』

「じゃ、用事がないようだから切るよ」

『えっ!?ちょ!まっセー!』ベキッ

恭弥は携帯をへし折り、脇へ投げ捨て麦野に指示を出すように促す。

啞然としていた麦野だったが、いち早く現実に戻ってきてきて口を開いた。

「そうね、じゃあ恭弥は車を調達してきてくれない?」

「そう言うと思ってもう用意してました」

「……………行くわよ」

## 11話「これが暗部」

「結局さ、水着って魅せつけるのが目的だから誰もいないプライベートプール行っても意味ないってゆーかぁ」

「でも市民プールや海水浴場は超混んでて、泳ぐスペースなんて超ありませんが」

フレндаと絹旗はまだ命のある構成員の息の根をサクサク止めながらそんな話をしていた。

恭弥は離れたところで銃を振り回して乱射している。レベル5なら能力使えよと思う四人だが、基本、やる気のない時は適当にやる彼である。

そんな彼を尻目に彼女達の会話は続く。

「滝壺はどっと思っっ」

「ん………浮いて漂うスペースが有ればどっちでもいいよ」

「あ………そっ」

「というか、フレнда。恭弥さんがいるじゃないですか」

そんな言葉に三人の視線が自然と恭弥に集まる。

「うおおおお!?危ねっ！人に銃向けてんじゃねえよ!」ヒィッ

「ハッ！避けたな？避けたって事は危ないって事だ。つまりお前の能力は完璧じゃねえんだろ!!」ドヤァ

「なんだと!? バカな!?」 ガーン

「オラア食らえ!!」 BANG

「ピキューン」 エッヘン

「ガアアアア!! な、なんで銃弾が……」 パタリ

「ゴメン、俺の能力に穴なんて無いんだ」 スマヌー

何をしている第八位。

何故こんな状況下で悠然と敵と漫才をしているのか。

フレндаと絹旗は白い目を彼に向け、一瞬で無表情になった。

が、良く良く見ると、ふざけているようで恭弥がかなりの確に相手を始末している事に気付いた。

回りながら乱射した銃弾は一発も外れる事なく相手の眉間にぶち込まれ、放った蹴りや拳は首の骨を粉碎し、確実に息の根を止めている。

おそらくこの中で麦野に次いで二番目に多く敵を始末しているだろう。

しかも隠れて四人を狙撃しようとする者を優先的に殺していつているのではないか。なんとという心配りの良さ。

更に言えば、これは余談だが、恭弥はそれなりに整った顔立ちをしている。

そう、彼はあのアホくさい要素さえ抜ければ、強く、そこそこイケメンで気が利くという中々にイイ男なのだ。

まあそのアホくさい要素がかなり大きな部分を占めているため、あんな風になっているのだが。

「……………」ついでに見ると悪くないかも」

「……………」恭弥さん、超優しいですしね」

絹旗はふと思い出す。先ほどのファミレスでの一件を。

――  
――

爆弾が爆発する0.5秒前に麦野、絹旗は行動を開始した。

麦野は隣にいたフレンドを引き寄せ、『マルチタウナー原子崩し』の盾を瞬時に展開。  
レベル5の第四位の能力。

二人はの安全は間違いないだろう。

対して絹旗は『オフエンスアーマー窒素装甲』をその身に展開し、滝壺を引き寄せる。  
もうすぐにも爆弾は爆発するだろう。

絹旗の能力はその名の通り、窒素の壁をその身に纏うものであり、あらゆる攻撃からその身を守ることが出来るものである。しかし、その際の衝撃まで無力化できる訳ではない。

故に彼女は直後に訪れるであろう衝撃に身を固めて備えた。

――滝壺を完全に守りきれるか分からない。だが、死なせはしない。



そんな時、声が聞こえた。

あまりの集中力に感覚が研ぎ澄まされていたのだろうか。

静かに優しく心に染み入る、澄んだ声。

「安心しろ。俺が守ってやる」

その声が聞こえたとともに力が抜ける。

恭弥が何かした訳ではない。

絹旗に意図があってそうしたのでない。

根拠はどこにも無いのだけれど、ただ、彼女は心の底から安心したのだ。

気を失っていた訳ではない。

周りの状況がしっかりと把握できなかつただけだ。

気が付けば絹旗は皆とファミレスの外にいた。

「なんで爆発を抑え無かつた？」

「テメエなら全て無力化することも可能だつただろ？」

半ギレの麦野にへらへらと恭弥は答える。

「多分ねー……どっかで見てる奴がいると思うよー。」

つか爆発直前に怪しいヤツがチラリと見えたからね。

そいつから色々聞き出したいと思わない？

爆発しなかつたら今頃こちら辺から離れてるよ。」

「……………暗部の人間が口を割るとでも思ってたのか？」

「そのために拷問って概念があるんじゃないか。」

取り敢えずシーザーサラダやるから頭冷やせ。

情報がなきゃ動けないことには変わりはないんだからよ。

俺が拷問をする。もし聞き出せなかつたら幾らでもビーム食らうてやるからさ。」

こちらの集合場所に爆弾を仕掛けられたということは、こちらの動きが敵に知られていた、ということだ。

暗部の通信はそれぞれ異なる独自の複雑な方法を通して行われる。

故にそれが盗聴されることなどそうそう無い。

では、何故知られた？

それが意味するのは、裏切り者の存在。

ということとは、裏組織の拠点、取引場所、装備、e t c . 与えられた情報は全てダミーの可能性がある。

それを理解できないほど、彼女達『アイテム』は生ぬるいチームではない。

それ故、恭弥の言葉に麦野は押し黙る。

彼の言い分は正しい。確かに、情報が無い事には動けない事に変わりはないのだ。

動けないことに苛立ちつつも、現状を理解できるからこそ、麦野は黙る。

対して、恭弥は今まで見たことのない優しい笑顔を彼女達に向けて、

「ま、全員無事だったんだ。一先ず、めでたしめでたし」

――  
――

学園都市の暗部という腐った世界で何か暖かいものを感じた彼女達。

「アダツ！足の小指打った！痛っ！痛っ！」

そんな彼女達の心が奇しくも一致した。

「……………やっぱりねーわ、と思うっ。」

能力使えよ第八位。

「ま、まあ恭弥には下着姿見られてる訳だし……………今更ってゆーか」

「そうですね。私は……………少しだけ超考えて水着選びましょうかな

……………」

「あっ！やっぱり絹旗は恭弥が気になってる訳!？」

「ち、超違います！フレンドこそ超気になってるでしょう!？」

「そ、そんな訳ない訳よー!」

絹旗の切り返しに慌てて取り繕うフレンド。

ジトっとした絹旗の視線に耐えきれず、明後日の方向を見やる。

すると、その視線の先には

「オラオラオラァー!ゲロっちまった方が身の為dっおおおお!?それ毒物じゃねえか!危ねっ!」

最後の生き残りどじゃれあう少年の姿。

うん、やっぱりないかな、と思うフレンドであった。

すると、パンパンと麦野が手を叩いて注目を集める。

「はい、仕事中に駄弁らない。早速だけど新しい依頼がきたわ。

取り敢えず今日はもう帰るわよ」

「え?何ですか?」

どうやら新しい仕事が続けて入ったようだ。

ついでに言うておくと、爆発後の電話は恭弥が拷問して聞き出した情報と同じ内容の物だったらしい。

閑話休題。

「うーん…謎の侵略者インベーターからの施設防衛……ってところかなあ」

麦野は楽しむように、そう言った。

\*\*\*

レベル5の第三位、御坂美琴の施設破壊は、終盤に差し迫っていた。『絶対能力進化計画』<sup>レベル6ソフト</sup>に関わる施設は残り2つとなり、彼女はもうすぐで全てを終わらせる事ができると希望を抱いていた。

何日間にも及ぶ徹夜で心身ともにボロボロの御坂美琴だったが、彼女はレベル5の電撃使用<sup>エレクトロマスター</sup>。

電子機器によるセキュリティなど一枚の紙っぺらに等しい。最後の施設破壊も容易く終えられるだろう。

これにて『絶対能力進化計画』<sup>レベル6ソフト</sup>は終わりを告げる。

――という訳にはいかなかった。

なんせ絶対能力<sup>レベル6</sup>というのは学園都市にいる大半の研究者の目的と、言っても過言ではないのだ。

それほどまでに重要な目的。

――神<sup>S</sup>ならぬ身<sup>Y</sup>にて天上<sup>T</sup>の意思<sup>E</sup>に辿<sup>M</sup>り着<sup>M</sup>く者

このためにどれほどの命が犠牲となったのか。

どれほど莫大な金額が動いたのか。

どれほど多大な時間が消費されたのか。

『たったこれだけのために、』

なんて生易しいものではない。

これに比べれば世界各国の最重要国家機密などゴミに等しい。

そんな目的の内、絶対能力者<sup>レベル6</sup>とは、神に至る可能性が最も高い存在であるのだ。

故に、『アイテム』に施設防衛の依頼が舞い込んだ。

暗部は学園都市の殺しの精鋭エキスパートの集まる組織、その実力は問うまでもない。しかも、大金とはいえ金さえ積みめば動いてくれるというなら利用しない手はない。

彼女達に護衛を頼むことで研究者達は残り2つの施設に残るデータを無事に他の施設に移動させ、再度実験を行えるように環境を整える事にしたのだ。

その仕事の打ち合わせをしている中、

「エレクトロマスター電撃使いねえ……」

恭弥はポツリと呟きながら御坂美琴の顔写真を見て彼女に同情する。

結局、彼は昨日のうちに適当な施設を利用する事で『レベル6絶対能力進化計画』についての詳細を把握した。

現在狙われ続けているのはどこもそれ関連の施設ばかり。

犯人がエレクトロマスター電撃使いと分かった今、御坂美琴が真っ先に思いつくのは道理というものだろう。

一昨日の昼間に会ったばかりの少女が纏う雰囲気は、闇に生きていく人間のものではなかった。つまり、表の世界で伸び伸びと生きてきた純粋な少女だということだ。

そこから導き出される結論は一つ。

とある線からこの実験の事を知り、表の世界で生きて来たからこそ純粋なる善意で彼女は、この実験を潰そうとしているということ。

最近暗部に入ったばかりの恭弥ではあるが、元々の生まれは社会の

最底辺、ドロのような闇の中なのだ。

それ故、彼は暗部に属する者と同じくこの世界の残酷さを知っている。

それ故、彼は無防備にこの世界に足を踏み入れてきた少女に同情する。

一方通行に対しては、プチプチ二万體も相手にしてバカじゃねーの、と呆れていたが。

「ま、やることは待ち伏せして迎え撃つ、って事だけよ」

「超問題なのは相手が襲撃する可能性のある施設が二箇所あるってことですね」

「はい！じゃあ、片方には私一人で行く！」

皆の会話に意識を戻すと、フレンドがそう言って名乗り出たところだった。

その真意は、撃破ボーナス分のギヤラを貰う為である。

流石、がめつい。

それを聞いた麦野と絹旗は、苦笑してそれをヤレヤレと肩を竦める。

「まあいいわ。それじゃ、頼んだわよ？」

「まっかせてよー！」

意気込み、胸を張って答えるフレンド。そこからは速やかに役割が振り分けられ、フレンドと恭弥を一つの施設に、他はもう一方の施設に行く事になった。

恭弥が付いてくる事に若干渋ったフレンダだが、ボーナスの総取り、かつ命が最優先との事でそれを了承した。

フレンダは特に能力は持っていないが、卓越した爆弾使いである。しかし、それでも相手が能力者となれば万が一の事を考えざるを得ない。しかも単騎で乗り込んでくる程だ。

かなりの使い手であることは容易に想像つく。

その旨をさりげなく伝えると、フレンダは瞬時に首を縦に振った。

そして麦野が恭弥に告げる。

「ああそつそつ、恭弥」

「What?」

「こちらがある程度済んだらそつちに向かうから。」

リーダーとして状況は把握したいからね。そゆことで宜しく」

「OK」

最後に皆に対して麦野は締めくくる。

「定時連絡は必ず入れること。侵入者が来た場合もまた然り。」

それじゃ、仕事を始めましょう」

彼女の言葉を皮切りに、『アイテム』は行動を開始した。



## 12話「ミッション開始！」

その夜、御坂美琴は例の製薬会社に忍び込んでいた。

目的は勿論、施設の設備及び過去の収集データの破壊。

ここを破壊し、残る一箇所も潰せば実験は頓挫。

もうこれ以上、彼女の、——御坂美琴のクローンが殺される事はなくなる。

過去に自分がDNAマップを譲渡したことにより生まれた悲劇。

その終焉がせめてもの罪滅ぼし。

満身創痍な身体に鞭を打ち、目的に向かって前進する彼女。

(残りは後一箇所……何事も無く終われば良いけど……)

幸いな事に一人見当たらないが、念のため影に隠れつつ施設内を走って、最奥のデータベースへと向かう。

ここを破壊してあと一つ。

それで全てが終わる。

刹那、御坂美琴の頭上、天井に火花が奔り瓦礫となって鉄の塊が多数落ちてきた。

「!!」

(ワオ、すげ)

だが、磁力でそれらを弾き、落下の軌道を逸らすことでそれを凌ぐ御坂。

やはりそう上手くいくものではない。むしろ、あの程度のセキュリティしかなかった今までがおかしかったのだ。

とは言っても一級品のセキュリティであったことに変わりはない。設備者は涙目である。

ふう、と息を吐いてから気を引き締め、一層警戒する御坂。

次の瞬間には床や壁、天上を火花が走り抜ける。

よく見れば、あちらこちらにテープのような鉄を焼き切るツールが張り巡らされているではないか。

あちこちから降り注ぐ鉄塊に舌打ちしつつ、走る御坂。すると、ふと目の前を通った火花の先に目がいった。

そこには、一つのぬいぐるみ。

それに火花が辿り着いた瞬間、突然の爆発。

「なっ……爆弾!? ……なんでこの手の奴等はぬいぐるみに入れたがるかな……!」

(なっ!? コイツ……俺がプラスチック爆弾をパイナップルマン人形に入れて、アイターww校長先生に送ったのを知ってるのか……!?)

能力を応用し、落ちた瓦礫を磁力で持ち上げ、爆風や熱の盾とする。次々と奔る火花と連続的に爆発するぬいぐるみ。

毒づきながら御坂は奥へ向かって走っていった。

\*\*\*

そんな御坂の様子を物陰から観察する一つの影。

(うーん……おしいなあ……いつもみたいなりモコン式ならやれてたのに……)

いや、逆に支配されてただけだったかも……

それにしても……恭弥はどこ行ったんだろ？)

今のところ御坂が予想通りの行動をとっているため、悉く用意していたトラップに引っかけられていたが、それでも未だに仕留めきれしていない。

それならしょうがないとフレンドは、にひひと笑って次の手を打つ。

\*\*\*

最大磁力をもつての回避により、壁に強く背中を打ち付けた御坂はダメージに呻きつつも導火線を辿る。

すると前の階段に立つ一人の少女、フレンド「セイヴェルンが。」

(あいつか！)

(そう、あいつだ！)

即座に御坂は行動する。

見失う前に捕らえて情報を吐かせようと。

フレンドに接近しようと駆けるが、直後、赤外線センサーにかかってしまった。

ドバンツッ!!

並大抵の能力者なら確実に仕留められるであろう陶器爆弾が炸裂した。

しめたとばかりにニヤリとフレンダが不気味に笑う。

が、

バチイイイ!!

御坂は眉一つ動かさず、その破片を全て能力により弾き返す。

(嘘っ!? 陶器爆弾を一蹴!?)

(カッケェ)

今まで相手にしてきた能力とはレベルが違う事を認識し、頬を引き攣らせるフレンダ。

何事もなかったかのように自分の立つ階段を駆け上がり始めた御坂を視界に収め、内心慌てながらも、御坂を引き付ける。

そして、

「まずいわー! 凄い形相! 捕まったら八つ裂きにされちゃうかも!」

(糞みてえな演技だな。あいつバカか?)

果てし無く演技くさい口調でそう叫び、ニヤリと笑った。

「なあーんつって」

(うおおおお!? ちょー! ざけんな!)

次の瞬間、火花が階段、手摺、柱に走り、階段が瓦礫となって崩れ落ちた。

「大分引きつけたから結構な高さから落ちた訳よ！」

渾身のドヤ顔でそう言うと、フレンドは勝利を確信した。

いかに高位の能力者といえどこれは無事では済まないはず。これでポーナスゲッツ。

が、御坂美琴はレベル5の第三位。

舐めてもらっては困る。

磁力を操り鉄の塊を繋ぎ合わせ、彼女は地に落ちることなくそこに立っていた。

フレンドのドヤ顔が一瞬で凍りつく。

そんな彼女を鋭く睨めつけ、御坂は言う。

「残念だったわね。」

私を落としたいのなら……鉄分を抜いて、施設ごと建て直しておくべきだったわね」

「なにそれ!? ずっる!!」

(ずっる……俺なんて頭から落ちたぞ)

そう非難するフレンドだが、ここは能力者の跋扈する学園都市である。

敵対することになった相手が軍隊を相手取る事が可能な化け物であつたとしても文句は言えない。

慌ててとある空間に逃げ込むフレンド。

追いついた御坂は怪訝そうに眉をひそめた。

「随分簡単なミスをするのね。」

慌てて判断を誤ったのかしら？」

そう、何故ならフレンドが逃げ込んだのは出入り口が一つとなっている部屋。

自ら袋小路へ飛び込んだ訳である。

自分をここまで追い詰めたのだ。

単なるミスでこのような行動は取らない筈。

そう思い、警戒を緩めずにその部屋へ足を踏み入れる御坂。

対して、フレンドは余裕あり気にこう答えた。

「ふふっ……………んんんっっ。」

\*\*\*\*\*

さて、区切りが良くなったところで、鵜沼恭弥が何をしていたか簡潔に説明しよう。

やっていたことは至って単純である。

例によって能力を使い、果てし無く影を薄くしていた。

さらに、『フレ！フレ！』『フレンド！』と書かれた二本の旗を両手に持って、振り回しながら御坂の背後に付いて走っていただけである。

馬鹿か、コイツ。

## 13話「登場」

軍隊を手玉にとることができるレベル5。

とはいえ、それを扱う者は唯の人間であり、身体能力も普通のものである。

むしろ、普段能力に頼っている分、平均より劣っていたりする。

もちろん、第四位や第七位、第八位といった例外はいるが。

(麦のんの身体ヤベエな……エロいっちゃエロいけどそっち方面じゃなくて……あれならグーパンで5mくらい人間ぶっ飛ばせるんじゃない?)

第四位の下着姿を目撃した時の恭弥の感想である。

まあ、それはともかく、能力が使えなくなればレベル5の第三位、御坂美琴はただの女子中学生でしかない。

つまり、何がしたいのかということ

「自殺志願者を見るような顔ねー!

でもコッチは暗部で仕事してんのよ!死ぬのが怖くてやってられるかってのよ!」

(ゴメン、俺は死ぬのが怖いです)

現在、フレンダ=セイヴェルンは御坂美琴を圧倒していた。

追い詰められたように見えたフレンダは、あの後、様々な小細工をすることで御坂に善戦をした。

が、やはり無能力者と超能力者では地力が違う。

あらゆる策を全て潰され、フレンドは一時危機に陥った。すぐにでも雷撃で撃ち抜かれる状況。

しかし、フレンドは『アイテム』のメンバーとして長い間暗部の仕事をこなしてきた身である。

そう簡単にやられる訳がない。

適当なことを口走ること、御坂の気を逸らし、一瞬の間隙について気体爆薬の入った小瓶を御坂に投げつけたのだ。

学園都市特製の気体爆薬 『イグニス』。

吸っても肉体に害はないが、室内に解放されれば一気に拡散して部屋中を満たし、火花の一つで連鎖爆発を起こす代物。

御坂美琴はこれを電撃で対処した。電気に触れた気体爆薬は普通に爆発するも少量であったため、御坂にはなんのダメージもなかった。

だが、それは布石。

フレンドはそれをハッターという形で最大限に利用する。

配管の中に詰めていた窒素ガスを部屋に解放。それを『気体爆薬』と嘯く事で、御坂美琴の能力を封じこめたのだ。

すんなりとその嘘を信じ込んだ御坂美琴は、電気を出す事が出来ないのもちろんの事、磁力で鉄塊を操る際の摩擦で火花が出る事をも恐れ、全面的に能力が使用できなくなった。

こうして二人の戦いは肉弾戦へと移行することとなった。

結果、能力が無い分、普段から体術を磨いていたフレンドが優位に立つ。



(ちとと、……)ここで俺が加わるとオーバーキルだな……  
ぶっちゃけ暇。どうしよっかねー)

そして今現在、フレンダが体術をもって御坂を追い詰めているが、中々決定打となる一撃はない。

御坂に若干同情している恭弥としては、できることなら彼女は殺したくないのだ。

故に、ただ黙って指を啜えているしかない。

室内に閉じ込められたため、外に出ようにも出られなく、暇な状況が続く。

暇な状況が続く。

暇な状況が続く。

段々全てがどうでも良くなってきた恭弥。

終いには、御坂を気絶させてどっかに放り投げて来ようか、と考え始めた。

そこで、戦況が大きく動いた。

御坂が攻めに転じたのだ。

能力は使わず、踏み込みの際の火花を恐れて絞め技でフレンダを抑え込む。

「だあああっらっしやああい!!」

だが、フレンダは背負い投げの要領で御坂を投げ飛ばした。  
その時、

「ヤバッ！」

彼女のスカートの中から導火線ツールに火を付けていた工具が幾つか零れ落ちた。そして、それが地面に張り巡らされていた導火線ツールの火を付けた。

「フアンタスティック!!」

と、恭弥はここで出番とばかりに能力を解除し、フレンドの右腕を掴み、導火線の上から離れるように抱き寄せる。

「ふぁへっ!?!」

突然現れた彼に驚愕するも、自分の近くを走り抜けた火花を見て鳥肌がたつた。

恭弥が来ていなければ彼女の身体も鉄材のように真っ二つになっていたのだから。

「あ、ありがとう」

「おう、気にすんな」

「……………は、はははは」

だが、これによって真実が明らかになった。盛大に火花が散ったにもかかわらず、気体爆薬はなんの反応も示さなかった。つまり、気体爆薬が室内に満たされているというのは単なる嘘。

嘘。嘘。嘘。嘘。

乾いた笑いを上げて、御坂はその身体から存分に電気を放出する。

威嚇の稲妻が彼女の周囲に迸った。

「結局、私も詰まらないハッターに騙されたって事か……ははは、結局だって、移っちゃったかな？」

「何行ってるの？馬鹿なこと言っていないで中学生はサッサと帰りなさい」

「……………誰？」

「俺が……………宇宙だッッ!!」

訳が分からない。

こんな状況下でもふざけた対応をされる御坂が不憫である。

「……………あ！……………アンタ……………」昨日の!？」

彼女はそんな恭弥の顔を見て、公園で会った一般人だと認識した。

何故だ？

何故、彼がここにいる？

研究には無関係ではなかったのか？

そして一つの結論が彼女の中で下される。

「……………ああ、あれも嘘だったのか。」

電磁波による空間把握で存在が掴めなかった恭弥に警戒して対峙する御坂。

そんな彼女に恭弥は気軽に尋ねた。

「……………昨日ぶり。……………こんな所で何やってんだ?」

「何って……あの実験を止めるためにこうして施設を破壊して回っているんじゃない」

「……まさか!? あの施設を破壊したのもお前か!？」

彼はどこの施設の事を言っているのだろうか？

それはもちろんファミレスの事である。

いや、それ施設じゃないだろ、というツッコミなど彼は受け付けない。

真犯人を拷問した末に殺した張本人が何を言っているのだ、というツッコミも勿論受け付けない。

だが、当然、御坂がそんな事を知る由もなく、恭弥を睨みつけて堂々と答える。

「どの施設を言っているのか分からないけど……『絶対能力進化計画』<sup>レベル6シフト</sup>に関わっていたのなら破壊したのは私よ」

その言葉に、恭弥は膝から崩れ落ちた。

何故だ。解せぬ。

「……なん……だと……？」

お、おらの……シーザーサラダが……」

「……………ん??」

今、何か聞こえる筈のない単語が聞こえた気がした御坂は片眉を上げる。

今、再び緊張感の皆無な口調を聞いた気がしたフレンドもまた然り。

どれほどの時が流れただろうか？

五秒だけである。が、彼女達にとってはその二十倍は長く感じた五秒間だった。

未だに恭弥は動かない。

すると、ついに痺れを切らして御坂が口を開いた。

「とりあへ、あ、そつだ。京都へ行くじつ……へ？」

突如立ち上がった第八位。

流石に話が飛躍し過ぎである。何故ここから京都が出てくるのはなはだ疑問だ。

フレンドさえも目を白黒させ、話の流れに付いて行けていない。

まあ、流れなどないのだから付いて行けないのは当たり前前の話であるが。

対して恭弥はうんうんと頷きながら持っていた鞆に手をのばし、

「うん、京都だ。ほらよ」

「!？」

中から何かを取り出して御坂に投げつけた。

咄嗟の事に驚きつつも、それを御坂は条件反射で撃ち落とす。

「パ、パイインッッ!？」

「へ？」

が、それはただのぬいぐるみであった。

キャラクター名、パイナップルマン。

地球の環境を守る為、工場を破壊して敷地一面パイナップル畑に変えてしまおうという、地球に優しく人類に厳しい災害キョロという設定らしい。

パイナップルに手足が生えただけの、目も口もないが何故か耳だけあるという手抜きキャラである。果たして需要はあるのか。

実際恭弥も、

(うわぁ……神裂のファッションセンス並にないわ…これは……)

と失礼な事を考えつつもドン引きしていたほどである。

そんな彼が何故悲痛な叫びを上げているのかはこの際スルーしておこう。

フレンドが、ダメだコイツ、的な無表情になった事は言うまでもない。

電撃に撃ち抜かれたそれは重力に従い、自由落下して御坂の手元へ落ちた。

御坂はなんだコイツと恭弥にドン引きしつつもある違和感を感じる。

なんだ？

何かがおかしい……

そして、すぐに気付いた。

——電撃で撃ち落とされた筈なのにぬいぐるみに傷一つついてない!?

直後、恭弥の声が聞こえた。

「学園都市製、特殊防撃シート『パイナツプルマン鉄壁の果実』だ」

ピー

静かに響く音がした。

皮肉な事に、つい先日フレンダが耳にしたのと同じような物だった。

刹那、劇的な轟音と光でその空間は埋めつくされた。

\*\*\*\*\*

「やつほ。久しぶり」

「んん？ああ、君か。これは珍しい客が来たものだね。

何の用だい？今更実験に協力してくれる、とでも言うのかな？

まあそれなら有難い話ではあるけどね」

「ハハハ、バカかお前。実験が嫌で脱走したモルモットが協力しに戻ってくる訳ねえだろポケナス」

「それもそうだね。それで？何で私に会いに来たんだい？」

「お前に用なんざねーよ。バカなの？」

「一体何しに来たんだ……。」

いろいろと曲者揃いのこの学園都市でも、君ほど捉えどころのない生徒はいないよ。統括理事長カを彷彿とさせるね」

「俺とアイツじゃベクトルが違うしスカラー量も違うと思うけどな。  
ま、それはどうでもいい。  
頼りたい事があってここに来たんだよ」

「何だ。用があるじゃないか」

「お前にはねえよ。この施設に用があって来たんだ。お前と会ったのはたまたまだな」

「……過去に自分がいた研究所に足を運んでおいてどの口が言うのかね……まあいい。抵抗しても無駄だろうしね。  
破壊してくれなければ好きに使おうといい」

「じゃ、存分に学園都市の機密を見させて貰いましょうかね」

「……ハッキングならココからした事がバレないようにやってくれよっ」

「……あ、やべ。バレた。ま、DLは済んでるしいいか」

「……今とんでもない事をサラリと言わなかったかい？  
まあ昔のよしみで大目に見るけど」

「……テメエと親しい関係になった覚えはねえんだが」

「おっと。気分を害したなら謝るよ。ま、君を育てた私としては息子のよっくに思ってたんだけどね」

「テメエが俺に抱いている感情は慈しみでも親しみでも、ましてや愛情でもねえだろが。ペットに抱く感情以下の…実験用のマウスに対



するそれだろ」

「ま、否定はしないね。実際面白かったし」

「だろっな。」

「……………ん？……………なあ…」のぬいぐるみ……………」

「ん？……………ああ、それかい？パイナップルマンとかいうキャラクターらしいね。」

先日統括理事長宛に送り付けられたプラスチック爆弾が入っていた人形だよ。

それが私のところにたまたま回って来てね、暇だしちょっとインスピレーションが働いたから改造してみたんだ。

君が脱走してから意欲がすっかり無くなってしまっただらけた研究をしている、って訳さ」

「んな背景事情なんざ知るかボケ。」

「これ、どつという物なんだ？」

「元々はただの人形だったよ。」

けどなんかピーンときてね、お陰で研究資金ガツポガポだよ。

電気量、熱量、運動量、……………外部からの衝撃等は全て受け流して、ミサイルを撃ち込んでも内側には拳で殴られた程度の衝撃しか伝ええない防撃シートだよ」

「へえ、まあ確かに前に見た学園都市製のやつよりは性能は上だな。」

けどその程度で研究資金がそんなに増えるのか？」

「いやいや、話は最後まで聞きたまえ。」

とどろがどつこい、それだけにどどまらないのがこのシートの凄い所だ。

外部からの衝撃にはめっぽう強い。けど内部からの衝撃にはめっぽう弱いんだ。

第二位の未元物質データクマターを参考に六方最密構造のモデルを最適化させて組み込むことで――」

「あーハイハイ。もう分かったわ。そんなん見て触りゃ分かる」

「おお！流石、私の最高傑作」

「自画自賛とかキモいよナルシスト。

要はアレか。敵の攻撃をガードしながらコッチの攻撃を一方的に、的な？」

「ま、そゆことだね。

人形にしたなら、使い道としてはタイマー式の爆弾が一番かな？多分X線検査にも引つかからないよ」

「ふーん……この人形貰っていいか？」

「別に構わないよ。データはあるしね。

ああ、そうそう、シートの名前は『鉄壁の果実』バイナッフルマンだからよろしく。売り上げの何割かは私がゲットできるから、君が今後も注文してくれれば金に困ることはないからね」

「あっそ。ふざけた名前だな。

商標権侵害で訴えられても知らんからな。

そんじゃもう行くわ。

ハッキングの件で捕まったら保釈金は出しといてやるよ」

「おお、それは感謝する。

ああ、あとこれも持って行きたまえ」

「ん？なんじゃそりゃ？体晶か？」

「違う違う。そんな欠陥品と一緒にしないでくれたまえ。」

君の能力を最大限に引き出す物だよ。とは言っても少量なら影響はないけど、多量に服用すると流石に死ぬからそこそこよろしく。

ま、多大なる力には危険が伴う、ってやつだね」

「ふーん。イラネ」

「ちょちょちょ！待ってよ！結構頑張って作ったんだよ！睡眠時間15時間しか取らずに！それをそんな簡単にゴミ箱へポイとしないでくれ」

「15時間も爆睡してどこが頑張ってたんだよ。とりあえずこの街の研究員全員に土下座しろ。」

「まったく……相変わらずだな……おはらはいしん肋破壊神」

「君もだね、あつてい験体』 506号』。

私の名前はきはらひしん木原方針だよ」

「……………やゃこしい名前してんじゃねえ!!」

「私は何も悪くない？」

「じゃあな」

「ぼくは……」

\*\*\*

「さて、……………みこっちゃんが超隙だらけなんだが超どうしよう」

現在、鵜沼恭弥は突っ立っていた。

目の前には壁に寄りかかり、なんとか立っている御坂美琴。

足元には目を回して気絶したフレンダ。

恭弥が『鉄壁の果実』バイナツプルマンの内部に仕掛けておいたのは、ついにかっばらって来たスタングレネード、『ドラゴンロア』である。

特殊な小爆発を起こすことで音量、光量を増幅。共に通常のスタングレネードの20倍を誇る超兵器自爆用品である。

常人が使えば自分も再起不能に陥る事は間違いないだろう。なぜこんなゲテモノを引っ張り出して来たのか全力で問い質したい。

勿論、そのままでは彼女達の鼓膜が破れ、完全に目が潰れるので能力を使って有る程度は抑えこんだが。

しかし、それでも彼女達がかんりの音と光にやられた事に変わりはない。

音。

これは普通なら無害の代物であるが、爆音となれば話は別、一変してかなりの危険な物となる。

音の正体、それは振動。故に爆音にはそれなりの大きな振動が伴っている。さらに言えば、振動とは気体、液体、固体を問わず、物質が存在する限りどこまでも伝わるもの。

つまり、爆発的な振動は体内にまで響き渡るといふ事だ。

『ドラゴンロア』の場合、これだけでも十分大きなダメージと言える。だが、これだけには留まらない。

何よりも一番危惧すべきは外部からもたらされた情報による精神

的ショックである。

誰しも、背後から突然大きな声で驚かされた経験があるだろう。今の御坂美琴はそれをやられたのと同じ状況である。しかも音量は核兵器並。

最悪、心臓が止まってもおかしくはなかったのだ。

だが、彼女は意識を保つ。

目が見えず、耳が聞こえない状況であっても決して挫けない。ただ、己の信念を貫くために。

「……………ふむ、多分あと五分ほどで麦のん達が来るだろうな……………それまでにはみこっちゃんなら回復するか」

先ほど入った連絡から、麦野達の来るであろう時間を推測して考える恭弥。できることなら御坂と軽く話をしたい、というのが彼の気持ちである。

なので、部屋の中にある爆弾を回収し、て彼女が回復するのを待つのだった。

フレンダは放置である。

## 14話「投げ出し」

恭弥が人形を繋ぎ合わせてブンブン振り回していると、御坂の目と耳が回復した。

目の前の怪しい行動をとる少年に唾然とするも、すぐに気を引き締めて恭弥を睨みつける。

「……………アンタ……………ちっきはよくも……………」

振り回していた人形を放り投げ、激昂する御坂に向き合う恭弥。

「おっと。まあ、落ち着け。

取り敢えず話をしようじゃないか。

時間がないから気を使ってもらえると助か」「ドガアアアンツッ

!!

「」

「」

落ちた衝撃で爆発が起きた。

起きてしまった。

とことん締まらない第八位。

が、もうこの際はスルーだ。

仕切り直しにパン、と手を叩いてから口を開いた。

「ま、俺自身としてはお前に危害を加えるつもりはないよ。

実際にさっきまでお前にトドメを刺さなかっただろ？」

「……………確かにそうだけど…」

そういう恭弥の言い分はもっともである。

しかし、御坂としてもそう易々と信じる訳にはいかない故、警戒は解かないまま、視線で話を促した。

「ま、聞いてくれるだけでも有難い。

まず、俺等は『絶対能力進化計画』には一切関与してない」

「じゃあ何で……………ああ、金で動く傭兵集団みたいなものなのね？」

「し名答。だから俺等にブチギレられても困るし、拷問されても何も話せる事はない。まず、ここは理解しておいてくれ」

「……………で？なんでアンタは私に危害を加える気がないのかしら？  
仕事しないと金が入ってこないんでしょ？」

「ま、俺は金に困ってないからそこはどつでもいいんだ。

俺はなんかお前が不憫でな……………

……………ゴメン、ちょっとトイレ行ってくるわ」

突如腹を抑えてそういう恭弥。

「……………はっ。」

御坂は啞然とする他ない。

学園都市の暗部。油断すれば即、死に繋がるであろうことは彼女でも理解できる。

なのに目の前の男は一体どういつつもりなのだろうか。

だが、有害なエネルギーをすべて無害なエネルギーへと変換できる

恭弥にとっては学園都市の暗部などなんのその。

普通に御坂に背を向けてぺちぺちフレンドの顔面を往復ビンタし始めた。

「おーい、フレンドちゃん起きろー」

「ぶっ!?あばっ!ばべっ!ぶはっ!ぢよっ!あだっ!おべっ!」

いや、訂正しよう。

ベチンベチンと大きな音が鳴り響くほどの往復ビンタを始めた。

流石、ゲスい。

気絶しているいたいけな少女に容赦ない。

敵であるとはいえ、流石に御坂もこれには同情した。

戻った意識が再び飛び、再び戻り、飛び、戻り、……を五回ほど繰り返したところで恭弥はビンタをやめた。

「…………ふあへ?あれ?」

「おい、よく聞けサバ女。

俺はシーザーサラダが当たったから便所に行く。

お前は適当にみっちゃんとバトってる」

「え?え?……あ!侵入者!!」

「じゃあな」

「え!?ちよ!よく状況が分かんない訳よ!」

呆然としていたフレンドに彼は伝える事だけ伝えたと、扉をこじ開け何処かへ行ってしまった。

最早、御坂相手に悪足掻きできるほどの道具がないフレンドは涙目



である。

\*\*\*\*\*

恭弥はスッキリした顔でトイレの扉を開けた。  
すると、

「……………どっだ「ト」？」

——瓦礫の山が目の前に広がっていた。

おかしい。

先ほどまで自分は研究所というかなりしっかりした建物の中にいた筈だ。

おかしい。

先ほどまで自分は腹を壊していた筈だ。

いや、それは関係ない。

では、何故今現在、自分は空襲跡地のような場所にいるのか？

答えはすぐに出た。

「チッ！……………まあストレス発散にはなったか。  
……………クソッ！第三位が……………逃げやがって」

明らかにイラついている様子の麦野沈利が近くの鉄塊を『粒機波形  
高速砲』、つまりは能力で吹き飛ばしていた。

ここで恭弥は一考する。

考察。思考。思案。勘考。熟考。

ハッ！と顔を上げ、

「……沈リーナ に聞けばいいじゃないか!!

本当に第八位なのか疑わしい脳味噌である。

そして彼女に近付いて尋ねた。

「ふむ………トイレから出てみれば研究所全壊でお仕事終

了、ってどういう事ッスか？

「懇切丁寧な説明要求しまッス！麦姐さん!!」

「あ？………いや、お前ちっきまでどこに行ってたんだよ。

私の方が説明してもらいたいわ」

「………いや、マジすんません。

だからビームの照準をコッチに合わせないでください。

「………シーザーサラダで腹壊してトイレに籠ってました」

「………死ね」

「じおおおおーちょー！うわっ！ストップ！

とりあえず頭の怪我治してやるからやめて！」

\*\*\*\*\*

その後、『アイテム』のメンバーと合流し、実験の内容を知った麦野は爆笑しながらそれを恭弥に話した。

「ふーん……………で、第一位サマはスライム二万體相手に経験値上げ、ってことね」

「ええ、どうやらそうみたい。」

「ハハッ！滑稽たらありゃしないわ！」

「うん。俺それ知ってた」

「テヘツ、と舌を出してコミカルに悪びれる恭弥。

「この行為が第四位の導火線に火をつけた。」

「…………ハア!? テメツ…何で教えなかったんだよ!!」

「あー、…………別に任務にや関係なくね？ バカみてーに迎撃すりゃいいだろ、と思って」

「いや、まあ、そりゃそうだけど…………教えるよ！」

「ハハハ、教えて俺になんの得があるんだポケナス。」

「そんなに知りたきゃハッキングして見るやアホウ」

カラカラ嗤い、火に油を注ぎ続け、

「ぬがぁあああ!!」

ついに爆発させた。

「おっおっ。……………ってスマン！今度から教えるからビーム放つな！ヒイッ……………ったく危なっかしい」

結局、それに加えて高級ブーツを買いに行くという事で許してもら

えた恭弥だった。

## 15話「絹旗とデート」

鶴沼恭弥は長財布を片手にポケッと大通りを歩いていた。

やはり無防備過ぎるほど気の抜けた様子で歩く彼だが、能力を使っているため、周りの生徒が彼に気づく事はない。

長財布を清掃ロボットの前に投げ捨ててとある公園に足を踏み入れる。

土曜であるため中にはそれなりの生徒達があり、彼等の大半がカッブルのようでイチチャイチャしていた。

そんな彼等リア充ぶりの戯れには目もくれず、恭弥はポケットしたまま公園の中心に位置する噴水の前に来たところで能力を解除した。

目的の人物はまだ来ていないようなので、懐から長財布を取り出し、近くの自販機でゴーヤワサビ汁を購入してベンチに座り込む。

余談だが、学園都市製飲料の中で一位二位を争うほど需要のない商品である。

目の前の水の流れを目で追って五分ほどした頃だった。

「恭弥さん、超お待たせしました」

そんな声がしたので視線をあげると、待ち合わせしていた人物が目の前に立っていた。

いつものような痴女のような、だが至高である服装とは違い、薄緑を基調としたノースリーブのワンピースを着てお洒落に着飾っている。

恭弥は飲み干したゴーヤワサビ汁の空き缶を投げ捨て、口を開いた。

「ん、五分ぐらいしか待っていないから気にしないでいいよ。

それじゃ、行くところか。絹旗ちゃん」

今日、鵜沼恭弥は絹旗最愛とデートである。

爆ぜろ、リア充。

とは言っても、おそらく両者とも恋愛感情など抱いていないだろうが。

「でっどっどっに行きたいのっ」

「え、えつとですね……………実は恭弥さんと…み、水着を……………買いにいきたいと超思いました……………」

僅かに頬を赤らめてモジモジと答える絹旗。

……………おそらく両者とも恋愛感情など抱いていないだろうが。

まあ、そんな推測、いや、事実はさておき、そう言った絹旗に対して恭弥はあっけらかんとして口を開く。

「あそつ。じゃ、案内してくれ。水着の店なんざ何処にあるか知らねえからな。

ま、金は出すから気にしないでいいよ」

なんと、あの鵜沼恭弥がそう言った。

なんと、あの鵜沼恭弥の気前が良くなった。

なんと、あの鵜沼恭弥が漢おとことなった。

というのも、これには訳がある。

覚えておいでだろうか？二週間程前に恭弥が『アイテム』女子メンバーの下着姿をガン見した件を。

何があるかと電話一つで何でも殺害。

そんな彼女達が、7500カラットのダイヤモンド一億個が容易く霞むほどの肉体をタダで曝すことなどあるのだろうか？

――否である。

恭弥の48時間に及ぶ土下座(内47時間爆睡)と一人につき10万円の慰謝料(内40万円一方通行出資)の結果、一回だけなんでも言うことを聞く、という形で許して貰えたのだ。

麦野は高級コートとバッグの購入。

フレンドは高級バッグ二つの購入。

滝壺は快適そうなジャージの購入。

絹旗は今のところ特に欲しい物がないので保留、的な形となっていた。

故に以前御坂美琴に最初に出会った日、彼は麦野の要求を150万円円で完遂し、フレンドの要求を95万で完遂、滝壺の要求を5千円で完遂したのである。

桁が気になるが、滝壺本人が『……最高』と言っていたので気にしない恭弥だった。

さて、絹ちゃんはどうするのか、と思いつつも忘れ始めていた頃に絹旗が遂に要求を出した。

『あの……次の土曜に……買い物に超付き合って欲しいのですが』  
との事。

すぐに思い出し、二つ返事で了承したのが御坂迎撃の仕事の翌日のことであった。

そんな訳でこんな状況へと陥っているのだ。

「えっとですね……ここら辺だとセブンスミストが一番品揃えが超良いですね」

「おk、行こうか」

再びゴーヤワサビ汁を購入してそう言う恭弥。  
美味そうにゴクゴクと音を立てて豪快に飲む。

「……………それ超美味しいんですか？」

「超マズイよ」

「……………」

\*\*\*\*\*

絹旗と恭弥が水着売り場に着くと、  
超<sup>レールガン</sup>電磁砲がいた。

ハイ、帰りますか。

即決即断即行動。



という訳にはいかない。

なんせ今までの要求の中で二番目に楽なものなのだ。

しかも三番目と四番目の要求がヒドス、ということを考えれば絹旗に少しはサービスしてやろうと思うのも当たり前である。

(ふむ、……………『パイナッフルマン鉄壁の果実』の人形は……………よし、一つだけ持っているな。注文しといて良かった……………)

『ドラゴンロア』は五発……………よし、イケる！)

おい、ちょっと待て。

彼は一体何をしようとしているのだろうか？

全力でこう言いたい。

やめてくれ、と。

なんだかんだ言って、セブンスミスはレベルアップ幻想御手事件で大爆発があつたばかりであり、商品の被害を除いても、爆発したフロアだけで総額4,136,620円(約4百万円)の店舗被害があつたのだ。

ここで『ドラゴンロア』を放つとどうなるか？

少なくとも衝撃波による損害は二百万円は堅いだろう。

また、そんな事件が立て続けに二度もあつたとあつては、その後の集客に影響があるであろうことは間違いない。

詰まる所、そんな彼の行動は、集団リンチで入院し、ようやく退院したばかりの人間に全力のバックドロップを決めるようなものである。

セブンスミスが不憫でしようがない。

絹旗にだけ認識できるように影を薄くすることも可能だが、そんな面倒な事をするくらいなら『ドラゴンロア』を投げつけてやろう、という迷惑極まりない決意で足を動かしていた。

一方、御坂美琴の顔を知らない絹旗は何か気にした風もなく、口を開いた。

「では超選んでくるので少し待ってて下さい。後で一言もらえると超助かります」

「はいよ」

絹旗と別れ、店内にボケッと突っ立って待つ恭弥。

糞マズイな、と思いつつもゴージャワサビ汁三本目を飲み干した頃、遂に第三位のサーチに引っ掛かってしまった。

ズシンズシンという効果音がピッタリな雰囲気です。恭弥に詰め寄る御坂。

その姿はバーバリアン。

「アンター……こんなところまで来てどういっつもりよ？」

見たところかなりご立腹のご様子。

それに、あの時より僅かにやつれている様子から、実験が続いていることを知ったんだなと確信する恭弥。

ま、どうでもいいけどな、と思考を放棄して答える。

「どうもごつもねーよ。何？俺がお前に会いに来たとも思ってるの？バカなの？自意識過剰にも程があらあー。」

今日はあの子と買い物に来たんだっつーの

そんな彼女にヤレヤレと肩を竦め、絹旗を顎で示してそう言う。

その先に御坂が視線を向けると、難しい顔をしていると水着を手取る絹旗の姿。

暗部に所属しているとは言え、仕事でない日はただの少女である。そんな無邪気な様子の絹旗に御坂は毒気を抜かれた。

まあ、暗部に属している者なら、彼女が眉一つ動かさずに人命を奪うような人間であろう事はすぐに気づくだろうが、御坂美琴は表の世界で生きてきたのだ。

彼女が気づかなかった事はご愛敬。

そして恭弥は続ける。

「ま、オフってやつだ。

それに前も言っただろ？俺自身としてはお前に危害を加えるつもりは無いって。

だからそう警戒すんな。

これ以上突っ掛かって来るようだったらあのスタングレネード投げつけんぞ」

「……………わかったわよ……………」

トラウマになっていたのだろうか。

恭弥がそういうと、御坂は僅かに顔を青くして食い下がった。当面の面倒事は去ったと恭弥は力を抜いて視線を下ろす。

御坂の持つ水着に。

「それにしてもみこっちゃん……………」

お前中学生にもなってそんなガキ臭い水着選んでんのかよ」

「なわっ!?! ちょー! し、失礼ね!

そ、そ、そんな訳ないでしょ!!」

慌てて取り繕う彼女に恭弥は呆れたように言う。

「別に他人の趣味を否定するつもりはないけどね、世間一般、って言葉があんだろ？お前がそこからズレてる事には変わりないよ。」

可愛い水着、じゃなくて自分に合う水着を選んだ方がいいんじゃない？」「

「う、うっさいわね！これはたまたま手に取っただけよ！

そんな事言われなくても分かってるわ!!」

「ふーん。自分がズレてる事を認識してんなら軽傷か」

「そっちじゃないわ!!」

軽口を叩き合い、カラカラと嗤う恭弥とぐぬぬと睨む御坂だが、周りの人の目はこう言っていた。

死ね、リア充。

だが、御坂美琴には——本人は自分の気持ちを理解できていないだろうが——ちゃんとした想い人がおり、一方、恭弥はある事情によりそんな感情を抱いていないため、そんな構図には決してならないのが幸いである。

そして、会話が途切れた頃に御坂が重々しく口を開いた。

「……………実験はまだ続いているわ。」

結局、設備やデータは他の研究機関に移ったらしいの」

「あっそ。それぐらい知ってるわ。」

もういい？裏の事をこんな所でベラベラ喋ってんじゃないよ。今回は絹旗ちゃんのターンな訳。わかる？

突然出てきてこれ以上ゴツソリ場面を取っていかないでくんね？」

「……………へ？」

「じゃね。」

絹旗ちゃん。決まったー？」

「は？ちよー！」

一気に話題が面倒な方向へ走り始めたため、速攻で話を打ち切って御坂から逃げた恭弥。

御坂の制止を振り切って店内を進んでいく。  
その先では絹旗が二つの水着で悩んでいた。

「むむむ……………」の二つで超迷いますね。

……………えっと……………じゃあ…試着するので……………その……………超見てもらってもいいですか？」

恥じらいながら問うその姿に、そんな恥ずかしいなら見せなきゃいいじゃん、と思いつつも了承する。

「いいよ。ま、超投げやりなアドバイスはしてやるよ」

「ええ!？」

「ほれ、入った入った」

絹旗を試着実に投げ入れ、懐からゴーヤワサビ汁を取り出し飲み始めた。何故そんなにストックしているのか甚だ疑問だ。

そして、半分ほど飲んで段々胸焼けがして気持ち悪くなってきた

時、カーテンが開いた。

「ど、どうですか？」

出てきたのはスカートの付いたピンクを基調としたワンピース水着姿の絹旗。

小柄な絹旗によく似合っており、恥じらいながらそう尋ねる様子が可愛らしく映る。

「……………あれだな……………一部の嗜好家達がprprしたくなりそうな感じ」

「……………超なんですか……………その評価……………」

「ま、可愛いよ。いいんじゃない？」

「……………か、可愛い……………」

「おう。じゃ、もう片方も着てみれば？」

「そ、そうですねっ……………」

再び閉まるカーテン。

絹旗の表情がウキウキしたものとなっていたことを怪訝に思っても、特に気にせずゴーヤワサビ汁を一口飲んだ。

## 16話「絹旗とデート」

薄暗い研究室に電話の音が鳴り響く。

だが、それに反応する人影はなく、電話はただ鳴り続ける。

そして三分ほど経っただろうか。

部屋の一角で、一つの影がもぞりと動いた。

電話が鳴り響く中、もぞもぞと動き続け、ついにゆらりと立ち上がる人影。

それは背中の中ほどまで髪を伸ばし、青白い肌をした白衣姿の女性。

彼女は電話を無視し、眠そうに目を擦りながら五分かけてコーヒを淹れ、一口飲んだ後に漸く電話に出た。

「はい。こちら木原方針です。

えー？ なになにー？

……………アハハ、君達バカだね。

いいかい？ アレは君達が想像しているような物とはかけ離れた存在だよ」

全く電話に出なかった事を謝る様子もなく、マイペースに応答する方針。

終いには相手を馬鹿にして鼻で笑って『バーカ（　　）バーカ（　　）』というメールを送り付け始めた。

結果、当然の事ではあるが、電話をかけてきた人物はキレた。が、相変わらず馬鹿にしたような口調で続ける彼女。

「おっと、そんなに怒らないでくれたまえ。」

「……いや、言っとくけど、参考にならないよ？アホなの？だってアレはそっちがベースなんだから。」

「……アハハ、ダメダメ。無駄になると分かっているのに貴重なデータを渡すバカがどこにいるんだい？」

「じゃあね」

相手のバカバカしい要求に呆れて方針は電話を切り、ついでに電話線を引き抜いた。

そして欠伸を噛み殺しながらコーヒーを飲み干しポツリと呟く。

「レベル6ね……まあ多分無理っしょ。」

イマジンプレイヤー  
幻想殺しが関わってきちゃったらしいし。

「ヒーローは強いっ！ってね」

あーダメダメ、と絶対能力進化計画が潰れる事を嘲笑していると次第に全てがどうでも良くなってくる彼女。

はぁ、と溜息を吐いて機器を起動させて明るく映し出された画面を見ていると、研究意欲が湧くどころか愚痴しか湧いてこない。

「あーあ……彼が一番成功したんだけどなあ……まあ、あのままやっててもレベル5止まりって樹形図ツリーダイアグラムの設計者で出てたから別にいいけど……あーあ……」

ま、いずれにせよ彼じゃ一位と七位には絶対勝てないし」

と、そこまで言うてから何かに気付いたように少し考える方針。

「ん？……うーむ……刺激を与えてみるかね……」

よしっ！そうと決まれば寝よう！」



うははー、と笑い再びパタリと横になる。

だが、彼女の右手は手際良く動いてコードを打ち込むなどの必要な操作を行っていき、全てを終えてからパタリと止まった。

これは三日ほど前の事である。

\*\*\*

「ど、どつですか？」

「おKーそっちでいーうー…テラ可愛いー！」

カーテンが再び開き、白いビキニを着た絹旗が視界に映る。

このとき恭弥の頭の中は、

(露出最高！)

この一点に集約されていた。

可愛らしさ？何それ食えるの？

見えそうで見えない、露出度高めで、よりエロく！を地で行く彼にマトモな評価ができる訳がない。

絹旗の抱きつきたくなるような地肌を目の当たりにした彼のテンションは天元突破。

まあ、絹旗に大分似合っていた水着だったので結果オーライといったところだろう。

また、恭弥にかなり高いテンションでそう言われた絹旗は、一気に

顔を赤くし、超恥ずかしがりながら、

「ち、超有難うございますー！で、ではもう超着替えますね！」

とカーテンを閉めようとするが、

「おー！もっちと見せてー！」

恭弥はカーテンを抑えてそれを阻止し、矛盾する言葉を放つ。  
欲望に忠実、これが売りの第八位です。

空いている手で、ガツシリと絹旗の小さく可愛いらしい肩を掴み、  
超ガン見。

たまたま、その姿を目にした第三位は、(うわっ、アイツやっぱ頭おかしいのかな?)とドン引きした。

「えっ!?あ、あ、あわわわわっ!!?!!」

そして、遂に絹旗のキャパが原子崩れした!

結果、カチリと固まってしまふ絹旗最愛!

一方、恭弥は絹旗の肉体に心理掌握されてそんな彼女に気付かない

! ゴーヤワサビ汁という未元物質<sup>ダークマター</sup>を飲み干して空き缶をコインサイ  
ズにまで握り潰し、適当に脇へ弾く!

そのままゴミ箱へ吸い込まれた超電磁砲<sup>レールガン</sup>!

カキンッ……………!!

その際の音が絹旗の硬直を念動砲弾<sup>アタックフラッシュ</sup>  
オフェンスシューマー  
瞬時に展開された窒素装甲!

目を回してテンパリながらも恭弥の顔面を的確にドカン！  
まさに、こっから先は一方通行！  
これこそギャグパートによる能力無効という因果律！

「ふっ……………我が人生に……………一片の悔い……………」

口から血を吐き、ガクリと跪く恭弥。

残る体力を振り絞ってなんとか言葉を紡ぎながら徐々に前に倒れ込んでいき、

「…あるわ」

そう言ってスクリと何事も無かったかのように立ち上がり再び絹旗をガン見。

最早ただの変態である。

気持ちは分かるが。

顔を真っ赤にして相変わらずあわあわとした絹旗は恭弥を蹴飛ばし、今度こそカーテンを閉めて着替えるのだった。

\*\*\*

「えっと……………その…今日は超有難うございました」

「おっ、いいって事よ」

結局、後者の水着を購入した後、滝壺より値段が安かった事もあり、恭弥の奢りで一緒に昼飯を食べて帰路についたのだった。

絹旗は感謝の言葉にそう返され、嬉しそうに頬を緩めた。

そんな彼女を視界の端に収めつつアイスを舐めていると、ふと気付いた。

僅かに目を細め、顔の向きは固定したまま眼球のみを動かし、ジロリと周囲を舐め尽くすように観察する。

誰にも悟られないように。

極力ぎこちなさが表に出ないように。

感覚を研ぎ澄まして五感を総動員。

得られる情報はいつもと変わらない平穏な日常の街並み。

だからこそ際立つ違和感。

表の人間は気付く筈がない。だが、裏の人間でも気付く方がおかしいと思えるその違和感。

必死に隠蔽しているようには感じられない。だが、気付くか、と問われると大半の者が、否と答えるであろう異質。現に、あの絹旗ですら気付いていない。

ソレは、近い。

ソレは、離れていく。

ソレは、何故か彼を惹き付ける。

興味でも、恐怖でも、期待でもなく、本能で鵜沼恭弥はソレに惹かれた。

「絹旗ちゃん、俺ちょっと用事があるからさ、ここでお別れだ」

「そうですね。では、超また後で」

「ん」

絹旗と別れ、姿見えぬソレを追う。

## 17話「鼻血」

夕陽の眩しさに目を細めつつ、鵜沼恭弥はソレに声をかける。

「そろそろ顔を見せてくれませんかねえ」

低く、威圧的な彼の声が重く、静かに響く。

場所は第二学区。その中の警備員アンチスキルの訓練場。

ちなみに、警備員などとふざけた当て字であるがその実態は、散歩するような気軽さで発砲するなど序の口であり、パワードスーツ駆動鎧<sup>パワードスーツ</sup>——いわゆる内部操作型装甲兵器や超音速爆撃機などの兵器を所持する学園都市の私兵集団である。

また、警察業務……否、軍隊業務という過酷な環境で命を失う可能性のある職場であるにもかかわらず、賃金なしのボランティア活動であり、しかも死亡した際に対する扱いが明記されていないと最悪の労働環境。

労働基準法などなんのその。

更に言えばこれは志願制。

つまり、上記のような条件を了承した上で死地に飛び込むというボケナス共の集まりである。

——以上、鵜沼恭弥の評価より。

閑話休題。

その後、違和感の正体の後を追うも、近付けば離れて行き、離れば近付いて来て必ず一定距離を保たれ、ここに来るまで恭弥はソレの姿を見ることができなかった。

結果、ソレに誘導される形となってここへ来てしまったのである。  
相変わらず続く嫌悪感。

当初、ソレに惹かれたのは、単にソレの持つ違和感に無意識の内に興味を持ったからだと思っていた恭弥だが、暫くして違う事に気づいた。

感じるのはただの嫌悪感。それのみ。

毛虫などの気持ち悪い物に対するような、近づきたくない、という類のものではない。

ゴキブリなどの不愉快な物に対するような、抹消してしまいたい、という類のものである。

故に彼はこれまでにない位、機嫌が悪かった。

突き刺すような視線をソレがいるであろう方向に向ける。

未だ動かぬソレに向かって。

一步。

踏み出した、その時。

すうっと物陰からソレが現れた。

ケタケタ嗤うソレは恭弥と同年齢ほどであるう少年。

「クカカ、まあまあ。

そう脅かさないでっていう感じよ。

俺、ギスギスした空気って嫌いな感じだからさ」

茶髪の髪をオールバックにしたその少年。

一見どこにでもいる<sup>スキルアウト</sup>武装集団のような外見。

だが、二点だけ普通でないものを持っていた。

右目が真っ赤に染まっており、その瞳は爬虫類を思わせるような黄色である、という点。

そして、袖から出た彼の右手は、タンパク質なんてものではなく、のっぺりとした白い物体である、という点。

明らかに人の道からは外れた肉体。

それを目の当たりにし、第八位は驚愕に顔を染める。

特に右目を凝視して、恭弥は重々しく口を開いた。

「お前……『ジェネレーション』の……遺物……か……？」

震える口からなんとか言葉を絞り出す。

様々な考えが交差し、ずるずると思考の渦へと飲み込まれて行きそうになるも、必要最低限の警戒は解かない。

対して、そう問いかける恭弥に少年は再びケタケタと嗤って答える。

「クカカ……遺物……遺物ねエ！

カカカカカ!!

オイオイオイオイ!!

アンタみてエな腰抜けと一緒にすんなって感じだなア!!  
時代は常に移り変わるって感じよオ！」

そこまで言っ言葉を切った。

そして表情を一変させ、侮蔑の眼差しを恭弥へと向ける。

「俺は新世代だぜ、先輩。古臭いポンコツはお払い箱ってやつだ。

あーア、これが第八位ねエ……ガツカリって感じだわ。

あの人が高傑作とか言ってたが……ハッ！期待外れって感じだなア!!」

そう言い終えるのと同時だった。



「ガッ!？」

隕石をぶち当てられたような一撃だった。  
超音速爆撃機で体当たりされたような一撃だった。  
体が多数の肉片と化すような一撃だった。

少年の背中から三枚の右翼が飛び出し、恭弥を薙ぎ払い、50m以上吹き飛ばしたのだ。

それにより恭弥は近くの倉庫に激突し、その瓦礫に押し潰された。

背から飛び出たソレは彼の右手同様に、白くのっぺりとした気色悪い翼。

ただ、脈動している黒い紋様が入っており、それが気色悪さに拍車を掛けている。

「ハァーイ、終了って感じで。」

あの人が絡んで来い、って言ってたから来てみたけど、大したことねエじゃーん」

恭弥が埋まっているであろう瓦礫の山を見て、少年はただ愉快そうに嗤う。

確かな手応え。

確実に命を刈り取ったであろう一撃。

一目見て即座になんとなく気に食わないと思った相手。それがどのような死体となっているのか想像して快感に身を震わせる。

「ウゼエクソ野郎を潰した時のこの爽快感!! イィねエ! イィねエ! 最高って感じだねエ!!」

心底愉快そうに叫び、心の底から嗤い飛ばす。  
と、その時だった。

「あそお。それよりさ、絹旗ちゃんの水着姿の方が最高って感じじゃね？」

凜、と呑気な澄んだ声が響く。

「あっ？」

直後、

ドッ！

と瓦礫が吹き飛び、230万人の頂点、レベル5の第八位がゆらりと立ち上がる。

その右手に握る携帯の画面には、先ほど撮ったばかりの絹旗の姿。その写真の一撃はいかほどか。

第八位の虎をも殺しそうな鋭い眼光は画面に向けられ、それに伴う写真への果てしない集中力は膨大な威圧感を周囲へ放つ。

少年は僅かに目を見開く。

あれほどの攻撃を加えたにもかかわらず、生きているどころか途轍もない殺気のようなものを撒き散らしているのだから。

だが、それでもやはり無傷とはいかなかったようだ。

赤い、紅い、朱い、鮮血が溢れ出る。

血液という生存に必要な不可欠な液体が、ドバドバと滝のように流れ

出ていく。

主に鼻から。

## 18話「真面目回」

二人の少年が対峙していた。

一人は嘲りの笑みを浮かべる少年。

一人は出血しつつも物凄い威圧感を放つ少年。

そして、後者の少年、鵜沼恭弥は頭をフル回転させ、演算を繰り返して――

(絹ちゃん……最高！)

抱きしめたくなくなるようなあの華奢な身体つき！人形みたいに丸くて可愛い肩！僅かに膨らむ発育途中の胸！ちっちゃいおてて！)

――いるのではなく、煩惱を繰り広げていた。

瓦礫から立ち上がった恭弥は現在進行形で鼻血がドバドバ出しているのだが、これではどちらが原因なのかサッパリである。

「あまりの凄さに鼻血が止まんねえぜ!!この一撃！俺の興味をググッと引いた！」

本当に問いたい。

どっちが原因だ。

写真の一撃か。少年の一撃か。

ハッキリして欲しい。

一方、そんな恭弥の言葉に嘲笑する少年。  
翼を存分に広げ、殺意を振りまく。

「ああ？興味イ？ハハッ！馬鹿かオマエ？

そんなん湧いたところでオマエの死はもう決まってるって感じなんだよオ！」

そんな彼を無視し、恭弥は携帯画面をガン見である。  
鼻血は一向に止まらない。

もつとっちでもいいから早く止めるよ、と思うのだが、本人はそんな暇があるなら一秒でも長く見ていたいとただ見続ける。

(この健康的で華奢な身体つきが……………そそる！)

ああ、神裂の水着姿も見てみたいなあ……………いや、巫女装束の方がイイかなあ……………？

麦のんって裸エプロン似合いそうだよね……………)

が、時はやって来た。

彼の思考は神裂と麦野へと映り、携帯の電源を落として頭の中で妄想を繰り広げる。

そう、今こそ血を止める時。

……………前言撤回。時はやって来なかった。

一秒でも長く妄想しよう、と鼻血を止める事などしない。

対して、そんな恭弥の心境を知ってか知らずか、少年は嘲笑い、言葉が続ける。

「ちっきの一撃。あれを避けられないどころか無力化できない時点で俺に殺される未来しか広がってねェんだよオ！」

ゴッー！

と突風が吹き荒び、少年の右翼から人間の腕ほどの白い杭のような物がいくつも放たれる。

ここにきて漸く、恭弥は思考を切り替えて演算を開始する。  
飛来する杭の運動を分析し、各エネルギーを割り出す。

そして、いつものように変換ルートを組み立て上げ、杭に触れ、――

「ぐッッ!？」

――容易く、貫かれた。

脇腹に巨大な穴が空く。

間違いなく致命傷。

異変に気付き、咄嗟に身体を捻っていないければ、今頃恭弥は体のど真ん中に穴が空いて心臓は吹き飛んでいただろう。

瞬時に危険と判断し、防ぐのではなく、回避することに専念する。

「あつれエ?」自慢の能力はどうしたんですかア、先輩イ?」

全ての杭が地面に突き刺さり、辺りに罅を入れる。

その中、恭弥は脇腹を抑えて口から血の塊を吐き出し膝をついた。  
ゴホッ!ゲホッ!と咳き込みながらクソツタレと恭弥は続ける。

「おっかしいなあ………どうしたんだろっね」

そう呑気に返すが、恭弥の顔は動揺で引き攣っていた。

というのも、ある一つの考えが浮かんでいたのだ。それは、最悪の

ケース。

しかし、会話、纏う雰囲気、相手の動作、そして能力。それらを統合して下すことが可能な、現状考え得る限り最も可能性の高い推測であることには違いない。

となれば油断はできない。警戒は解けない。

相手の一挙手一投足を見逃さないよう少年の全体像を細部まで捉える。

「オイオイオイ!! なんですかア!? その気の抜けた感じの臨戦態勢はア!!

もう死ねって感じだなア!!」

そんな恭弥に対し、少年はそう叫ぶと翼を大きく広げた。そして一気に間合いを詰めて来る。

空気抵抗を完全に無視した動き。

ここで恭弥は確信する。

「……やっべ、死ぬわコレ。」

翼が振るわれるその直前、能力を使用。

行方は位置エネルギーから位置エネルギーへの変換、つまりはエネルギー保存。脳内で十一次元の絶対座標の演算を開始。

一瞬で500mほど離れた別地点へ空間移動<sup>テレポルト</sup>する。

だが、移動直後に建物を貫き、真横を通り抜けるいく本もの白い杭。

(あっちも俺の居場所は何となく分かるみたいだな……………)

反撃するにしても情報が足りん……………

よし、逃げよう)

推測に関しては恐らく外れてはいないだろう。だが、そうとなると一つ疑問が残る。だからと言って無闇に手を出せば最悪死ぬ。

それ故の戦略的撤退。

背後の破壊音を分析しつつ、全力で演算を開始し、相手から離れる事に集中する。

途中、警備員アンチスキルの装備品であろうか。対戦車ライフル、鋼鉄破りメタルブレイターを見つけフルオートで全弾を自分に撃ち込み位置エネルギーへと変換。舞台は空中戦へ。

ある程度まで上がり、残りのエネルギーを運動エネルギーとして変換し、空を飛翔する恭弥。

杭を放ちつつそれを追隨する少年。

(杭の破壊力は一定っぽいな…)

現在、あの杭とヤツの周囲以外における物理法則は正常。

速度はあれ以上、上げられないとみた)

杭を避け、速度を上げ下げし、建物の一部を筆り取って投げつけるが、少年はそれらに対して効率的過ぎる対応を取ることで対処する。

対して恭弥は少年の行動より発生する音、熱、電磁場、衝撃波、ありとあらゆる外部情報からの確に相手のスペックを浮き彫りにしていく。

と、そこで大通りに出る。

出てしまった。

演算と分析、そして焦りで周囲の状況を捉えることができるほどの



余裕が無かったのだ。

大通りを越えたその先に見えるのは5つのお嬢様学校が共同運営する地帯、学舎の園。

(……………マズった)

そう思った。

そう思うぐらいしかできなかった。

防ごうと思っても、時すでに遅く、先程避けたばかりの不気味な白さを持つ杭がいと也容易く外壁をぶち抜いた。

## 19話「真面目回」

学舎の園全域にアラームが鳴り響く。

が、二秒と経たない内にその警報は消えた。

「うっせ」

理由は至って単純。

恭弥が音のエネルギー及び、警報を鳴らす電気エネルギーを全て別のものへと変換した為だ。

それは肉体の回復に使用するエネルギー。

呻きながら右前腕に刺さった杭を引き抜き、脇へ放り投げると、溢れ出る鮮血が滴り落ちた。

だが、それに構わず後ろを振り返って目的の人物と対面する。

「……え？………ちょ、ちょとお!!これはどういふことかしらあ!!」

そこには金色の髪を腰あたりまで伸ばし、小さな肩がけバックを持つ少女。

そんな彼女は非常に警戒していた。

なんせ、男子禁制でありセキュリティ万全の筈の学舎の園の中に一人の少年が立ち入っており、しかも彼は、彼女に飛んで来た杭を己の右腕を犠牲にすることで止めたのだ。

ここから考えるに彼は彼女に危害を加えるような人物ではないと推測できる。

が、それとこれとは話が別。

警報が鳴ったということは、彼がここへ無理矢理侵入したという事

になる。また、突然飛来した謎の杭に関わっているであろう事も間違いない。

そこまで考えて、少女は軽くパニックになりながらも、リモコンを恭弥に向けて警戒の色を浮かべていた。

そのボタンを一押しするだけで目の前の少年は従順な操り人形と成り果てるはずである。

そして、鵜沼恭弥は勿論、彼女の能力を知っている。リモコンがその媒体である事も知っている。

が、それを気にした風もなく、焦燥を顔に浮かべて彼は彼女に頼み込んだ。

「頼み事がある。」この一帯にいる生徒を一人残らず避難させてくれ。

お前の力なら余裕だろ、第五位」

「それは…一体どういう…」

つもりい、と続けようとした時、別の男の声が割り込んだ。ケタケタと唾う全人類を見下したようなその声は前方の建物の屋根の上から放たれた。

「カカカッ!!こりゃ驚いたって感じだ!まさか100mもしない所に第五位がいるなんてよオ!!取り敢えず死んどけて感じだわ!」

刹那、数多の純白の殺意が降り注ぐ。

第五位、食蜂操祈はただ、驚愕に顔を染める。

絶望する暇はない。

ましてや死を覚悟する暇などない。

移り行く状況について行けずただ啞然とする。

事態が飲み込めず、先程から硬直していた彼女の取り巻き達も急展開について行けずにただ驚愕するのみ。

そして、死が彼女達に牙を剥き、

「パイーン」

——緊張感のない声が聞こえた。

同時にバツと彼女達の視界を何か巨大な影が覆った。

それは、巨大な長方形の幕。

どうやったのかは分からないが、その幕の四隅は建物に突き刺さり完全に固定されている。

だが、あんな物を広げて何になるのか。

一目見ただけで分かる。あの杭の威力がどれ程のものか。

この程度の幕では速度を落とすことすらかなわないだろう。

そう思う食蜂だが、その予測とは裏腹にいつまで経っても杭は幕を貫いてこない。

「ムカつくけどやっぱりすげえな、アイツ。

未元物質ダークマターでさえも防ぎきることが出来る物を開発すんだからなあ

鉄壁こゝろなの果実なを開発すりゃ、そりゃ研究資金ガツポガポだわな」

恭弥はポツリと呟きながら音速を超えた速度で拳を前に放つ。

拳の持つ運動エネルギーとそれが放つ音のエネルギー、衝撃波のエネルギー。

さらに、音の壁を破った事による爆音のエネルギーと、伴う衝撃波のエネルギー。

全てを変換。

方向性を指定。

直後、その拳から何か不可視のものが放たれ、それは幕を容易く貫いて翼を持つ少年を遠方へと吹き飛ばした。

そして、そりやどうでもいい、と恭弥は食蜂に再び向き直る。焦燥感に駆られるが、このような状況で慌てても逆効果にしかならない事を彼はわきまえている。

故に強制的に心を落ち着かせて食蜂操祈に話しかけた。

「自己紹介がまだだったな。

俺は八位、鵜沼恭弥だ。

まあ、だからって訳でもないがアンタの事は知っている。それを見込んで頼んでいるんだ。

アイツとは一緒に殺し合う仲でな、ここら一带に被害が出るから生徒達を早急に避難させてくれ。

三度目は言わないぞ、食蜂操祈」

真剣な眼差しで頼み込む恭弥を一瞥し、彼女は答えた。

「……………後でもいいわ。どついつ事か説明してもらつたよあ」

恭弥を信じる訳ではない。

彼女は幼少の頃から人の持つ悪意という物に触れてきた。

故に、御坂美琴の様に安易に相手を信じることなど絶対にしない。だが、現在得られる情報から判断した場合、現状、それが最善策。

恭弥の頭を覗くのがベストだろう。しかし、あの翼を持つ少年が異質であるう事は見てとれた。あの程度でくたばるとは到底思えない。

二人の激戦が再開するまでにどれくらい猶予があるか分からない。こんな状況で、のんびり能力を使って事態の把握など愚の骨頂。

兎も角、二人が敵対しているであろう事は容易に推察できるのだ。  
それ故の最善策。

しかし、何も知らないまま利用されるなど彼女のプライドが許さない故に、恭弥にこう言ったのだ。

後で頭を覗かせろ、と。

そして、彼女の言葉の意味を理解した上で恭弥は力強く頷いた。

「おk。三分以内に頼むぞ。

やっせん  
敵も来やがったしな」

「私の行使力を舐めないでくれる？一分もあれば充分よお」

既に彼女の能力はここら一带の人間を全て支配していた。

徐々に減っていく人の気配に舌を巻く恭弥。

「……流石、学園都市最強の精神系能力者」

そして、食蜂の切り返しに苦笑しつつ前方を見据える。

そこには憤怒に顔を歪めた少年の姿。

どうやら威力を完全には無効化はできなかつたらしく、頭からは血を流している。

それを見て恭弥は怪訝な顔をするも、食蜂自身にも避難を促すために口を開いた。

「お前も逃げろ。もう分かっていると思うがアイツにはお前の洗脳は効か——」

次の瞬間、恭弥は食蜂を抱え上げて宙を舞う。

先ほど立っていた場所には何本もの杭が突き刺さっていた。恭弥の視線の先には怒りに染まった凄まじい形相の少年。

「ざっけんなよオオオ!! 中古品がア!!」

俺の手を煩わせてんじゃねエって感じだア!!」

ダメージを与えられた事が余程気に障ったようで、翼を振るって膨大な風を恭弥達に向けて放つ。

地面の舗装がめくれ上がり、建物が余波で吹き飛ばすほどの爆風。

恭弥はそれを大きく退避することでやり過ごし、舌打ちしつつ食蜂に向けて言った。

「食蜂、スマン。ちと手荒になるぞ」

「えっ?」

返答は待たずに、彼女の位置エネルギーをいくらか取り込み、1km離れた場所の地面の上へと移動させた。

そして、食蜂操祈の保護という枷が外れたと言わんばかりに、

「はあ……………」

本気とか…………マジでキャラじゃねえんだけど」

ゆらりと純粹なる殺意を少年へ向け、第八位が戦闘を開始する。

## 20話「因果律」

ゴッ!!

と音速を超える速度で二人の人間が衝突した。

一人は三枚の右翼を携えた不気味な少年。

一人は外見上は何の変哲もないただの少年。

爆音が鳴り響き、衝撃波が周囲を薙ぎ払う。洋館のようなデザインの建物は一瞬で瓦礫へと様変わりし、地中海に面した町並みのような外観は地獄絵図の如く変貌していく。

その暴力の嵐の中心で繰り広げられる激戦。

振り下ろされる翼を躲し、恭弥は瓦礫の山を蹴りつける。

数多の破片が超電磁砲レールガンを超える速度で少年へと放たれた。

だが、少年は翼を下方から叩きつける事で衝撃波もるとも破片を上  
方へ逸らし、それと同時に純白の杭を放った。だが、恭弥はそこにお  
らず既に彼の懐へと潜りこんでいた。

足の位置エネルギーを固定して擬似的に足場を作り、恭弥は本気の  
正拳突きを繰り出す。

亜音速で放たれたそれは異質な翼による即座の対応によって阻ま  
れるも、少年を僅かに押し返した。

だが、その代償として恭弥の左拳の骨には罅が入り、所々皮膚が裂  
けて血が噴き出す。

それを気に留めず、プラプラと振って恭弥は口を開く。



「あーあ、全く嫌になるねー。  
なんで絹ちゃんもシヨツピングしてただけで殺し合いが始まるんだろー？」

相変わらず緊張感の欠片もない口調だが、そこにいつもの様な油断はない。

「ハッ！オマエ、元々女とお買い物なんて柄じゃねエだろ！  
くっだらねエって感じよオ！」

ま、どっちにせよぶっ殺してやるから安心しなア！」

大気の流れを止めて、そのエネルギーの全てを変換した恭弥の正面から熱波が放たれる。周囲への熱の放出はなく、翼を持つ少年、その標的の一点のみに向かって熱の猛威が振るわれた。

だが、少年は翼はその放射へ突き込むことで熱波を霧散させ、勢いをそのままに恭弥へと翼を引き伸ばして突き込む。

しかし、彼は回し蹴りを叩き込むことで翼を回避。同時に近くの建物を、そのまま少年へ向けて撃ち出した。

「甘エー！甘エー！そんな腐った感じの攻撃で俺を倒せるんでも思ってたのかア!? 中古品がア!!」

しかし、絶大な能力が振るわれ、一瞬で瓦礫へと変えられた。破壊の嵐が巻き起こる。全てを埃のように舞い上がらせ、悉く塵へと変えゆく大々的な破壊活動。

「サッサと死ね!!」

「オイオイ、あんま壊すなよ。九割型お前が破壊してんぞ」

少年が器用に放った回し蹴りを受け止めて、拳を静かに左胸へ添え、一気に重心を落とす。

それにより発生する反発力を横隔膜で増幅させ、右拳へと伝達、

——零距离からの、寸勁。

「シッ……」

メキヨ、と的確に左胸を捉え、間違いなく肺を潰したであろう一撃。少年の胸の中に拳が丸々一つ入り込んで、

「んな「ミみてエな感じの打撃が効くかよ……」

——バキツメキツゴキヤツと音がした。

「うっ……ぶあっ!!」

恭弥の体内で鈍く生々しい破壊音が炸裂した。

脈動する黒い紋様の入った白い翼が、恭弥の脇腹へと減り込んでいたのだ。

その翼は、あらゆるエネルギーを全て変換できる筈の彼の能力を貫いて、彼の体を勢い良く吹き飛ばした。

地面をバウンドしながら飛ばされる恭弥。

高速で地面に激突し、肉が削げ落ち、骨が削られる。

能力により勢いを殺し、持ち直すも、血に染まり満身創痍の状態。

顔の右半分はただれ、左腕からは骨が飛び出していた。

「はア、漸く死ぬかア」

そんな恭弥を見て、少年は単調作業が終盤に差し掛かったような軽さでそう言った。

目に見えて恭弥は重傷。少なくとも先ほどまでと同じ速さで動く事が出来るということはないだろう。

後は軽く翼を振るって首を落とすだけ。

だが、直後、聞いた者全てを怖気付かせるような重みある声を少年は妙にハッキリと聞き取った。

「お前がな」

刹那、少年は亜音速で宙を舞っていた。

刹那、腹に激痛が走っていた。

刹那、翼が二枚もがれていた。

「なっ……ん……なんですかアアアアア!!?!?!」

しばらく唾然とするも、すぐに驚愕が屈辱へ変わり、それが怒りとなって頭に血を上らせながらも、再び翼を生やし、それと同じ物質で腹の穴を塞ぐ少年。

空を叩くことで体勢を立て直し、恭弥を探し出す。

目の前に、いた。

満面の笑みを浮かべて。

無傷で。

「BANG」

コツ、と恭弥は少年の胸を中指と人差し指の第二関節で叩く。

「うぐっ……あああ!!」

直後に少年を襲う凄絶なる激痛。

内臓はズタズタになり、神経はひしゃげ、骨は罅が入るのが分かる。

あの程度の打撃で？

何故こんなに痛い？

何故こんなにダメージがある？

不可解な現象に疑問が渦巻くが、すぐに思考を切り替え困惑の泥沼から這い上がり、演算を行う。

激痛に耐えながらも、少年は死神の鎌のように、恭弥の首を刈り取らんと翼を振るった。

「悪いな。逆算は済んでるんだ」

「なっ!？」

だが、恭弥の首に当たる直前で翼は動きを止めた。  
今まで以上の驚愕が大きな隙を生む。

バゴンッ

と少年の体内を絶大な振動が爆音となって鳴り響き、彼の体は再び宙を舞った。

呻きつつも、近付かれないように杭を全方位に射出して宙に止まると、恭弥が100mほど前方にいるのを認識する。

「……………クソが……………舐めてんじゃねエよ!!クソがアアアア!!」

彼の憤怒に呼応し、脈動する黒い紋様。それが能力の強さを示すかのように、先ほどまでとは比べ物にならないほど巨大な杭が彼の周囲に展開された。

怒りのままに、彼はそれを放つ。

だが、

「だから逆算はもう終わってんだよ。

能力の本質が変わるならまだしも、今更お前の能力が強くなったところで何も変わらねえんだよ。

廃棄処分だ。新世代サンよ」

恭弥がそう言い切った時、杭が地に落ちた。大気の流れが止まった。気温が下がった。音が消えた。

「なっ……………ウソだろ!?俺の未元物質はこの世に存在しない物質だぞ!!それを逆算なんて出来る訳がねエだろオがア!!」

激昂する少年に対して、恭弥は面倒事を終えたと言わんばかりに脱力して答える。

「ハイハイ、安っぽい三下の台詞をいご苦労さん。」

確かに未元物質はこの世の物理法則をガン無視するからかなり脅威的なモンだわな。

エネルギーってのは既存の物理法則の公式に当てはめてみて初めて正確に捉えられる物だ。だから俺との相性は抜群に悪いと言える」

しかあーし、と恭弥は続ける。

「それなら計測し直せばいい。」

ま、エネルギーってのは精密なモンだからちよつと苦労したかな。

そのために、殴った。攻撃を食らった。わざわざ杭の威力を確認した。

この世に存在しない？

それなら存在する物として定義し直せばいい。あとはそれを演算に組み込むだけで十分だ」

「……！！」

少年は息を飲む。

言うは易し、行うは難し。恭弥はサラリとそう言うが、そんな事ができる能力者が果たして何人いるのだろうか。

少年は屈辱感に支配され、怒りが湧き出してくる。それを気にも留めず恭弥は言葉を紡ぐ。

「ま、そうは言っても第二位が相手だったら俺は確実に負ける。」

なんせ、続けざまに新しい物質を出されちまったら逆算が追いつかないからな。その間にゲームオーバーだ」

が、お前は違う、と彼は言った。

「戦闘行為からお前を細部まで分析してみたけどよ、お前の能力はその右半身に移植した未元物質ダークマターを操り、それと同じものを生成するだけだろ？」

「……………」

「ま、図星か。最初にその翼を見た時、お前が『未元物質ダークマター』の能力を扱

えると想定した。

けどな、そうすると一つ大きな疑問が残るんだよ。

『ジエネレーション』、またの名を『<sup>レベル5オリジン</sup>超能力者量産計画』。

もしお前が『<sup>ダークマター</sup>未元物質』の能力、それ自体を扱えるならあの計画が成功した、って事になる。

それだけは絶対にありえない。

それにいくら二位を真似ようが、お前みたいな量産品が『<sup>ダークマター</sup>未元物質』の能力を扱えるようになるなんて事も絶対にありえない。

だからお前の限界を知るために最初はひたすら逃げて観察に徹したって訳だ。

後はお前がどう組み立てられたか分析していけば攻略するのは難しくない」

ま、戦闘中に過去の記憶を参照しながら研究者みたいにじっくり調べ上げるのは骨が折れたが、と恭弥は付け加えた。

「お前の主なベースは第二位、及び第一位の思考パターンだ。ま、ずっと観察してりやどうなってんのかはすぐに分かったよ。」

二位の思考パターンをぶち込んで、移植した<sup>ダークマター</sup>未元物質で足りない部分を補完。ついでにモヤシの攻撃性を捻じ込んで出来上がり、ってところだろ？」

恭弥が確認するように少年を見やると、それが合図であったかのようになんか白い杭が放たれた。

だが、それはすぐに動きを止め、地へ落ちる。

それを気にせず、怒りの赴くままに少年は恭弥に接近し、右翼を用いた接近戦へと持ち込んだ。

上下左右前後から振るわれる凶悪な殺意。  
敵を肉片へと変え、間違いない惨殺するであろう攻撃。  
対して、恭弥は最小限の動きでそれを躲す。

「おっと……」

ま、確信したのは俺が放った熱波を受けて、頭から血を流してんのを  
見た時だな。

二位クラスの能力なら間違いなく無傷だ」

「クソがアアア!!死ねッ!死ねッ!死ねエええ!!」

逆算は済んでいる。相手の分析も完璧。

ならば、相手の動きを先読みする事など容易い。

猛烈な攻めを容易に回避して恭弥は言った。

「ま、お前のその能力としてはレベル3あたりが妥当だろ。

アレだなアレ。

本人のスペックが低くても装備が充実してるから強くなっちゃっ  
た、的な感じ?」

二位の思考を植え付けてるから、未元物質ダークマターをしっかりと使いこなせて  
るしな。

つつても、俺は単に相性が悪いから苦戦したが、種が割ればレベ  
ル5勢には瞬殺されるだろうよ」

まあ、五位はどうだか知らんが、と付け加えて、

「ちょっと黙ろっか」

ズドン、と少年は地に落ちた。

杭もまた然り。



目を見開いて驚愕する少年を無視して恭弥は続ける。

「ま、足りない部分を移植した未元物質データマターで補完する、って方法は確かに俺等の時はなかったわ。レベル5がレベル3に苦戦を強いられるんだから、確かに新世代ってのは凄いわな」

興味なさ気に話し続ける恭弥に対し、少年は何もしない。  
否、何もできないのだ。

杭を放とうと、体術で殺しにかかるうと、瞬時にエネルギーを変換されて動きを封じられてしまうのだから。

完全に制圧された証拠。逆算に狂いはない。

「だがな、お前の能力は所詮偽物だ。頭に打ち込まれた二位と一位の演算を利用してアイツ等の真似をしているだけ。そこには創意も工夫もない。

そんな紛い物の能力で俺を殺せると思うなよ。三下」

次の瞬間、恭弥の背後に巨大な竜巻が発生した。

突風が少年を竜巻に引き込むが、彼は翼を地面に突き刺すことではなくか体を固定する。

だが、それだけではない。

暴風が吹き荒れ、豪雨が辺りを打ち付ける。

気付けば学舎の園一帯が異常なまでに発達した巨大な積乱雲に覆われていた。

「スーパーセル、って知ってるか？」

地球上約11km以下、対流圏内を吹き荒れる風の中で、並行また

は垂直方向に、風向または風速に差が生じることがある。  
それにより、その二方向の風の間には存在する空気の回転を誘発。

本質的には異なるが、偶力が物体の回転を促すように、捻れのある風のある風により風の回転が発生するのだ。

ここに上昇気流が加わる事によって、その回転している風を上向き  
の回転へと方向曲げる。

そして、その曲げられて回転する空気の柱に上昇気流も合わさって  
回転し始めることでメソサイクロンが発生。

これが元となって発生する、自ら低気圧の如く回転を始める巨大積  
乱雲、これがスーパーセルと呼ばれるものだ。

それを、鵜沼恭弥は引き起こした。

『エネルギー変換』という能力ただ一つで。

少年は驚愕し、戦慄する。

「なっ…嘘だろ!?いくらお前がレベル5といえど、エネルギーを交換  
するだけでこんな災害級の自然現象を引き起こせる訳がねえだろオ  
が!!」

少年は今更ながらに知ることとなった。自分の挑んだ相手の底知  
れなさを。自分と相手の間に存在する圧倒的な実力差を。

「お前、なんか勘違いしてないか？」

俺の能力は『エネルギー変換』。

あらゆるエネルギーを別の…まあ、同じものでも可能だが、別のエ  
ネルギーへと変えるモンだ。

つまり、供給源さえあれば俺は思いのままに、ありとあらゆるエネ

ルギーを撒き散らすことができるんだよ。

って事はだ、要所要所に適切なエネルギーを、適切な分量だけ、適切なタイミングで入れてやれば、思い通りの現象を引き起こせると思わねえか？」

暴風が吹き荒れ、莫大な豪雨の音が響く中、恭弥は淡々と言う。

やはり能力を使っているのか、よく聞き取れるその声は、少年の脳内で空気振動から言葉へと変換され、正確に理解された。

確実に理解できてしまった。

だからこそ、現実を受け入れる事への拒否反応。

――ありえない。

その言葉のみが脳内で繰り返される。そう、そんな事ができる訳がない。

「そ、そんな複雑な演算ができる訳ねえだろ!!」

だが、

「何言ってるんだお前。」

そのための『ジェネレーション』だろ」

そんな少年の言葉に、恭弥はまるで単純な計算ミスを指摘するかの如く軽く答え返す。

そう。その程度、大した問題ではないと。

そして続けて言葉を紡ぐ。

「俺が存在するだけで全ての自然現象が発生する。」

それ故の因果律。

それ故の工<sup>アーセナル</sup>廠」

これが、八位。

あまりにも理不尽な、能<sup>チカラ</sup>力。

不気味な轟音が鳴り響く。

それは頭上の巨大な積乱雲、スーパーセルから。

条件さえ整えばどこでも発生し、一度発生してしまえば幾つもの街を容易く壊滅させるスーパーセル。

それはアメリカなどではシビアウエザーと呼ばれ、以下の激しい気象現象を多く発生させる自然災害である。

激しい集中豪雨。

大量の巨大な雹・霰。

被害級の強風・突風。

深刻な被害をもたらし得る竜巻。

そして、――

――被害級の落雷。

豪雨と巨大な雹で視界が遮られているが、良く良く目を凝らせば、どす黒い雲が所々鈍く光り、異常なほど帯電している事が分かる。

落雷といえど、電圧は200万から10億ボルト、電流は千から5

0万アンペアまで幅広い威力を持つ。運が良ければ、人の道から外れたこの少年なら耐え切れるかもしれない。

だが、それを操るは第八位。

間違いなく即死級の威力に増幅させているだろう。

いや、それ以上の、不自然なほどの威力まで引き上げていることは確実だろう。

けれど、少年はあることに気が付く。

そう、それは己の持つ三枚の右翼。

この世の物理法則を完全に捻じ曲げる最強の翼。

いくら落雷の威力が高かろうと、それはあくまでこの世界の物理法則に従っているのだ。

逆算されていようと、落雷による攻撃という事は、この世界の物理法則に従う自然現象での攻撃でしかない。

つまり、目の前の雷雲など気に留めるまでもなく、塵に等しい。

彼はニヤリと不敵に笑い、竜巻に巻き込まれないように己の身体を固定していた三本の翼の内、二本を引き抜いて己の体を包み込む。

「ハッ！」

確かにオマエはスゲエ！スゲエって感じよオ！

だがな、この世の自然現象に頼った時点でお前は俺に傷一つ付ける事が出来ないんだよオ!!」

勝ち誇ったように声を張り上げる少年に対し、恭弥はすっつと目を細め、口を開いた。

「無駄だ。お前の未元物質は逆算し終わった、って言ってんだろ。そっちの物質法則はこっちの演算に組み込み済みだ」

「……は？」

理解、できなかった。

そこには軽蔑も、怒りも、興味も無く、淡々とした無関心の声が続く。

「異質な法則をぶち込んでの現象の構築には苦勞したがな。

ま、詰まる所、これによるダメージはモロお前に響くぜ？」

啞然とする少年を無視し、続けて放つ言葉は死の宣告。

「他人のパーソナルリアリティに頼りきった猿真似野郎が。調子に乗るなよ」

鈍く輝く雷霆が爆音を轟かせて、学園都市の二画に突き刺さった。

## 21話「事後」

稲妻を落とし新世紀少年とやらを完全に消滅させた後、鵜沼恭弥は満面の笑みを浮かべていた。

晴れ渡った清々しく美しい夜の空。

塵一つない清く澄んだ空気。

周りに見える瓦礫の山、山、山。

星が美しく瞬き、神の存在を信じ込ませるように幻想的に輝く。

素晴らしい、大自然。

……うん、現実逃避はやめようか、と恭弥は呆然と辺りを見渡す。

(……………待て、よく考えろ。

起きたのは自然現象だ。

俺は関係ない……………そう、関係ない。

気にするな。学舎の園が九割型吹き飛んだが気にするな。

だって……………だって……………自然現象だしいい!!)

自己暗示をかけることで記憶を塗り替える第八位。

流石、ゲスい。

次に彼が取った行動は誰もがするであろう単純なものだった。  
そう、帰宅。

(ちやて、帰るつ)

オイ、ちょっと待て。

最早、食蜂操祈との約束の事など彼の頭からは飛んでいた。

鼻歌を歌いながら瓦礫を踏みしめて学舎の園から出ようと歩を進める。瓦礫が邪魔となって歩きにくいのが、先ほどの戦闘に比べれば大した事ではない。

現実逃避が上手くいったため実に気分が良く、アイテムの皆のためにはサンマでも買って買ってやるうと気が大きくなっていた。

このまま何事もなく、平和な日常へと戻ることができるだろう。

だが、現実はそう甘くなかった。

ガチャガチャガチャ、と周囲から発せられる音に彼は眉をひそめる。

疑問に思い、立ち止まって辺りを見渡せば、

「その少年…止まるじゃんよ…」

なんと警備員アンチスキルに包囲されているではないか。

啞然として目を見開く恭弥。気づかぬうちに包囲されていたからではない。

(…いつらアホか!?なんでどこにでもいるような男子学生に違法改造したアサルトライフル向けてんだよ!怖っ!!)

単純にガクブルしてたからであった。

いろいろ突っ込みたいたころはあるが、本人が心の底の底の底から思っているのだからどうしようもない。



ここで鵜沼恭弥は思考する。

今まで以上に必死になった結果、レベル6へ容易に到達するであろうほどの頭の回転を引き起こした。

そして、素晴らしいほどの熟考の果てに――

（よしー走って逃げようー途中で警備員の衣装を剥ぎ取って着れば逃げ切れるー）

――素晴らしいほどアホくさい案が出た。

ついでに言うておくと、衣装ではなく装備である。

重ねて言うが、彼等はコスプレをしているのではなく戦闘の装備をしているのである。

「よしーからせーよ」

警備員の警告を無視し、手を地に付けてクラウチングスタートの体勢。集中し、感覚を研ぎ澄ませる。

先ほどまでと同様に、エネルギーを変換、方向性を指定し、弾丸の如く全力で飛び出した。

ここで、鵜沼恭弥は一つ重大なミスをした。

ここで、鵜沼恭弥は一つ重大な事が頭から抜けていた。

刹那、異変を感じてそれに気付く。

だが、時すでに遅し。

(あつ…この演算形式…変な物理法則ぶち込んだやつだったわ)

直後、彼は頭から地面にダイブした。

\*\*\*\*\*

警備員の一人、黄泉川愛穂は困惑していた。

学舎の園で侵入者の存在を示す警報が鳴るも、数秒で途絶えたために警備員は最初、システムの故障との判断が下され、動かなかつた。だが、突如メソサイクロンの発生が確認されたため、生徒の保護及び調査の目的で駆り出されたわけである。

その後、生徒の誘導を終え、暴風の中を軍隊行進していると、突然雲が消えて美しい星空へと移り変わった。

ここで、疑いが確信へと変わる。

――間違いなく、能力者。

警戒し、辺りを見渡せば一人の少年がボケッと突っ立っているではないか。

しかし、ここは男子禁制の学舎の園。男子学生などいるはずがない。

ここにおいて、どう考えても彼の存在はおかしい。

(……………アイツが怪しいじゃん)

警備員の誰もが彼に気づき、統率の取れた素早い動きで、その元凶と思わしき少年を包囲する。

そして、あれだけの災害を引き起こした可能性がある人物だ、油断

はできないと黄泉川は気を引き締めて恭弥と対峙した。

「少年！動くなよ！」

そう、対峙したのだが、

「よういらせうと」

彼は警告を無視して地面に手を付けたのだ。

(まさか、能力!?)

咄嗟に身構えるも、対策を講じる前にそれは起きた。

ドゴッ!!

爆音が辺りに響く。衝撃が周囲へと走る。

その源は、物凄い勢いで地面へと激突した少年。

あまりの威力に、地面に罅が広範囲に渡って入り、岩盤がめくれあがった。

突然のことに皆が慌てて銃を向けるも、少年はビクンビクンッと痙攣して、パタリと力尽きる。

頭から腰あたりまでアスファルトの地面にめり込んでおり、無事ではないことは一目瞭然。

よし、落ち着け、これまでの事を思い返してみよう、と黄泉川は目の前で起きた摩訶不思議な現象を理解しようとする。

災害が発生し、その原因と思しき少年を発見、包囲した所で自爆された。

訳がわからず彼女は困惑するしかなかった。

「」  
「」  
「」

直後、場を支配する沈黙。

一秒すら一分に感じてしまつ、この空気。

この時、奇しくも警備員全員の一致していた。

(……気まず……)

果たして彼は何がしたかつたのだろうか？

そんな疑問が渦巻く中、黄泉川愛穂はとりあえず引き抜くために、彼に近づいたその時だった。

「待て！黄泉川！」

あのサイクロンを引き起こしたのなら間違いなく高位の能力者だ

！

絶対に油断するな！」

その言葉に黄泉川はハツとする。

確かにあれほどの現象を引き起こしたのなら、目の前の少年が超能力者か大能力者であることは間違いない。

そんな人物が何の意味も無く自爆するような真似をするだろうか？

「……否。これは罠。彼は間違いなく無傷。」

そこまで考えたところで、彼女は盾を構える。

(シリアスをコミカルに終わらせると見せかけて油断を誘うとは中々やるじゃん)

もう、彼女の心に油断はない。  
ダンッと地面を蹴って徐々に加速し、――

「おべっふうッッ!!」

――地面から生えた下半身を盾で、思い切りどついた。

バコンと跳ね飛ばされ、地面から抜けて宙を舞う少年。

そんな彼を見て黄泉川は啞然とする。

「痛っ……うおっ……目に血が!」

というのも、普通に頭から鮮血をドクドクと流していたのだから。  
結局、単純な自爆であった。

\*\*\*\*\*

鵜沼恭弥は激昂していた。

当然の事だろう。なんせ演算を失敗し地面に激突して重傷を負い、  
拳句の果てに盾でどつかれて無理矢理引っこ抜かれたのだから。  
まあ前半は自分の責任であるが。

「えっ!?何!?君等バカなの!」

地面から下半身しか生えてない人間をどつくか普通?バカなの?  
常識で行動できないの?

ねえ?どうなの?黙ってちゃ何も分からない。

ねえねえねえ?

何か反応しろやコリア!!」

なんだかんだ言ってサンマを買って帰ろうとするほど気分が良かった彼である。

それが数分後には、重傷を負った上に物凄い勢いでどつかれたのだ。

この凄まじい落差。

「ご機嫌など斜めどころか三回転半である。」

「わ、悪かったじゃん」

彼を知る者なら、お前が常識を語るなど言っところだろうが、何も知らない黄泉川はそう謝るしかない。

まあ結局のところ、今回は全面的に警備員側に非があるので当たり前前の事ではあるが。

「時速500kmで地面に突っ込んだんだよ!?! どう考えても常識的に重傷だろが!!」

お前等の頭の中身はメルヘンか何かか!?

現実と妄想の区別ぐらいしとけやボケナス共!」

正座してズラリと並ぶ警備員達の前で延々と説教、もとい罵倒を述べ続ける恭弥。

もちろん頭から血をドクドク流しながら。

彼の頭の血を止血しようとする者さえも一人残らず強制的に座らせているのだ。

なんだコイツ。

最早、女性警備員達の過半数は涙目である。

黄泉川はもちろんの事、警備員全員が、彼女を止めなかった自分達

も悪いという事を自覚しているので何も言えないのだ。

だが、流石に一時間の罵詈雑言に耐えかね、一名が行動を起こした。

「テメエ等にどんな権限があつて重傷者につつ！イタツ！ちよっ！ストップ！痛いっ！どつかないで！」

そう、黄泉川愛穂である。

確かに、常識外れな行動をとつて恭弥に余計なダメージを与えたことは済まなく思っていた彼女。

だが、流石に血を流し続けている生徒を放っておく事は彼女の教師としての信念が許さなかった。

それにいつまでもこうしては、肝心の災害についての情報が手に入らない。

故に彼女は行動を起こした。

「そんだけ叫べれば問題ないじゃん。確かにどついた件は全面的に私が悪かった。残りの罵倒は後で好きなだけ言ってくれ。

とりあえず頭の血を止めてから話を聞かせてもらつじゃんよ」

痛みに悶える恭弥に手錠をかけて、黄泉川は言う。

「ド派手な自然災害を引き起こした疑いで同行してもらつじゃんよ」

恭弥は一瞬キョトンとし、すぐさま真っ青に顔色を変えた。

「えっ？……………あっ！」

ま、待って！待て！待てえええ！誤解だ！冤罪だああああ！あれは単なる自然現象でしょおおおお！！」

午後九時五十三分。

こうして学園都市230万人の頂点、レベル5の第八位、鵜沼恭弥

は逮捕された。

寂しいサイレンが虚空に響いていった。

「それでもオオオオ！僕はやってないイイイ！」



## 22話「それでも僕はやってない」

「あの子に感謝しろよ。お前が無実であることを証言したんだからな」

そう言う警備員アンチスキルの視線の先には金髪ロングの美少女が立っていた。太陽の光を受けて黄金に輝くその髪は美しさを一層引き立てて、神々しさを彼女の身に纏わせていた。

「ちよっとお……どっして捕まってたのよお」

ぶー、と可愛らしく文句を言う彼女に対し、その言葉に反応を示さずスツと前に出る恭弥。

そして流れるような滑らかな動きで膝を折り、地面に手を付き、――

「……有難う御座いました。」

この御恩、一生忘れません」

――Oh…と感嘆してしまうような美しい土下座をした。

隈ができ、痩せこけ、無精髭が生えてやつれたその顔に涙を浮かべて恭弥はただ感謝する。

もちろん特殊メイクである。

その様子を見た食蜂操祈は流石に同情した。

\*\*\*

「俺はやってません」

「ハイハイ、レベル5の第八位なら簡単にできちゃうよね」

「俺はやってません」

「で？どうやったの？何故か君の能力が書庫バンクに登録されてなかったんだけど」

「俺はやってないですよオオオオ!!」

捕まってから一夜明け、朝六時から取り調べが始まった。

彼は吐血した。

(睡眠時間八時間って……俺を殺す気か!?)

そんな事で啞然とする鵜沼恭弥。三日前に六十二時間ぶつ通してTSUTAYAで借りてきた海外ドラマを見続けていた事など彼の記憶には残っていない。

起きてからの尋問。

朝昼晩の飯はコンビ二弁当。

そして続く取り調べという名の拷問。

小腹が空くと脱獄して手軽な物を買ひ、連れ戻されて怒られる。

からの尋問。

それが繰り返される日々。

それはジリジリと、地道に、しかし確実に恭弥にストレスを与えていった。

留置所の中で、

(チクシヨオオオ!!元はと言えばモヤシの奇抜なTシャツが原因だろオが!!)

支離滅裂な思考を繰り返し、

(絹旗ちゃんprpr)

時に喜び、

(神裂さん最高!)

時に恨み、

(なんで統括理事会は俺を釈放させないんだよオオオ!!)

時に嘆き、

(あの豆腐屋のザルでスーパーセルが発生したと!?)

学舎の園を豆腐屋のザルと間違えてしまうまでに彼の精神は追い詰められてしまった。言うまでもなく重症である。元からこうだったような気がしなくもないが。

そして、取り調べ開始から四日と十三時間後。

(俺がやったのかもしれない……)

とつとつ彼がそう思い込み始めた頃……

いや、実際に彼がやったのだから、思い込みでもなんでもないただの事実なのだが、そう思い直し始めた頃、

「おい、釈放だ。無実だったよ」

「おっーマジ？」

「おう。マジマジ。疑ってごめんな」

「いっいつ事よ」

突然釈放されたのである。

なんとという軽いやり取り。

なんとという適当感。

彼が感じるのは猛烈な解放感。

心躍るとはこの事だろうか。

恭弥は二十年ぶり（主観的）のシャバにテンションが高揚する。

そしてウキウキしながら外に出てみたところ、第六位、食蜂操祈が立っていたのだ。

彼女を視界に捉えた瞬間、言われずともピーンときた。

（ハッ！……ま、まさか……彼女が……豆腐屋の看板娘か……!?）

違えよボケ。

ちなみに、今回の件に豆腐屋は一切関係ない。

そんな彼の心を読んだかのようにタイミング良く彼女がしたこと  
を説明する警備員。

「あの子に感謝しろよ。お前が無実であることを証言したんだからな」

そんな警備員の言葉により、今度こそ理解する。

莫大な感謝の気持ちで涙が溢れてくるのを抑えられない恭弥。

(証言してくれたのはあの子か!! テラ女神! 誰だか知らんが麗しいお嬢さん、テラサンクス!!)

だが記憶が飛んでいた。

## 23話「ほのぼの回」

とある喫茶店で二人の男女が向き合っていた。

クラシックな音楽が店内を流れ、落ち着いた雰囲気醸し出している。知る人ぞ知る、隠れた名店、『コーヒー監獄』。

店内には彼等とマスターしかおらず、静かな空間が形成されていた。

木製の座り心地良さそうな椅子に腰掛け、金色に輝く長髪を弄りながら怪訝な顔をしている少女に対し、少年はコーヒーを一口啜り、

「シェフーーー!!」

「うっせえ！俺はどちらかと言えばマスターだ!!」

「ザーサイならコンビニで買って来い!!」

「コーヒー美味ええええ!!」

「そっちか！サンキュッ!!」

「パナナコッタ二つ！勿論無料サービスで！」

「オツケー！サービスで二倍の値段で提供しますよ!!」

「えっ!?ちょー！ウソオオオオ!?!」

一瞬で穏やかな落ち着くムードがガラガラと音を立てて崩壊した。

その元凶はカラカラと嗤いコーヒー五杯目を飲み干す恭弥と、豪快にガガハ笑いパナナコッタを二人に出すマスター。

どちらも場違い感ハンパないな、と思いつつ食蜂操祈はコーヒーを一口飲む。

「で？どついつことよお？最初から最後まで全部説明してもらおうよお？」

彼女としてはとにかく早く情報が欲しかったので、二人のやりとりが終わった頃に間髪入れず恭弥に尋ねた。下手にタイミングを見計らって再び漫才が始まってしまふのは御免だと、彼女は顔を顰めて問う。

そんな食蜂に恭弥は簡潔に答えた。

「アイツ、ケンカ売ッタ、オレ、被害者、イラツイタ、コロシタ」

THE・簡潔。もはや簡潔を通り越して投げやりである。

「そこはもういいわあ。」

私が聞きたいのは、貴方の全てよお」

「……………俺のスリーサイズがそんなに聞きたいか？」

訳が分からない。

ハ？と頬を引き攣らせて固まる食蜂。そんな彼女の心の中にあるのはただ一つ。

——なんだコイツ。

対して恭弥は続ける。

「一」の際だ、真実を言おう。

実はだな……

…俺も知らないんだ」

知っていたら末期である。

「いや、聞いてないし」

なんだこの脱力感、と呆れる食蜂だが、このままでは話が先へ進まない。

自分から話し始めないと進展しない事を悟った彼女は、さて何から話そうか、と思案しながらパンナコッタをつついて問いかけた。

「私の二つ名…っていうの？それ、知ってるかしらあ？」

「おう、アレだろ？」『メンヘラアウト脱精神疾患者』」

これは酷い。

再びピシリと固まる食蜂。

笑みを湛えてはいるが、明らかに引き攣っている。

対して恭弥はコーヒー七杯目に手を出し、静かに口を開いた。その眼光は猛者の色を帯び、纏う雰囲気は百戦錬磨を思わせる。重々しい荘厳な口調で一言。

「お前って…メンヘラだったんだな」

そんな真面目に言うほどの事でもなかるつに。

「は、はぁー!?はぁー!？」



何言ってるの!? そんな訳ないでしょ!!

『メンタルアウト  
心理掌握』 よお!!

メ・ン・タ・ル・ア・ウ・トお!!

「あつ、牡蠣フライ定食一つ」

「ここは定食屋じゃねえんだよ!! そんなもんあるか!」

「話を聞きなさいよお!!」

「ああ、そうだ。お前実はメンヘラなんだってな」

「ホント話聞いてた!?!」

ダメだコレ。会話が成り立たない。

\*\*\*\*\*

「ま、そんな訳でえ……私の情報収集力にかかればどんな情報も手に入るのよお」

やはり話が進まないと思い、強制的に進めるために一先ず自分の説明をし終えた食蜂。

そして、そんな彼女の話聞いて恭弥はパチクリとまばたきをし、手に持つコーヒーをコトリとテーブルに置く。

続けてパチパチと拍手を始めた。

「いよっー!流石!」

いや、パチパチどころかドバンツドバンツであった。  
あまりの轟音に店内のクラシック音楽などなんのその。雷管を続  
けざまに何発も放っているが如き様。  
なんと迷惑極まりない行為。

だが、それが意味するのは、それほど恭弥が感心したということ。  
それを理解し、食蜂は少し得意になってエツヘンとドヤ顔で彼を見  
る。

だが直後、彼女はそんな手を叩いておだてる鵜沼恭弥のその姿にホ  
カンとした。

というのも、彼の体は既に食蜂へは向いておらず、その向く先は、

「だろ!!この新作かなり手間が掛かるんだぜ?」

巨大ケーキを作り上げたマスターであった。

「だから話を聞きなさいよ!!」

食蜂は涙目である。

ダメだ。話が進まない。

\*\*\*\*\*

「さてと、………そんなじゃいい加減話を進めようぜ」

「貴方の口からそんな言葉が出るとは思わなかったわあ………」

頭に手をやり溜息をつく食蜂に恭弥は、追加注文した新作ケーキを

彼女の前に押しやって口を開いた。

「で？何が聞きたいんだって？」

漸くか、と顔を顰めつつ、ケーキには手を出さないうで食蜂は答える。

「はあ……私の情報収集力の話はしたわねえ？」

で、もちろん貴方の事も調べさせてもらったわあ」

「あそお。で？何かご不明な点でも？」

「ええ、あの日の貴方の行動と照らし合わせてみると、不可解な点が幾つかあったのよねえ。

そこで私は考えた。

あれは偽の情報だったんじゃないかしらあ？って

些細な反応も見逃さないと言わんばかりに恭弥を見つめる食蜂。  
対して、彼はイカスミパスタを咀嚼しながら考える。

(バレてたか……………あの新作ケーキがゼロ不味だったって事が)

操祈ちゃんの話の聞けよ。話を。

まあそれは兎も角、と呟いて恭弥は言う。

「ま、アンタになら言うってもいいか。

そーだよ。多分あんたが見たのはセキュリティランクBのヤツだ  
ろっ」

「ええ、そうよお。やっぱり偽情報だったのねえ」

「おうよ。モノホンは…まあ俺も知らないけど多分A以上でしょ。  
細かい事は知らね。内容知ってるからセキュリティランクなんて  
興味ないしね」

と、ここで恭弥は席を立って会話を切り上げる。

「ま、こんなところで物騒な話をするのもな。  
場所を移そうか」

「……ええ、分かったわあ」

チラリとマスターを一瞥する食蜂に、恭弥は威嚇の眼差しを向けて  
能力の使用を止めさせた。

しぶしぶと言った感じではあるが、それを了承して彼女も席を立  
つ。

パンナコッタは二倍の値段であった。

恭弥は泣いた。

## 24話「食蜂のターン」

第三学区にある個室サロン。

そこはカラオケボックスを豪華にしたようなものであり、時間毎に部屋を借りた客がその中で自由に遊べるという所だ。学園都市の人口の八割にあたる学生達は大半が管理された学生寮で暮らしているため、常に大人の目というものに曝され続けることとなり、ストレスの元になる。そんなこの街で、誰の目からも逃れる事が可能な個室サロンというのは、いわば『金で買える秘密基地』と言ったところだろう。一歩間違えば性犯罪の温床になる可能性もあり、そう簡単に褒められたものではないが、秘密のやり取りをするには絶好の場所なのだ。

そのの一室で鵜沼恭弥と食蜂操祈は向かい合っていた。

「さて、……………そうだな。一つ、言うておく」

「何かしらあ？」

「こっから先の事は他言無用だ。」

外に漏らした瞬間俺はお前を殺す」

「……………ええ、分かったわあ。情報の価値力は誰よりも分かってるつもりよお。その事なら心配しないでいいわあ」

「そか。じゃ、もう一つ。」

かなり上に限られるだろうが、上層部なら誰でも知ってるだろうこの話を俺は部外者にそう安々と話すつもりはない。

それなら何故お前に話すのか」

簡単なことだ、と続けて、

「お前のその便利な能力の恩恵を受けたいと思った、ってだけの話だ。足下に転がって来たチャンスは見逃さない主義なんでね。」

だから今後俺と組め。

いつも一緒に行動しよう、って訳じゃない。

単に、お互いを利用するってだけの関係だ」

黙ってこの提案を考える食蜂を尻目に恭弥は烏龍茶を一口飲む。

「加えるとすれば、裏切りは無し、ってところか。」

ま、それなりにお前にも益になると思うぜ？

少なくとも、目の前のお宝欲しさに裏切りするより、長い目で見たときの利益から手を組んでいようと思わせる位には。

それに加えて俺の情報も入る。一石二鳥だと思うけど。

俺の手伝いなんてそこら辺の人間を操れば大抵は済むんだからな。

で？どうよ？俺の頭の中は見えないと思うけど、やっぱ怖いから断る？」

『考えていることが分からない』

これは人の頭の中を見れる事が当たり前である彼女にとってかなり大きな不安要素だった。故にそう簡単には決断できず、黙り込んで考える。

対して、爪を噛んで思考する食蜂に時間を与えるために恭弥はゲームを始めた。

タイトルは『ファンタスティック・パニック』。

簡単に言えば巨大化した蜘蛛と人間の闘うゲームである。

もちろんプレイヤーが操作するのは蜘蛛だ。

そして五分ほど経った頃、食蜂が口を開いた。

「……………わかつ「ギャアアアア!!腹ぶち破って蜘蛛の赤ちゃん出てきやがった!!死んだし!」……………何やってんのよ…」

親蜘蛛が子蜘蛛に食われている背景に、血の文字で『HAPPY END』とデカデカと表示されているのだが、このゲーム作製者は一体何がしたかったのだろうか。

どちらかと言えばBAD ENDだろう。

閑話休題。

コントローラを投げ出し、ハイハイハイと食蜂に向き合う恭弥。

「で?了承してくれた?」

「ええ。いいわよ。但し、あまり私の事情には踏み込んで来ないでちょうだい」

「いいよ。つかあんま興味ない。

じゃ、俺の事を話そうか」

食蜂からの条件の提案を軽く了承して恭弥はゲームを放り投げた。さてと、とダラけた体勢から切り替えて恭弥は再び食蜂操祈と向かい合う。

「うーん、……………よし、『ジェネレーション』から話そうか」

\*\*\*

鵜沼恭弥は話を終えてコーヒーを口に運んだ。

彼の喉からゴクリと大きな音が出る。それほど室内は緊張感に支配され、気味が悪いほど静かだった

(……………難しいな…)

というのもあるが、彼が普通に能力を使用して音を大きくしていたのだ。

(ま、必要なさそうだし上手くなくてもいいか)

が、特に意味は無かった。

そんな恭弥に対峙するは、僅かに震えている食蜂操祈。

何か思いあたる事でもあるのか、彼女の目はどこにも焦点が合っていない。

「……………そんな……………ことが…」

そんな彼女の口から自然と出た言葉に恭弥は欠伸を噛み殺してダラリと気の抜けた言葉を返す。

「ま、そんな感じ〜。

別に学園都市だから珍しい事でもなんでもないね。もう面倒だからこの話終わりー。

この話終わりー」

「……………最後に一つ、いいかしらあ〜」

「この話終わりー」



「……一っただけなんだけども……」

「この話終わりー」

「ああもう！分かったわよ！！」

恭弥の投げやりなゴリ押しに頬を膨らませつつも折れる食蜂。

暫く思案して溜息を吐き、諦めたように同じく投げやりな口調で恭弥に尋ねた。

「それじゃあ……なんであそこまで被害を出したのか聞かせて貰おうかしらあ？」

貴方の力ならわざわざスーパーセルを起こさなくてもアイツを止められたでしょあ？」

当然の疑問。

現に恭弥はスーパーセルを呼び込む前にあの少年を圧倒していたのだ。故に、持ち前の情報収集力でそれを知っていた食蜂はそう尋ねる。

対して恭弥はポカンとしてから、あの大々的な破壊活動が大した事ではなかったとも言つようにカラリと答えた。

「んあ？……ああ、あの時か。」

なに、単純な事だ。

摩訶不思議な法則を組み込んだの演算ではスーパーセルが一番安定したんだよ。穩便に殺そうかと思っただけど無駄に頑丈で回復力もあつたから消し飛ばすしかなかったのね。

だから面倒なあれをわざわざ引き起こした。

学舎の園ぶつ壊しちゃったぜwww」

「……はあ……本当に勘弁してほしいわあ。」



## 25話 「少女救済」

学園都市最強の能力者、アクセラレータ一方通行は戸惑っていた。

「おら！死ね！」

「これでオラが最強だ!!」

「ミーがぶっ飛ばしてやるよ!!」

(おかしい……………なんで絡ンで来るクソ野郎共が爆発的に増えたんだ?)

「ぐああああ!!」

「ああああ!!…っ…だ、誰だよ…最弱になったとか言った奴はよお……………」

「アウチッ！」

現在、彼は数多のスキルアウト武装集団から襲われていた。もちろん何もせずには手を返り討ちにしたが。

何故こんな事になっているのかというと、事の発端は『レベル6ソフト絶対能力進化計画』が頓挫した日までさかのぼる。

その日、八月二十一日に、一方通行は一人の無能力者レベル0に敗北したのだ。

単価十八万円という儚い命のために立ち上がった無能力者に。

一万体以上のクローンを殺した最強の前に立ちはだかった最弱に。

それ故、一方通行は『無能力者《レベル0》でも倒せる第一位』のレットルを貼られ、最強を名乗りたがる武装集団スキルアウトに朝から晩まで襲撃され続けてきたのだ。

ここまでではいい。まだ理解のできる範囲である。

だがここ数日、おかしな事に襲われる回数が以前の三倍ほどに激増した。

徐々に増えていくのならまだ理解できるのだが、突然のそんな爆発的な増加が偶然起こる確率など高が知れている。

故に彼は戸惑っていた。

そんな彼がコンビニで買った缶コーヒーを飲みつつ歩いていると、どこかで聞いたような声が聞こえてきた。

声の方角からして恐らくこの道を通る直ぐ行けば音源に辿り着くだろう。

「……………したよー!」

(何叫んでんだアイツ? ……チツ……………迂回して行くかア……………)

即座にその人物を特定するが、今は会いたい気分ではなく、会ってもバカにされる未来しか見えないため、一方通行は迂回して寮へ戻ることに決めた。

だが、幸か不幸か、一方通行がちょうど選んだ道の先に彼はいた。

当然の如く耳に入ってくる恭弥の言葉。

そしてその言葉を正確に理解した瞬間、一方通行の頬が引き攣る。

そう、

元凶を、見つけたのだ。

「レベル0の皆やーん!!」

第一位の一方通行がレベル0に負けちゃいましたよー!!

あのレベル5の第一位が!!レベル0に負けちゃいましたよー!!  
殺るなら御殺り得の今がチャンス!!

さあ!殺ってけ泥棒!!」

そこではメガホン片手にピラをばら撒いている鵜沼恭弥カソノキヨシが八百屋  
よろしく大々的に宣伝していた。

何をしている第八位。

「あっ、ぶっせや」

と道行く人々に、おずおずピラを渡していくその姿はティッシュ配  
りの達人を連想させ、

「どうだアー!いっちょ闇討ちしてみないかア!」

と豪快な喧伝を繰り返すその姿は一流の商人を彷彿させる。

そんな彼の様子を唾然と見ていた一方通行だったが、ハッと我に返  
り殺気を撒き散らして恭弥に詰め寄った。

「何してんだオマエ」

「あ、やべ、バレた」

途端、ピューッと逃げ出す第八位。

行き交う武装集団スキルアウトを蹴り飛ばして逃げる逃げる逃げる。

だが、一方通行が指を啜えて黙ってそれを見ている訳がない。

足下のベクトルを操作し、爆発的な加速をもって彼は恭弥に追隨する。

「待ちやがれエ!!最近ハエがうつとオシイと思ってたんだよ!!  
全部オマエのせいじゃねエかアアア!!」

「ワタシ、ニホンゴ、サパーリヨ」

「ふざっけんなアアア!!」

「ちよっ!?ビル投げんな!!」

第八位の明日はどっちだ!?

\*\*\*

「はあ……………はあ……………ふう……………逃げ切れたか」

四時間後、鵜沼恭弥は息を切らしてベンチに腰掛けていた。

一方通行からの一方的な暴力(一方通行なだけに)を全て躲し、最後にコンビニのトイレの中に隠れることでなんとかやり過ごしたのだ。

やれやれと肩を竦めて飲料を購入し、夜の闇に包まれて始めた学園都市を眺めながら少しずつ飲んでいく。

すると、いくつもそびえ立つビルの一つの屋上に何やらロープがピン張ってある事に気づいた。

かなり興味をそられるのだが、なんだかんだ言って疲れていたため、彼には珍しく空になった缶を投げつけるだけにとどめた。



信じていた人が来てくれた事に歓喜していた少女。  
探し続けて漸く誘拐された同居人を見つけ出した少年。  
一人の女性を救うために魔道書に手を出した満身創痍の男。  
流れてここまで来てしまった猫。

その場にいた全員が言葉を失った。  
心に思うは一つ。

(…ナニアレ……………?)

\*\*\*\*\*

缶が上手く命中したことを確認すると、イヨッシャ！と恭弥は腰を上げた。

このままここにいっても何もする事はないため、拠点に戻るつもりなのだ。

だが、現実はその甘くない。

「なっ……………!？」

演算を開始。能力を全力で発動。  
気配を消し去って電柱の影に隠れる。

(チッ……………まさかここで遭遇する事になるとは……………)

そんな彼の目の前を走るは二足歩行するモヤシィー否、レベル5の第一位、一方通行であった。

あと数分で酒池肉林の己のマイホームに帰れるというタイミング



でまさか核兵器顔負けの危険物を目の前に落とされるとは、どこぞの校長先生でも予期できないだろう。

俺のプランに支障が…などと呟きつつも恭弥は隠れて一方通行を観察していると、何故か切羽詰まっているのが伺えた。

そのことを怪訝に思い、彼は能力を解除して一方通行の前に姿を表す。

「よっーそんな腹壊したみたいな顔してどうした？」

「!?!?……死ねエ!!」

「ぶっば!!」

殴られた。

\*\*\*\*\*

日が落ち、光源が街灯と月のみとなった学園都市の道を二人の少年が走る。

「なるほど……詰まる所、ラ食スべト放題終了数十分前オーダーとかいう妹達シスターズの上位個体がウイルスを植え付けられて世界がピンチ、と？」

「ニュアンスが気になるがそオ言つこつた」

一通りの説明を聞き、相変わらず気の抜けた口調で確認をとる恭弥に一方通行は呆れてぞんざいに答えた。

そんな一方通行を後ろから一瞥し、恭弥は思つ。

(……変わったな。)

無能力者に負けたことで何か得たのか……  
『ラスタストオーダーに注文しとく』とやらと絡んで何か感じたのか……  
ま、らしくないけどプラスの方向には転がっていったんだな)

まるで我が子が成長し、旅立つかのようにしみじみとした視線を送る。

「あぼっ!？」

直後、恭弥の目の前の地面が爆発し、銃弾以上の速度で石つぶてが飛んで来た。

そして一方通行が前を向いたまま口を開く。

「気持ち悪い眼差しで見てンじゃねェよ。吐き気が酷くて内臓吐いちまうだろオが」

返答はない。

石つぶては恭弥の顔面にぶち当たったのだから。

\*\*\*\*\*

第七学区の量産能力者計画研究所跡地に鵜沼恭弥と一方通行は到着した。

前を見れば打ち止めも一緒に乗せられているであろう天井亜雄の車が停車していた。

「あれか？」

「ああ。間違いなエ」

口角を上げてニヤリと獰猛な笑みを浮かべる一方通行。

ピロリン

そんな彼の顔を写める恭弥。

ゴシヤッ

「アアアアアア!!!」

即座に携帯は破壊された。

プラスチックと金属の残骸を手に恭弥が嘆いていると、前方の車からおっさんの悲鳴が聞こえてきた。

「ヒッ……クソオオオオ!!」

そう、写メった際の音により、天井が彼等に気づき、アクセルを踏み込んで二人を轢殺れきさつしにかかったのだ。

交通規制により学園都市からの脱出は不可。当初の計画は崩壊し、失敗が許されない現状。

天井亜雄はこの時かなり追い詰められていたのだ。

窮鼠猫を噛むとはこの事だろうか。

天井の最後の悪足掻き。普通の人間ならこれで排除できるはずなのだ。

「アア」

が、相手が悪かった。

「アクセラレータ 相対するは学園都市230万人の頂点、ベクトルを操る超能力者、レベ 一方通行。」

普通という括りに入れていい人間ではない。正真正銘の化物である。

車が彼に触れた瞬間、何かに押し潰されたかのように、ラストオーダー 打ち止めの座る助手席を除いた部分は全て潰れて地面にのめり込んだ。

窮鼠は囓み付く前に、容易く叩き落とされたのだ。

ドアを叩きつける事で天井を気絶させ、助手席に回る一方通行。  
ラストオーダー 電話をして打ち止めのチェックを始めた。

対して、天井にニヤニヤと嗤いゲスい表情で近づく恭弥。

あまりの悪寒に天井は瞬時に意識を取り戻し、ヒツと悲鳴を上げて飛び上がった。

そんな彼をガムテープで縛り上げて恭弥は話しかける。

「おっと動くなよ？」

貴様が動いた瞬間……………」

恭弥は中途半端なところで言葉を切り、ニタア、と気味の悪い笑みを満面に浮かべた。

「……………なんだよ……………？」

……………何すんだよ……………？……………途中で言うの止めないでくれよ!! 最後まで  
で言えよ!!」

「…………………………」

「なんか言ってくれえ!!」

「うっせエぞ中年!!」

黙りこくった恭弥に恐怖を感じた天井はそれを紛らわすために叫ぶが、それが一方通行の癪に障ったようだ。

ドバンッ

と音が響き、直後には全裸で電柱から吊り下がる中年の姿しか残らなかった。

さりげに鬼畜な第一位。

目を細めてそれを見つつ、恭弥はポツリと呟く。

「うわー…ないわー。」

オモチャ無くなったし俺暇やん。

完全暇人やん。うわー。マジ暇人やん」

野次馬魂丸出しでここまで来た第八位である。

何も起きなければ暇人となることは必須であった。

一方通行を見れば、幼女の顔をガン見しつつ額に手を当てており、趣味の時間を満喫しているのが伺える。

恭弥は、他人の趣味を邪魔するような無粋な真似をするつもりはサラサラないので、暖かい視線を送りつつ、拳銃を拾って車内で弄り始めた。

そして、それは起きた。

ドンッ!!

腹に響く轟音。

聞く者の心臓を鷲掴みにし、恐怖を与えるその音。

「うわっ！……弾出ちゃった……」

「……要は発砲音である。

何をしている第八位。

弾出ちゃった……じゃねえーよ。

事はそれだけにとどまらない。

チュインツ！チュインツ！

と車内で跳弾し、それは一方通行の眉間に吸い込まれ……

「痛っ！！ぶざけんなテメエ！

ぶっ殺されてエのか！！後コンマー秒早かったら俺の脳が抉れてた  
じゃねエか！！」

「……薄皮一枚食い込んだところで反射された。

弾が直撃する直前に、打ち止めの余分な脳内データラストオーダーを削除し終えた  
ため、弾が脳に到達する前に反射が機能したのだ。

鉄壁の防御を誇る己の能力に感謝しつつ、恭弥を睨む一方通行。

ライオンすら睨み殺しそうなその視線に恭弥は、

「サッスエンシタ」

ただ謝ることしか出来なかった。

「幼女鑑賞の時間を邪魔してしまい」

ブチイッ

刹那、恭弥は後部座席ごと研究所の壁にのめり込んだ。

## 26話「感動の再会」

九月一日。

それは夏休みが明け、新学期が始まる日。

ある者にとっては、心機一転、新しい生活の始まる日であり、またある者にとっては、宿題？ ナニソレ美味しいの？ という地獄の日である。

そんな良くも悪くも切り替えの日に、鵜沼恭弥は爆睡していた。

彼にとっては最早、学校？ ナニソレ美味しいの？ という状態であるため、新学期などなんのその。

普通に墮落という甘い蜜を享受していた。

だが、勘違いしてもらっては困る。

何も彼は引きこもりではないのだ。故にジャスト正午、彼は起床した。

そして周りを見渡して呟く。

「……………皆寝てやがんな。こいつらニートか？」

どの口が言う。

とは言っても、ついつい彼がそう言ってしまうのも頷ける。

今朝の七時まで五人でゲームをしていたのでしょうがない事ではあるが、彼の視線の先には実際に麦野、絹旗、滝壺、フレンドの四人はまだ爆睡しており、起きそうにないのだ。

そんな彼女達にやれやれと溜息をついて全員の寝顔を写める恭弥。

もちろん天井から奪った携帯である。



昨日のうちに携帯会社にハッキングして情報を弄くつたため、既に契約者は彼になっていた。

（使いたい……）

『寝顔』馳走様です（ ） 『つと』

そんな経緯で手に入れた携帯を、使いにくさから来る握り潰したい衝動を抑えつつ操作し、アイテム全員の携帯に写真を送り付けた。それから顎に手をやってどうするか思索する。

「うーん……一人で食べに行きますかぁ」

一人で食う飯ほどつまらない物はないと恭弥は考えているため、誰かが起きていれば一緒に行くつもりだったのだが、無理矢理叩き起こした結果、食べてる途中で寝られてはたまったものではない。

結局、昼飯は仕方なしに一人で行くことにした。

幸いな事に、昨日アクセラレータ一方通行と、天井とか言う研究者から金を掠め取ったため、懐は暖かい恭弥。

たまには高級な常盤台の学食でも食ってみるか、と思いつつ彼は外に出た。

\*\*\*\*\*

コイントスでコンビニの握り飯か常盤台の学食か決めた結果、常盤台の学食になったため、恭弥は学食レストランがある地下街に来ていた。

何故そんなに両極端なのはこの際突っ込まないでおう。

財布を片手にフラフラ歩いていると、どっかで聞いたことのある、

悲壮感漂う声が聞こえてきた。

「ええ！　なんでだめなの!？」

「俺たち無能力者レベルにそんな金があるか！　そもそも食費の半分がお前の食事代なんだぞ！　少しは遠慮と言つものを覚える！」

声のする方に目を向けて見れば、魔術がどうたらとかいう事件に巻き込まれた時に会った二人がそこにはいた。

まあ暇だったし絡もう、程度のノリで恭弥は彼等に声を掛けた。

「よっ、久しぶり。そっちの女の子は初めまして。

お前らこんなところで何口論してんの？」

「あっ!! 恭弥！　久しぶりなんだよ！」

そんな彼にいち早く安全ピンだらけでアイアンメイデンのような修道服を着た少女が反応した。

彼女を見て恭弥は思考を巡らせる。

(えーっと……パラドックスだっけ？　相変わらずファッションセンスはゴミだな)

やはり名前は覚えていなかった。

しかも彼女への評価が酷い。

どうやって名前を聞き出そうか恭弥が考えていると、ワンテンポ遅れて上条がぎこちなく反応した。

「よ、よっ……久しぶりだなあ！」

「このぎこちなさから、恭弥はふと思い出した。蛙顔の医者から言われたことを。」

-----

『あれは記憶喪失というより記憶破壊だね。思い出を忘れたのではなく物理的に破壊されてるね。』

脳細胞が死んでいるからね、元には戻らないよ』

『じゃあ無くなった記憶の代わりに学習装置テストメントで痴漢もののAVでも植え付けとっじやないか』

『君が何を言っているのか分からないね』

-----

(あー…そついやコイツ全部記憶無いんだっ たなあ…)

アレイスター統括理事長のお気に入りでもあるため、上条の名前は運良く覚えていた恭弥。

彼がどう振る舞うつもりなのかは医者から聞いていたため、フォーしてあげようと思ひ、恭弥は口を開いた。

「おう。上条ちゃんにシスターちゃん。ところで何を言い争ってんだ？」

なんなら第八位の恭弥くんが相談に乗るぜ」

さらりと自然な形で自己の情報を開示し、苗字を名乗らない事で呼び方を制限させる。

流石、第八位。やる時はやる男である。

二人の隣に佇む眼鏡巨乳の少女に絡めなかったが、優先順位という物を考慮して、恭弥は上条に気を利かせたのだ。

すると、インデックスは不機嫌そうに文句を垂れた。

「私は派手で豪華なものを食べてみたい、って言ったのに当麻がダメだ、って言うんだよ!! 甲斐性がないんだよ!」

うわあこいつダメ人間だ、と自分の事は棚に上げて恭弥はインデックスになんとも言えない顔を向ける。

(こんな奴が宗教やるんだから世間で悪徳商法として見られるのも頷けるな)

イギリス清教をそこらの悪質な宗教団体と同列視する恭弥。

こっつして偏見というものが生まれるのである。

閑話休題。

「しょうがないだろ! 無能力者<sup>レベル</sup>の俺には雀の涙ほどしか金が降りないんだからよ! しかもお前の食費でガンガン減っていつてんだぞ! 少しは自重しろよ!」

対して、うわあ可哀想、と憐れみの顔を上条には向けた。

恭弥はレベル5であるため、莫大な奨学金が口座に振り込まれているのだ。

いや、訂正しよう。

振り込まれているはずなのだ。

何故そこが曖昧なのか。理由は単純である。

キヤッシュカードを受け取ったその日の内に失くし、再発行するくらいならスリで稼ごうと、訳の分からない決意で今日まで生き抜いてきたため、自分の口座を確認できていないためだ。

結局、真相は闇の中である。

とまあそれはさて置き、彼には莫大な奨学金が振り込まれているのだから、それは関係ない。

では何故上条に憐れみの眼差しを向けるのか。

(何故そこで他人から奪うという発想が湧かない!?)

と思っていたためだ。

やはりゲスかった。

何故そんな発想が湧くのか甚だ疑問である。

まあそれはいいとして、と恭弥は考える。

明らかにインデックスが引くべき場面だが、彼女がそんな事はしないだろう事は付き合いの浅い恭弥でも分かる。

故に、二人の口論が終わりそうに無いため、しょうがなく恭弥はここでもう一人の少女、風斬氷華に話を振った。

「ハイハイ、二人ともストップ。聞いている限りじゃお前等同居してんだろ？ならいつでも二人で食えるよな？」

「っわけでココは彼女の選択に委ねてみようや。ど？」

一気にまくし立て、風斬に尋ねると、彼女はビクツとした後、おずおずとごく普通の給食のメニューを指し示した。

「私は……」つちが……いいです……」

ふと、風斬も同居しているのでは？と思った恭弥だが、二人の反応からそうではないらしい事を悟り、ホッと胸を撫で下ろした。

「ハイ決まりー」

そしてこれ以上反論が出ないように風斬の選択をゴリ押しで決定事項へ持つて行く。

「ほら見なさいインデックス、これが優等生の答えというものだ」

「えー、ひょうかの好みはちょっと地味かも。私はもっと派手派手のものが食べてみたい」

しかし、どうやら杞憂だったようで上条は普通に喜んでいるため、ナイス判断、と親指を立てて風斬にサインを送った。

「食べ物を見た目じゃなくて味で選ぶとか、インデックス。あと、どさくさに紛れて常盤台中学のセットをお勧めしてんじゃねえ！風斬も地味とか言われて本気でへこんだり考え直そうとしなくても良いからー」

が、インデックスの言葉にへこんでそれどころではなかった風斬だった。

\*\*\*\*\*

「いやー……素朴な給食ってのも悪くない」

結局常盤台の学食ではなく、三人と同じ物を食べた恭弥。味自体に大したこだわりは無かったため、便乗したのだ。

「不味くもないけど美味しくもなかった。うーん、どついう事なのか。この胸の内に残る、微妙に欲求不満気味なモヤモヤは……」

そんなインデックスの評価に苦笑しつつ、恭弥はこの後の行動を考える。

「毎日食う為に作られたメニューだからな。美味しい不味いより飽きられないように工夫してんだろっさ」

成る程ね、手抜き材料を使ってるからだと思ってたわ、と上条の意見に感心してから、一つの方針を打ち出した。

「お前等」の後どつすんの？」

まだ帰るには早い時刻であり、恐らく三人とも遊んで行くのだろうと推測した上で尋ねたのだが、どつやら当たっていたようで、恭弥はこれにも便乗することにした。

## 27話「正論」

「あー！楽しかった!!私としては満足かも！」

「そうだね！」

「恭弥、ホントに有難う！」

「ハハハ、良いつて。気にすんな」

最先端の技術を盛り込んだ無駄にハイスペックなゲームの数々に魅了されたインデックスは、風斬を引きずって端から端まで全てのゲームに手をつけ始めた。

上条は号泣である。

そんな彼を流石に不憫に思い、恭弥が全額払ってあげる事にしたのだ。

上条は号泣である。

とは言っても、大分洩られたので、昼食を奢ってもらった事にするのと、レベル5で金はあるからという事で上条に了承させたのだ。

安っぽい昼食四人分と莫大なゲーム代。比べるまでもなくゲーム代の方が高いのだが、盗んだ金から出す恭弥にとっては痛くも痒くもなかった。

男前なのかゲス野郎なのかイマイチ良くわからない第八位である。

ちなみに、上条との関係は隙をみて全て伝えた恭弥。



それもあつて上条は彼に非常に感謝していた。  
やはり男前なのか。

閑話休題。

遊び終え、移動しつつこの後どうするか話し合っていると、突然インデックスと風斬が立ち止まり、辺りをキョロキョロと見回した。

「?.....どうした?二人とも」

「今どこからか声が聞こえたよつな.....」

そんな風斬の返答に首を傾げる上条。

すると、恭弥が、多分あれじゃね?と前置きをして告げた。

「誰かの念話能力じゃない?悪いけど俺は訳あつて精神系能力が効かないんだ。何言ってるか詳しくー」

聞き取れないか?と恭弥が続けようとした時だった。

「ちよつと貴方達!人がこんなに注意しているのにこんなところで何をしているの!」

風紀委員の腕章を付けた少女が声を掛けてきたのだ。  
ジャッジメント

当然の如く、何も状況が分からなかったため、パチクリと瞬きをし、上条と恭弥は首を傾げて一言。

「で、何か?」

そんな二人の返答にガクツと崩れる彼女だが、聞こえてるんでしょ?と一言置いて、顔を真っ赤にして念話を送る。  
テレパシー

そんな力んで能力を使つくらいなら目の前にいるのだから口頭で

伝えるよと恭弥は思ったが、なんともバカらしい光景だったため、笑いを堪えて彼女の次の言葉を待った。

そして、伝えきったつもりなのか、彼女は肩で息をしつつ二人に尋ねる。

「どう？分かったでしょ？」

「いや、全然」

「何やってんだお前（笑）」

呼吸を整え、期待に満ちた目で二人に問うも、そんな返答に再びガクツと崩れる彼女。

おかしいわね、と呟いてから気を取り直し、口頭で伝えることにした。

「現在、この地下街にテロリストが紛れこんでいるわ」

「テロリスト？」

「ペロリスト？あの他人の顔をペロペロ舐めるやつ？」

「テロリスト！…間も無く隔壁を下ろしてここを封鎖します。速やかに退避してください。いいですね！」

他の仕事もあるのか、それだけ伝えると急いで来た道を戻っていった彼女を見送って、恭弥達は地下街を出るために近くの出入り口まで歩き始めた。

だが、暫く歩くと、

【フッフフ……見いつけた…】

そんな声が聞こえた。

「あん？」

「ッッ!! キツモ! うわっ! キツモ!」

目を向けてみれば、なんと壁から目玉が生えているではないか。あまりに非科学的な現象。

ドン引きしつつも間違はなくこれは魔術だと恭弥が感付いたのと同時にインデックスはそれに駆け寄り、解析し始めた。

「土より出でる人の虚像。神殿の守護たるゴーレムを無理矢理、英国の守護天使に置き換えてる」

訳わからん。

この一言に尽きるな、と恭弥は感想を抱くが彼女が反応したことで一ツハッキリした。

「ってことは……テロリストは魔術師!？」

「スロッシ……これは魔術……!!」

誰も突っ込んでくれないようなボケをかましつつ恭弥はモーシヨンを開始する。

【さあ、パーティを始めましょう】

目玉から不気味な声が響く。

だが、それ以上に目玉が気持ち悪い、というのが恭弥の感想である。マジで生理的に無理、と体が拒否反応を起こし勝手に動く。

【土の被ったら】ドゴンッッッ！

「よしじゃーッッッー！」

突如目の前に広がった瓦礫の山に、啞然とする上条、インデックス、  
風斬。

全力の蹴りで目玉を粉碎した恭弥だけが清々しい爽やかな笑顔を  
湛えていた。

いち早く硬直の解けた上条が恭弥に突っ込む。

「ちよちよちよ!? 何やってるのかな!? 恭弥さん？」

「うっせえな。だってあの目玉キモかったじゃん」

「いや、まあそうですけどー！」

話ぐらい最後まで聞いてやるっぜー！」

「ハハハ、なら本人がちゃんと俺の前に出てくるこつた。礼儀も弁え  
ないようなカルト団体の一員に傾ける耳なんぞねえよ」

「確かに正論だけど!!」

## 28話「現実を見る！」

恭弥が目玉を粉碎した直後、

ドオオオオオオオオオオ……

と重々しい音が響き、地面が揺れる。それと同時に地下街の照明が一斉に消えて隔壁が降り、自動的に地上と繋がる出口が潰された。それも、生徒達の避難が完全に済んでいない状況で、だ。

「えっ!?何!?」「ちよつと押さないでよ!」「嘘っ!?」「待って!!」「おい!出してくれ!」

当然の如く地下に残った彼等はパニックに陥った。

隔壁を強く叩く音と怒号、そして悲鳴が上条達がいる場所にまで大きく聞こえてくるほどであり、非常にまずい状況になった事を上条はすぐに把握する。

パニック状態にある集団とは、精神的に不安定な状況にある人間の集団であり、非常に危険なものなのだ。

その状態が長く続く、または些細な出来事が起こる、といった事でその集団にある人間は生存本能が剥き出しとなる。

それが引き起こすのは、アーアー最も起こり易い物として暴力が挙げられるがアーアー更なる混沌を呼び込む災厄であり、結果としてパニックに拍車がかかるといふ負のスパイラルが生まれてしまう。そして更なる災厄の発生。いわば、核反応が連鎖して起こる事で多大な害をもたらす核爆弾の様なものである。

故に上条はすぐに方針を打ち出す。

「インデックス、風斬と何処かに隠れててくれ！」

魔術師、しかも殺しの専門家が攻めて来たというのなら、並の能力者や警備員が敵うはずがない。それに今回狙われているのは自分達。ならば幻想殺しを持つ自分が前線に出るべきだ、と上条は決断を下した。

だが、明らかに戦闘力が十にも満たないであろう少女二人は連れて行けないし、パニック集団に合流させてもまずいだけである。故に彼は二人に隠れている、と指示を出した。

「オツケーー！」

「いや、待てよ。お前は残るつぜ」

勿論、帰ろうとした恭弥は右手で引き止めたが。

だが、それを良しとしない人物が一人。

「当麻と恭弥こそ、ひょうかと隠れてて。敵が魔術師なら私の仕事なんだよ！」

そう、十万三千冊の魔道書を所持する少女、インデックスである。

魔術の使用法が書かれたものであり、一般人が目を通せば廃人確定という書物の十万三千冊全てを、知識として持つ彼女はいわば魔術のエキスパート。

対して、上条当麻は特異な右手を持つだけの“平凡な学生”であるのだ。

超能力者を連れて行くとはいえ、魔術に関してドの付くような素人である上条が戦地へ飛び込んで行くのを、彼女が了承するはずが無かった。

そして、実際にインデックスの言い分はもっともだと恭弥は思う。能力を使う際に様々な情報を必要とする彼であるから人一倍強く認識するのであるが、情報というものは莫大な武器であると恭弥は考えていた。故に、敵の事を全く知らない状況で突っ走ろうとしている今の上条の姿は蛮勇以外の何物にも見えなかったのだ。

「何言ってるんだ！お前の細腕じゃ喧嘩なんて出来ないだろ！」

だが、恭弥は上条の考えも理解できていた。

今、戦地へ赴かん<sup>おもむ</sup>としているのは、記憶を破壊されてまで、そして、その事を隠し通してまで守り抜いて来た少女である。

それに普段の戦闘力はゴミだと神裂から聞いていた恭弥。

上条の立場であつたなら、誰でも彼と同じ行動をとつただろう事は容易に想像できた。

実際、上条同様、彼女の姿もただのマセガキにしか見えなかったのである。

まあ詰まる所どっちもどっち、といった形であり、自分の意見を押し通さなければ気が済まない子供の言い合いとしか彼の目には映らなかつたのである。

そんな冷めた彼とは反対に、頑固な二人はどんどんとヒートアップしていく。

このままでは延々と口論が繰り広げられそうだな、と思った恭弥はやれやれと苦笑し、一つ提案した。

「あの子………もう帰んね？」

それはこの科学の街である学園都市で、二桁にも満たない、魔術に関わった経験のある者の内の一人の言葉としては最低の一言だった。やはりどんな時もブレない。

「(。 。 )……………は？」

硬直、からの声帯を震わせるだけの問いを放つ上条とインデックス。そんな二人に恭弥は鼻で嗤って答える。

彼にとつては、先ほどまで聞いていた二人の幼稚な口論など一笑に付すものだ。故に、彼はここで、拍手喝采を浴びるような高尚な一言というものを二人に教えてやろうと思っていた。

その一言というのは、真正正銘の天才<sup>レベル5</sup>の一言。自分の脳味噌が奥底に保有する、莫大な存在感を持つであろう言葉。

思考を完全に切り捨て、レベル5の脳味噌が司る思考の奥底にあるものを原形を保ったまま浮き彫りにしようとする。

つまり、ノープランであった。

第八位、実はバカなのか？

だが、神は彼を見捨てなかった。

ビビッと彼の脳裏を思考の電気が走る。

そう、浮かんだのだ。

奇跡的に。

言葉が。

「だってお前等さー、良く考えてみるよ？魔法だぜ、魔法」



そこまで言って一度言葉を切る恭弥。彼が何が言いたいのかわからない二人は首を傾げる。

すると、カツ！と目を見開いて恭弥は怒鳴った。

「……………そんなのあるわけないだろうがッッ!!ガキがお前等!?現実を見るッッ!!」

何言ってるんこの人？

これが上条の心境である。

「いや、お前こそ現実を見るよ!?魔術を目の当たりにしただろ!」

「馬鹿野郎!あんなん手品だ!現実逃避してんじゃねえ!!」

いや、マジ何言ってるんこの人？

これがインデックスの心境である。

「現実逃避してるのは恭弥かも!!」

「胡散臭い宗教にどっぷり浸かった貴様の言うことなど聞く耳持たんわ!!」

「イギリス清教はイギリスの国教なんだよ!」

なんだかんだでスイッチが入ってしまった恭弥の参戦により、上条、インデックス、恭弥の間にある空気はどんどんとヒートアップしていく。

先ほどまで冷めていた彼は何処へやら。

一方、それを一歩離れた所から見ていた少女、風斬氷華。

さつきからオカルトの話ばっかしてるけど……………マジ何言ってるんの

この人達？

これが彼女の心境であった。

何の話をしているのかサツパリだが、尋ねたくとも場の空気と引っ込み思案な性格が災いして、なかなか尋ねられない。

なのでそれは後回しにし、とにかくヒートアップした場を鎮めようと、彼女は思い切って口を開いた。

「あ、あの！良くわからないですけど……何か私に手伝える事は……」

「無い!!」

バツサリと切り捨てられた。

「二人を現実に引き戻せ！」

「お前が戻って来いよ!?!」

上条とインデックスの即答に若干気圧けおされビクツとするも、役に立  
てない事から頂垂れる彼女。

恭弥は論外。

つまりは、三人の間に漂う熱は一向に収まらなかった。

直後、

カツカツカツカツカツカツカツ……………

誰かが小走りに接近してくる足音が目の前の暗がりの奥から聞こえて来た。

そこでハツとして気を引き締める上条、インデックス。あらゆるものを飲み込まんとする闇が前方には広がり、足音の不気味さをより一層引き立てて二人の警戒心を底上げする。

ほぼ全ての生徒は隔壁付近に集まった筈なのだ。ならば今、此方へ向かって来ている人物は何者なのか。

魔術師。

この言葉が二人の脳内に反響する。

そして二人が次の行動に出ようとしたその時、一人の少年が彼等の前に出た。

――とびきりの笑顔で。

――力強く親指を立てて。

「安心しろ。」

般若心経なら全部頭に入ってるぜ!!」

これが先ほどまで『現実を見る』と言っていた男の言葉である。レベル5の脳味噌ならばもっと他の使い道があっただろうに。

そんな彼の言葉で、

( やっぱ「インッ当てになんねえ」 )

奇しくも上条とインデックスの心が一つになった瞬間であった。

「幽霊なわけあるか！だから現実を直視しろって！」

「おへふっ」

邪魔だと言わんばかりに恭弥を脇に弾き飛ばしつつ、キツと敵が来るであろう方向を睨み付け、表情を引き締めて二人の少女の前に進み出る上条。

「隠れる！インデックス！」

「当麻！逃げて！」

だが、彼と同様にインデックスも、上条と風斬を庇う様に前に出た。

結果、

「うわっ!?!」

ぶつかってバランスを崩し、二人してその場に倒れ込んでしまった。

そしてその際に、インデックスの抱えていた三毛猫、スフィンクスが鳴き声を上げる。

先ほどより大分静かになった空間で、その声は良く響き、地下を駆けていた二人の少女、御坂美琴と白井黒子の耳に入ったのだった。

「あら？猫の鳴き声が聞こえませんでしたか？」

「え、ええ……」

(……………!!……)の気配はみこっちゃん!!逃げよ!

場違いな猫の鳴き声に興味を惹かれて上条達の場所へ駆ける彼女達。

そしてその気配を察知した恭弥は、面倒事など御免だと言わんばかり

りに一目散に逃げ出した。

流石、ゲスい。

29話「……………風……………斬……………?」

現在、鵜沼恭弥はゴーレムの前に佇んでいた。

「ちょっと!? 恭弥君 その少年! 避難しなさい!」

「おりゃー!」

「クッ! 中々やるじゃないか!」

「話聞いている?」

もちろん警備員アンチスキルの警告などガン無視である。

まあ彼を無視して銃を乱射し続ける彼等も大概ではあるのだが。とは言っても、学舎の園全壊事件の一件で恭弥の事が警備員アンチスキルに知れ渡っているからこそその対応であるとも言える。

間違いなく肉片になるであろう速度で地面に激突したにも関わらず、頭から血を流す程度で済んだレベルバケモノ5。

壁を破壊して脱獄し、コンビニでポテチを買って戻ってくるといいう一連の行動を数回繰り返し返した自由人災害。

取り調べ開始から三日後に何やらブツブツ呟き出して何の前触れもなしに、時に地団駄を踏み、時に爆笑し、時に泣いていた、アイツちやつてる生徒。

彼を有名にする要素は多分にあったのだ。フラスコに浮いている人物が頭を抱えたのは言うまでもない。

閑話休題。

ともかくあの後、恭弥は御坂美琴とは面倒な事になりそうだなと思っただため、気配を消してここまで来たところ、ゴーレムと遭遇した次第である。

後ろから飛んでくる容赦無い銃弾をエネルギー源に、ボカスカとゴーレムを殴り、熱波を放ち、岩を投げつけて粉碎していく恭弥だが、如何せんゴーレムの修復が速く、焼け石に水となっていた。

修復に使われるエネルギーを変換すれば事は済むのだが、やはりそこは魔術、どう足掻いても不可能だったのだ。

さてどうするか、とここで恭弥は一考する。

ピタツと動きを止め、その場にただ立つ。

そんな彼を訝しく思い、学園都市に潜入した魔術師、シェリー・クロムウエルも出方を伺う為に動きを止めた。

そんな静止の連鎖はまだ続く。

明らかに様子の変わった二人に警備員も動きを止めたのだ。アンチスキル

先ほどとは打って変わって静寂が場を支配する。

こうなってしまうのは逆に動きにくくなってしまった。動けば勿論音が出る。

しかも自分達の持つ戦力の規模を考えればどれほど大きな音が出るかは想像に難くない。この静まり返った暗闇の中で音がどれほど大きな物であるか、理解できない者などここにはいなかった。

そう、つまり自分達の動きを逐一相手は把握でき、下手をすれば隙を突かれてしまう、という状況になったのである。

絵に描いたような膠着状態。

その中、恭弥は思考する。

(……………何故だ?)

……………何故こんな事になっている……………!?)

騒ぎのど真ん中にいる人物が原因を把握できていないとは、これいかに。

うんうん唸って過去を思い出してみるが、特に戦闘参加の原因となりそうな出来事は思い付かない。

まあ、最初にシェリーのゴーレムに恭弥がワンパンしたのが参戦のきっかけとなったのだが、無意識のワンパンだったので、彼はそれが原因だとは思わない。

と、ここでビビッと彼の脳裏に電撃が走る。

ふと、気付いたのだ。

そう、……

「よし、一時休戦な。喉渴いたからなんか飲んでくるわ」

……喉が渴いた、と。

次の瞬間、恭弥は消えた。

彼は最低な一言を残して、最低な状況を放置し、最低な形でその場を去った。



「（。。）」

啞然として固まってしまった彼らを誰が責めることができようか。

\*\*\*\*\*

位置エネルギーを変換し、地上に飛び出た恭弥。

近くの自販機でゴボウコーラを購入し、十口飲んで気づいた。

(!!).....魔術師放置ってマズイヤン!!)

盛大にコーラを噴き出し、ゲホッゲッホとむせる彼は一体何がしたいのだろうか。

「ここが学園都市でなかったら、

『ママ、あの人がやってるの〜?』

『シッ！目を合わせちゃいけませんー!』

的な三文芝居が行われているだろう。

それはともかく、放置は流石にマズイかと思い、恭弥は取り敢えずゴボウコーラを飲み干してヤシの実サイダーを買う。

それを飲んでのんびりしてから再び元の場所に戻った。

「で、何してんの?」

「!?!? 恭弥か!」

すると、大きな穴のそばで膝をついて中を伺う上条当麻を見つけた

ため、現状を尋ねる。

「ま、そうだけど……どういう状況？」

「えーっとだな……何から話せばいいか……  
風斬がな……人間じゃなかったんだ……」

随分と悩んどいて何そのチョイス？もっとマシな話題から切り出せなかったの？と頭の中で突っ込みつつも、恭弥は即答する。

「風斬って……誰？」

「(。(。(」

硬直。

「……………？」

「(。(。(」

不動。

「……………」

「(。(。(」

凍結。

「だから誰だよ!!」

「!!」

ピシリと固まって動かない上条に痺れを切らした恭弥はビンタを入れた。

神様の奇跡すら喰い殺す幻想殺しイマジンプレイカーを持つ上条であるが、それは彼の右手に限られる。そう、つまり類は異能の力をそのまま受けてしまふ無防備な部位なのだ。故に上条は5mほどぶっ飛んでから頬を抑えて訴えた。

「酷くね!？」

つか一緒に飯食った上にゲーセンで遊んどいて、なんで風斬を知らねえんだよ!？」

つい先ほどまで一緒に遊んでいたのだ。知らない方がおかしいだろう。そんなもつともな上条の言い分。

これには流石の八位も言い返せまい――

「フフフ。」

――と、思った時点で負けである。

ポカンと口を開ける恭弥。

そして次の瞬間、合点がいったと言わんばかりに頷く。

「ああ!!あの女の子の名前か!

って、そんな知らんわボケエ!!パラドックスちゃんが氷華って呼んでたのぐらいしか聞いて無かったんだよオオオオ!!」

これが、八位。

「パラドックスじゃなくてインデックスな!!あとお前の目の前で風斬って呼んだ気がすんだけど!？」

「あの猫の名前かと思ってたわ」

「スフィングスのことかよ!？」

「え……ゴミみたいなセンスだな……」

「俺が名付けたんじゃないけどね！」

いまや、件のインデックスがピンチであることや、魔術師を追わなければならぬことなど上条の頭からは抜け落ちていた。

### 30話「この街も捨てたもんじゃない」

An Involuntary Movement 拡散力場、---通称、AIM拡散力場。

能力者が無自覚に発してしまう微弱な力のフィールド全般を指す言葉であり、化物クラスである超能力者から一般人レベルである無能力者まで、学園都市に住まう生徒ならば誰もが発しているものである。

エレクトロマスタ電撃使いの微弱電磁波などがいい例であり、テレキネシス念動力は圧力としてそれが現れたり、バイロキネシス発火能力は熱量として現れたりするのだ。現れる現象が能力によって異なり、また、能力者の現実への無意識の干渉であるパーソナルリアリティとみなされるため、これを調査すれば『自分だけの現実』が解析に繋がるとして研究が進められている分野である。

そんな事情があるAIM拡散力場であるが、それは非常に微弱であり、精密機器を使用しなければ人間には観測できないレベルの力場。学生達や教師達の日常生活には何の影響もなく、何の支障もきたさない。

だが、いくら微弱といえど、学園都市にいる学生の人数は230万。条件さえ整えば何か現象が起こるのである事は明らかである。果たして、それほどの人数分の力場が相互干渉を起こし、一人の“人間”を形成した。

それが風斬氷華という存在であった。

\*\*\*

恭弥の誰ソレ発言に思考が吹き飛んだ上条だったが、ともかく身元特定がすぐに済んだため状況を一から丁寧に説明した。そんな彼に、恭弥は一言返す。

「……………うん、知ってた」

「……………え？」

説明の必要性を完全に否定した一言。あまりにも酷である。

そんな簡潔な返答に上条はポカンとしてしまいが、恭弥の返答は至極当たり前のものであったと言えよう。

彼はエネルギーを司る超能力者<sup>レベル5</sup>。能力の都合上、エネルギーに関しては誰よりも敏感である。

故に風斬を一目見たその時から恭弥には、彼女から感じ取れるエネルギーが彼女自身から発せられている物でないという事が分かっていたのだ。最初は疑問に思った彼だったが、風斬氷華がどのような存在か把握するのに大して時間はかからなかった。

その旨をザックリと上条に伝えると、

「そうか……………なら詳しい説明はいらないんだな！」

風斬はここから降りてインデックスを守りに行ったんだ！このままじゃ二人とも危ない！」

急いで行くぞ、と上条は喝を入れた。

そんな彼に恭弥はふと疑問に思ったことを尋ねる。

「お前は……………俺が風斬<sup>あんな</sup>の正体を黙っていた事を気にしてないのか？」

決して悪気があった訳ではない。ただ単に、まあ魔術があるくらいだしこんな事もあるよね、と思って特に気にしていなかっただけだった。故に、自分しか知りえないだろうという事もあり、彼は彼女について何も言わなかったのだ。

だが、結果的に上条は知ってしまった。数刻前まで楽しく一緒に遊んでいた友達が人間ではなかった、と。その時の動揺は想像に難くない。

普通ならば、声が出なかっただろう。一步も動けなかっただろう。呼吸も止まっただろう。それは上条も例外ではないはず。

しかし、彼は既に気持ちを持ち直し、整理し終えている。だからこそ恭弥は尋ねた。

そんな彼の問いに返ってきた答えは至極当然のものであった。

「憤りが全く無いか、と問われれば嘘になる」

しかし上条はここで終わらない。

「ただどな、と彼は続ける。」

「風斬は人間じゃなくても俺達の友達であることに変わりはないんだ！なら正体なんて関係ないだろ！困ってる友達を助けるのは当然の事じゃねえか！」

ほう…と感嘆の吐息を洩らし、恭弥は目を細める。

何を思っているのか、それは彼にしか分からない。

「ところでさ、風斬って学園都市の生徒達のAIM拡散力場、つまりは無意識に放つ能力が生み出した人物像じゃん？」

「……そうだけど、それがどうかしたか？」

「……ってことはさ、彼女はいわば、生徒達の深層心理の具現化と言えないか？」

「……………!!そこから先は言っちゃダメだ!!」

「ハハハ、妄想の塊が引っ込み思案で爆乳の眼鏡っ娘とか、この街もまだまだ捨てた物じゃないな」

「だから言っなって！台無しだよ!!」

\*\*\*

あの後上条を穴の中に放り入れ、恭弥は地上に出てインデックスを探し始めた。

『お前は地下から行け。俺は地上から探すわ（楽な方取ったりい！）』

『分かった！頼んだぞ！』

上条と別れる直前の会話である。

心の綺麗さの差異が如実に表れた瞬間であった。

それはさて置き、地上へ出た恭弥はおもむろにポケットから携帯を取り出した。番号を打ち込み、相手呼び出しつつフラフラと歩き出す。



魔術師、シエリー・クロムウエルの生み出す戦闘用ゴーレムはあれほどの巨体である。フラフラと歩いていても、それらしい騒ぎのする場所へ行けば見つけることができるだろう。

「あつーもしもしー？」

未だ十歩も歩かぬ内に相手が電話に出た事に驚きつつも、恭弥は異常な震動を感じ取り、その源へと歩を進める。そう、ゴーレムを見つけて出すことなど容易い。

『どうも。超どうしたんですか？ 恭弥さん』

電話の相手は絹旗であった。

恭弥は彼女が出た事に吐息をついて安堵しつつ、徘徊を中断して近くのベンチに腰を下ろした。

そして一言。

「学園都市内に変な岩の化物がいるから絹ちゃん行ってきて退治してくんね？」

丸投げしやがった。

震源はおよそ300m先だろう、と見当まで付いている恭弥。流石、ゲスい。

が、返ってきたのは内臓を直接くすぐられるような気味の悪い声だった。

『勝手な事をしてもらっては困るな、アーセナル因果律』

それは男のようにも女のようにも聞こえ、大人のようにも子供のよ

うにも聞こえ、聖人のようにも凶人のようにも聞こえる声。  
学園都市統括理事長、アレイスター・クロウリー。

『これは魔術サイドの案件。そうやすやすと科学サイドの人間を巻き込まないでもらいたい』

彼の介入は当然の事と言えよう。

魔術サイドと科学サイド。この二つの領域は互いに交わらないよう線引きすることで極力互いに無干渉を貫いている。対立し、相反する両サイドはそうすることで世界を二分する戦争を起こしてしまう事を避けているのだ。

しかし今回、一人の魔術師によりこの線は踏み越えられ、戦争の引き金が引かれかかっている。もし科学サイドの人間がその魔術師を退けてしまえば完全に戦争の火蓋が切って落とされるだろう。

だが、運良く学園都市には魔術サイドであるインデックス禁書目録と、ある一件で魔術サイドに彼女の保護者として認められた上条当麻、鵜沼恭弥がいた。つまり、彼等がその魔術師を退ける分にはなんの問題も無く、事が収まるのだ。

しかし、ここで他の能力者を関わらせてしまつとどうなるだろうか？

答えは火を見るより明らかである。

その場合、例えば上条当麻や鵜沼恭弥が関わっていたとしても関係無い。待っているのは戦争だ。

故にアレイスターは恭弥と緋旗の会話に介入したのだ。

そんな彼の考えを知ってか知らずか、――いや、間違いなく知っているだろうが、――続いた恭弥の言葉は、

「…………校長先生やー!!」

一切反省の色がない叫び声だった。

『…………私の話を聞いてー』ピッ

「クッソ…………俺がやるしかないのか…………」

頭を抱える第八位。泣きそうになりながらも彼は重い腰を上げて戦場へ向かった。

心に思っは一つ。

(何故だ。解せぬ)

\*\*\*\*\*

(ゴーレムなんて上から見下ろせばすぐ見つかるんやないのー?)

そう考えた恭弥は建物の屋上に飛び上がって街を見下ろした。すると、すぐに蠢く岩の塊を発見できたためそこへ急行、からの戦闘態勢。

「ゴーレムやー!!」

「うええ!? 恭弥!?!」

そう叫んで飛び蹴りを食らわせる恭弥。そして華麗に着地し、近くの鉄骨を掴んで刀のように持って構えた。

対して、10mほどぶっ飛んだゴーレムに驚愕しつつもインデックスは安堵していた。なんせ非常に心強い人物が守りに来てくれたのだから。あまり深くは理解していないが、彼が学園都市で八番目に強い人物だという認識はしている。故に、たとえ魔術が相手でもどうにかしてくれるのではないかと彼女は希望を抱いていた。

そんなインデックスを背に鵜沼恭弥は演算を開始する。

目の前の敵は未知の法則を扱う。油断など出来ないーと思つたところで一つの考えが彼の脳裏を過つた。

頭の隅に引っかかったのは、『未知の法則』、という言葉。

(未知の法則……………未知の法則……………!!…あの時の未元物質<sup>ダイクマター</sup>の法則を使えば……………!!)

思いついたら即実行。

すぐさま頭を切り替えて能力を発動する。

鉄骨など邪魔なものは脇へ投げ捨てて。

何故手にしたのか甚だ疑問<sup>はなは</sup>である。

根拠はない。だが、これで目の前の魔術<sup>ゴレム</sup>を打ち碎けるはず、という突如湧き出た巨大な自信が彼を勇猛果敢な猛者へと仕立て上げた。

恐怖などない。ただ、目の前の敵を確実に破壊せんと恭弥は高速でゴーレムへ突っ込んだ。

が、

「GYOAAAAAAAAAAAA!!」

バキイイイツツ!!

「じべっふう!!?」

ゴーレムの巨大な拳が彼を的確に捉え、撃ち抜いた。

物凄い勢いで宙を舞い、恭弥はコンクリートの壁に衝突する。そしてそこには小規模なクレーターが形成された。それを見たインデックスは悲鳴を上げた。

「恭弥！大丈夫!？」

「クツ……心配すんな！予想通りだ！」

全身がバラバラになるような感覚を堪えつつもそう返答する。

そう、根拠などないのだから当たり前の結果だったのだ。

なら何故やった、というツッコミはいつものように受け付けない。

まあここまでダメージを受けるとも思っていなかった事も事実だろうが。

できる限り回復にエネルギーを回して恭弥は一考する。

盛大に頭を回転させて。一つ、頭に浮かべる。

(……………痛い)

待て。それは一考とは言わない。

\*\*\*\*\*

「あれ？超突然切れましたね……」

「絹旗どうしたのー？」

「あ、麦野。恭弥さんから超電話かかってきたんですけど超突然切れたんですよ」

「ああ、……………見つけたらクロス」

「……………寝顔くらいよくないですか？」

「よくない！怒ってないの絹旗と滝壺だけよー！」

「超綺麗に二分しましたね」

「まあ絹旗は恭弥にゾッコンみたいだからいいかもしれないけどね」

「なわっ!?な、ななな何を言ってるんですか！超違いますよー！」

「ヒューヒュー！乙女だねえ、絹ちゃん」

「だから超違いますってー！」

ブーブー

「ん？メール？」……………私も来ましたね」

『from:恭弥』

そこで僕を「クロスとか言っている皆さん。安心して聞いて下さい。

貴女達の下着姿は今でも鮮明に『バキッ  
ツツ!!

「……………クロス!!」

### 31話「連携攻撃！」

不気味なほど口を大きく引き裂き、ぐにやりとした笑みをその顔に浮かべて奇声を上げる男がそこにはいた。

「WWWWウエイWWWWWWWW」

「ど、どっしよう！恭弥が壊れちゃったんだよ!？」

「あ、すみません。ちょっと巫山戯ただけなんです。そんなマジで泣きそうな顔を向けなくてください。心が痛いです」

というか鵠沼恭弥だった。

なんとか血を止めて持ち直したものの、打開策が見つからない。どんなに破壊しても再生して元に戻ってしまうのでは手の打ちようがないのだ。

元来、恭弥の能力の本領は対象を分析し、対象内部で複雑に絡まり合うエネルギーの一部を変換して内部崩壊を起こさせる事にある。それは破壊でも創造でもなく、言わねば侵食の能力。故にゴーレムの再生は彼とは相性が悪いと言えるものだったのだ。

だが、だからと言って手詰まりという訳ではない。まあ普通に壊し続ければいいか、と結局はそのように方針を固めた恭弥。

そんなわけで取り敢えず景気づけに笑ってごうごうとしたのが裏目に出来ただけだった。

演算の方式を通常のものへと切り替えてゴーレムに対峙する。



「GOOOOOOAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

振り下ろされる鉄槌。だが遅い。予備動作からゴーレムの動きを把握。

「—————」

インデックスが何かを呟いた。だが、それが恭弥の耳に入る事はない。いや、仮に届いていたとしても何を言っているのか彼には理解できなかつただろう。

恭弥はゴーレムの拳が描くであろう軌道を予測し、左へ身を躲しつづ前に飛び出す。

さて、ここで先ほどインデックスが何を呟いたのかが問題となってくる。独り言ならばそれでよし。電波をキャッチしてしまったのなら残念な子へと昇格するが、それでも構わない。だが、それはそんなチヤチなものでは無かつたのだ。

『TTTTTR』

右方へ歪曲せよ

それは強制詠唱。スベルインターセプト「ノタリコン」という暗号を用いて術式を操る敵の頭に割り込みを掛け、暴走や発動のキャンセルなどの誤作動を促す魔力を必要としない魔術であり、インデックスでも使用可能なものである。

少しでも恭弥の力になると、彼女は敵の動きの障害を試みたのだ。

しかし、注目すべき点はそこではなく他にある。

正面から向かい来るゴーレムの拳を恭弥は左へ身を躲す事で避けようとした。そう、“恭弥にとって”左だ。

そして、インデックスは右方へ敵の攻撃を曲げようとした。そう、“術者にとって”右だ。

つまり、――

「うおおおお!!?なんで!?!」

「ちよっ!?!恭弥!なんでそっちに避けたの!?!」

――ゴーレムの拳が恭弥にぶち込まれた。

うっそんな予備動作なかったですやん、と愕然とするも冷静に演算を行い、衝撃を全て無効化する。魔術が使われているのはあくまでゴーレムの形成においてであり、それによる攻撃はただの物理的なものではない故、このような際の能力の使用は可能であった。

だが、恭弥は警戒して距離をとり、内心焦る。というのも、ゴーレムの動きが全く読めなかったからだ。完全に動きを捉えていたつもりだった。だが、蓋を開けてみれば綺麗なクリーンヒット。不自然極まりない動きだったが、それでも脅威であることに変わりはない。故に恭弥は訝しんでゴーレムを観察する。

そして、そんな彼にインデックスが一言。

「なんであっち側に避けたの!?!私が敵の攻撃を逸らしてあげたのに!?!」

「テメエの仕業かオラァ!!」

急転直下原因を突き止めた。

「何余計な事してくれてんじゃあ!!」

「余計な事って流石に酷いかも!私は恭弥を助けてあげようとしたのにそんな言い方はないんじゃないかな!」

「事実じゃポケエ!こちとらゴキブリみたいに潰れるところだったんだぞ!」

「あつちに避けた恭弥が悪いんだよ!」

「お前の方が酷くね!」

ヒートアップし、口論を始めるお二方。ゴーレムなど二の次だと言わんばかりにお互い一步も譲らず口を開く。

だがそんな暇を相手が待つわけがない。体勢を立て直したゴーレムから繰り出されるのは地面スレスレの横殴りの拳。視界の端でそれを捉えた恭弥は、クソ、と内心毒づきつつ会話を打ち切って上方に飛ぶことでこれを回避――

「上方へ変更CFEA……って、」

――できなかつた。

「嘘おおおおお!」

なんとという悲惨な連携。

果たしてゴーレムの拳が恭弥を捉えるが、再びその際の衝撃を無効化。

このままでは埒が明かないと、恭弥はゴーレムの懐に一瞬で潜り込み、全力の拳を叩きつけた。

直後、ボゴンツ!!と爆散し、飛散する瓦礫。

それらの軌道を計算し、そのうちのインデックスに当たりそうなもののみを能力を用いて止めた後、安堵の息を吐いた。

一段落ついたと気を緩める。

だが、それを嘲笑つかのように散らばった瓦礫が再び一点へと集結する。面倒だと言わんばかりに顔を顰めて再び構える恭弥。

せめてあと一人いれば拠点に帰れるのに、と考え始めたコイツは潰れた方がいいと思う。

完全に投げ出す気満々である。

と、この時、この願いが神に届いたのか、とある反応を彼は捉えた。

魔術師が相手というのもあり、恭弥は能力をもって自分の半径150mほどにリーダーのようなものを広げていた。

それにとある人物の反応があったのだ。不自然にポカリと空いたリーダーの穴が動く。それはまるで恭弥の能力を『反射』しているかのよう。

こんな事ができるのは230万人が住まう学園都市でただ一人。  
そう、

(レベル0に負けた超能力者、アクセラレータ一方通行のおでましかあ!!)

悪意満載な気がするが、気にしたら負けだろう。

よっしゃー！コッチに呼んで丸投げしよう！と、先ほどのアレイスターとのやりとりをガン無視した決断を下るそうとした時、一つ、頭に引っかかった。

そう、何か些細な、一つ見落としているもの。

そして、それを理解するのはそう難しい事ではなかった。  
それに関して思考し、決断を変えるのにかかった時間は一瞬である。

(いや待って!!)

この登場頻度……このままだとアイツがヒロイン候補枠に入っ  
て来ちまう！ここで助けを求めちゃダメつぶぐう!!)

しょうもな。

だが、その一瞬の思考が命取りとなる。

その一瞬の間、彼はレーダーを一切気にかけていなかった。つまり  
はレーダーを張っていない状態と同等。

したがって、後方から飛来したコンクリートの塊に反応できなかった  
のだ。

能力のお陰で衝撃は皆無であるが、魔術的な引力が働いているため  
か、その運動までには止めることができなかった。身体を中心にコン  
クリートが減り込み、彼を地面から引き離す。そして、――

「うええええいつつ!? やべえー! やべえ!! ゴレムに組み込まれちゃう  
!」

「恭弥何してんの!」

――彼を巻き込んで、すぐさまコンクリートはゴレムの一部と  
なった。

息を付く間も無く、他の瓦礫により隙間が埋れてしまう。

ゴレムが完全に再生し終え、咆哮した時、彼の姿はどこにも見ら  
れなかった。

「恭弥ーっ!!なんかギャグ漫画みたいな結末なんだよおーっ  
!？」

『お前案外余裕あるな!？』

返答はゴレムの中から聞こえた。

### 32話「減り込み男」

(ちてちて、こうしてゴーレムの中に埋まってしまったわけですが  
……………ごうしょ)

絶賛生き埋まり中の鵜沼恭弥。能力を用いて脱出すればいいのにもかかわらず、呼吸不可能など些細な問題であると言わんばかりに、彼はノンビリと思考していた、

(なんか能力使っても破壊できないしな、このままだと本格的にヤバいかもなあ)

と見せかけて、実はあまり余裕ではなかったりする。

(…痛っ！ちょちょちょ！またコンクリの角が肋骨にゴリゴリ当たってるうううう痛エエエ!!)

それどころか、かなり切羽詰まっていた。

先程からゴーレムがかなり激しく動いているらしく、色々な物の鋭利な箇所が地味に恭弥のHPを削っていたのだ。そのため、集中が続かず、位置エネルギーなどを応用した座標変換、つまりは疑似レポートという通常以上に大規模な演算を必要とする脱出が困難な状況にあった。故に比較的演算が楽な、エネルギーを放出しての破壊や、エネルギーの流れを変えたゴーレムの内部崩壊などを試みたのだが、やはり満足に能力が使えず、魔術が対象というのも相まって大きな効果が見込めていなかった。

生き埋めになってから既に3分ほど経過しており、外の状況がどのように変化しているか全く分からない。

現在進行形で鉄骨が右頬に減り込んでいるという事はゴーレムが

動いているということであり、そこからインデックスがまだ生きて逃げ回っているであろう事は予測できた。

だが、それも時間の問題だろうと結論付け、恭弥は賭けに出る。

(アダダダッ！……このままじゃ埒が明かん！演算なんぞ知るか！テキトーに能力発動してやるわアアアア!!!)

最初の一手、それはゴーレムが動き、新たな物理的エネルギーが発生したのを感じてそれを鉛直上向き方向への運動エネルギーへと変換すること。だが、ゴーレムの質量が莫大過ぎ、かつ魔術が関与しているだけに、3cmほど地面から浮かんた程度である。

しかし、彼は八位といえどLEVEL5、決して侮る事勿れ。

ゴーレムが地に着いた瞬間、再び同様の事を行い、ゴーレムを上昇させる。再びゴーレムが地に着く。再び上昇させる。再び地に着く。再び上昇させる。再び………

高度な演算を用いて、エネルギーAを別のエネルギーBへ、といった変換を行うのではない。最初こそ、この演算を用いたが、二度目以降はもつと単純、もつと簡素な演算を用いた、四則演算レベルの演算による能力の行使。

彼がノリで名付けたその技の名は、

——自動回帰演算。

それは数秒前に行った演算を強く意識することで記憶し、ほぼ無意識で自動的に同じ演算行うものである。

分かりやすい例を挙げれば『 $2 + 8 = 10$ 』という式を延々と頭の中で繰り返し返す、と言ったところだろう。初めて足し算に触れた時は、答えを弾き出すのに思考し時間がかかるが、記憶してしまえば一瞬で答えを出せる。

記憶する内容はこんな単純なものではないが、本質的にはこれと同様の事をしているのだ。



そう、自動回帰演算などと大層な名が付けられているが、言うなればゲームのボタン連打、布団叩き、皿洗い、e t c...ただの単調作業に近い。だが、それ故、まともに演算できない現在最も頼れる手段でもあったのだ。

ゴーレムが衝撃で壊れるのが先か、自分の息が切れるのが先か。死の接近を感じ、恭弥は今までにないほど真剣シリアスだった。それが裏目シリアルになるに出るとはつゆ知らず。

「わあ!!」

学園都市の頂点の一人頼れないLEVEL5がゴーレムの中へ消え、結局逃げ回っていたインデックスだったが、遂に足がもつれて転んでしまった。

「いたた!...へ?」

振り向けば、すぐそこにゴーレムが。間違いなく彼女をただの肉塊にできる距離。

死を覚悟する余裕などない。頭が真っ白になり、何も考えられなかった。僅かな時間に違いないであろうが、ゴーレムが拳を振り上げるのがやけにゆっくりに見える。ただ、事実を事実としてしか認識できない。

そしてゴーレムが目一杯に振り上げた鉄槌を振り下ろし、ソレの右拳が迫り直撃する――

ダダダダダダダダダダダッ!!

「な、何!?急にゴーレムが跳ね飛び始めたんだよ!」

――直前で、いきなりホッピングを始めた。

死んだわ、コレ…と思いきや、ゴーレムの突然の行動に我に返るインデックス。思考能力が戻り、先程の瞬間を思い出して冷や汗が背中を伝っていく。目の前に意識を戻し、突如始まったゴーレムの奇行に恐怖し、背中を伝う汗の量が倍に増えた。ツギハギの歩<sub>布</sub>く<sub>切</sub>れ<sub>れ</sub>教会の重量が、濡れて倍以上に増えた。

あそこに巻き込まれたら死ぬだろう、といった感想を抱かせるホッピング。先程まで自分を殺そうとしていたとは思えない奇行。

いろんな意味で怖かった。

とにかく、ゴーレムが跳ね回る以外の動きを止めたので、――正確にはインデックスを潰そうとしているのだが、振動での外れな方向を殴りまくっている――余裕ができたインデックスは原因を考え始める。

(急にどうしたのかな?さっきまで完全に私を殺すための効率的な動きをしてた……)

しかも術師の手を離れた自動制御だったから術師に何かあったとは考え難い……

まさか他の魔術師による介入!?

違います

(…でも、魔術の痕跡は一見ないように見える……恭弥はアテにならないから無関係だとして……)

ワーオ

(!!…何か科学的要因が働いたのかも！それなら魔術の痕跡がないのも納得できるんだよ！)

当たってはいる

かなり惜しい線まで推測出来ているインデックスだが、苦し紛れのゴーレムの拳が飛んで来たので、思考を止めて回避する。

しかし、

「ツッ！瓦礫が…！」

ゴーレムが殴ったことで地面が割れ、その破片でインデックスは足を取られてしまった。

体勢を崩して再び転んでしまい、そこにゴーレムの顔が迫る。

今度こそインデックスは、死因はモアイ風ディープキスか…と死を覚悟し目を閉じた。

が、

ドゴオオオオツツ!!

「……？」

爆音が響いたにもかかわらず、いつまで経っても来るはずの衝撃が襲って来ない。戸惑いつつ目を開けると、

「わあああああ~~~~~」

恐らく顔を蹴り上げられたのであろう、仰向けになってもなおホツピングを続けるゴーレム。そしてその上で、蹴り上げたであろう張本人、風斬氷華がトランポリンの様に跳ね回っていた。

「痛たたたたた!!」

そんな奇妙な光景に伴って聞こえて来るのは彼女の悲鳴。

彼女はゴーレムと一体となっているわけではなく、ゴーレムに弾かれ跳ね飛ばされている状態であり、本当に痛そうである。

「氷華何やってんの!? そんな化け物と一緒に跳ねちゃだめだよ! 人間なら耐えられない勢いで跳ねてるんだよ!!」

早く降りて来るように精一杯声を張り上げるインデックス。いつもの、先程よりもはるかにゴーレムが高く跳ね上がり、上下運動のスピードが上がっているからだ。

そう、先程風斬氷華がゴーレムを蹴り飛ばした事により、エネルギーが増加したのだ。故に、ホッピングの域を超えて、もはや地面に高速で叩き付けられているという表現の方が適切な状態となっていた。

ゴーレムの上から落下してきた看板が、跳ね飛ばされて隣のビルの屋上へ突き刺さる程である。

それでもなお『痛たたたたた!!』で済ませる風斬の人外的な頑丈さにインデックスは戦慄するも、早く降ろさないと氷華がビルに突き刺さる!、と慌ててなんとかしようとする。

だが、そんな彼女に寂しげな微笑みを向けて風斬氷華は、

「……大丈夫、私も人間じゃないか「痛っ!」」

衝撃のカミングアウトをしようとして失敗した。

ついでに足が砕けた。

「へ？」

そしてインデックスは目の前で友人の足が砕けたことに愕然とするが、その足が再生するという更なる現象に一層驚愕させられる。

啞然とするインデックス。砕けては再生する風斬氷華。絶体絶命………というわけでもない状況。

タタタッ！

そこへ、力強い足音が。

「風斬いいいいいい!!!」

一人の、無能力者LEVEL 0の、ヒーローの咆哮が。

「!!」

待ちに待った(？)ヒーローの登場に、インデックスは笑みを浮かべ、風斬はハッとして顔を上げ。

「言ったる、お前の住んでる世界には、まだまだ救いがあるって事を見せてやるってな!!」

岩の巨人が跳ね上がった瞬間、ありとあらゆる幻想を、異能を、そして神様の奇跡さえも打ち消す右手がそれに突き刺さった。

キーンッ……

ナニカを打ち消す音がした。

刹那、巨人は数多の瓦礫と泥へと分解し、崩れ落ちた。

舞い上がった砂埃が風により払われ、次に訪れる静寂。そして、一つの歓声とその静寂を打ち破り、木霊こだました。

「当麻!!」

精密機器で計測しなければ分からないほど些細な現象しか起こせず、唯一振るえる武器はありとあらゆる幻想を喰い殺す破壊の右手のみ。そんな無能力者LEVEL 0は。この日、一人の少女を孤独という暗闇の底から引救済きずり上げた。

上条当麻がゴーレムを破壊したタイミングは、ゴーレムが地面から跳ね上がった直後であった。また、幻想殺イマジンブレイカーとはあくまで働いている異能を破壊するモノであり、異能が働いた結果起きた現象を破壊するモノではない。彼の右手は異能による炎を消す事はできるが、その炎で燃えた物を元に戻すことはできない。第1位の反射膜を無効にすることはできるが、能力により打ち出された飛来する鉄骨を止める事はできない。

つまり、彼が右手で触れたのが、ゴーレムが「跳ね上がった瞬間」である限り、ゴーレムの速度を0にする事は不可能であったのだ。

さて、ここで少し考えてみてもらいたい。

ゴーレムが瓦礫へと変貌した瞬間、中に人がいた場合、その人はどうなるのか。

答えは推して知るべし。

ごく普通の、特にこれと言った特徴のないビルに、人が突き刺さっていた。頭から。

制服から、男という事は判断できる。

だが、顔が見えないため、正確には判断できない。

というのも、彼はビルに突き刺さっているためだ。頭から。

暫く経った後意識が戻ったのか、彼は動き出し頭を引っっこ抜いて30mほどの高さから危なげなく着地する。そして、頭をぽりぽり掻いて呟いた。

「首の骨折れて気絶してた……」

凄まじい生命力の持ち主である。というか、鵜沼恭弥だった。

キョロキョロと辺りを見回し、不思議そうに首をかしげる。

(……………息を止めて自動帰演算をして粘って……………なんか身体が軽くなったと思ったらここにいて首の骨折れてたとは……………コレいかに?)

暫く考えていたが、答えは出なかったのか、まあいいか、と呟いて帰路についたのだった。

「たっただいまあ〜」

「あ、超おかえりです。3日も何処ほつつき歩いてたんですか？」

「? ……3日?」

「? 3日ですが、……超どうかしましたか？」

「恭弥アアアア!! テメエ任務サボって3日も何処行ってやがったア!!」

「ウワホオツツ!! ちょ! ビーム止める! 止めて! 止めて下さい死んでしまいます…」

「あ、恭弥おかえりって訳よ。これアンタじゃない? 暇つぶしにネット見てたら見つけたんだけど、『この『減り込み男』ってヤツ』」

「ほうほう、『二日前に突如現れたビルに減り込んだ男。彼を中心にヒビが入っている事から、彼がビルから生えてきたのではなく、ビルに突き刺さっている事が伺える』」

「………なんで超立派に都市伝説化してるんですか……」

「写真に写ってたソイツ服が恭弥が音信不通になる前に来てた物と一致してたって訳よ。ってか今着てる服だけど」

「あちゃー、3日も経ってたか。気絶してたから気づかんかったわ。通りで服が少し臭うと思ったわ」



「テメエ暗部だろオが!!何目立つマネしてんだぁあああ!!」

「うおおおお!!スンマセン!!情報操作して潰しときます!!」

「大丈夫、そんな都市伝説化した恭弥を私は応援してる」

「そうだよな。3日も気絶してたんだから応援でなくとも心配ぐらいはして欲しいよね」

「反省してんのか!!」

恭弥君はこのあと星になりました。

### 33話「自由人」

絶え間なく鳴り響く蝉の声。

断続的に鳴り響く風鈴の音色。

そして唐突に鳴り響く黒色の携帯電話。

近未来的デザインのそれから流れ出る着信音は懐メロの、

『思春期に〜少年から〜大人に変わる〜』

壊れかけのレディオウ。

ピッ

「いや、まあだから何？って感じですがね」

『……………何が…？』

黒い携帯電話の少年からの意味不明な言葉に戸惑う電話相手の少女。

そんな彼女の質問に彼は途轍もなく真剣な口調で、

「着メロが壊れかけのレディオウである件について」

心の底からぶっついてもいい。

『ぶっついてもいいわ…!』

「なんだとっ!?」

冴え渡る少女のツッコミに対して何故か逆ギレする少年。

『えっ!?なんで今の流れで私逆ギレされたの!?!』

「いや、それはアレだ」

『なんだよ!?!』

「長男と次男が修めた一子相伝秘術の爆裂拳が」

『なんの話!?!』

「いや、……………すみません。ノリで毎日生きてるんで。さっきの逆ギレもその場のノリです」

「これはひどい。」

『はあ……………任務よ』

電話相手少女——麦野沈利は、その少年——鵜沼恭弥のいつものような意味不明な思考に溜息を一つ吐いて、意識を切り替える。

意味不明ではあるが、意味が無いという大方予想通りの返答であったために、それ以上言及することなく本題に入った。

これから踏み込むのは死と憎悪と怨嗟の支配する領域、学園都市の間。油断一つで首が飛ぶ、そんな世界。故に彼女は浮ついた心を沈め、冷徹かつ冷酷な本性を前面に出す。そんな、彼女の冷たく凍てつ

くよつな声。

短く、何の感情も感じさせないその一言に、少年の意識が切り替わる――

「そうか、……………」

（。3。）

……………バイト中だからまた後で「ピッ

――わけが無く、彼、鵜沼恭弥はそう返答してすぐに電話を切った。

もちろん、バイトなんてものもしていない。

季節は夏。生物から水分を搾り取らんとするような暑さが都市内の学生や教員からやる気というやる気をそぎ落とし、過度に熱せられたアスファルトからの熱が彼らに追い討ちをかける。

若さ溢れる学生の街といえど、灼熱の太陽には勝てないようで街全体に辟易したオーラが漂っていた。

見上げてみれば、雲一つない快晴の空から降り注ぐ真夏の強い日差しが目を刺激し、――

p r r r r r r r r r r ピッ

『任務だつつつてんだろがッ!!』

「目がー目がああああ!!」

『はあ?!!おぃー』ピッ

「ふい〜……………」んな真夏日に任務なんかやってられっか」

電話の電源を切り、前方に目をやれば学園都市第7学区が目に入る。

いつもと変わらないような風景をボンヤリと眺めながら、恭弥はレモンスカッシュを一啜り。

窓も入り口もない黒いビルの上にテーブル、椅子を出し、パラソルを広げて寛ぎつつ、彼は一言。

「ホント退屈しないな。この街は」

\*\*\*\*\*

「……………」

「?……………」どうしました、御坂さん？」

「……………」初春さん……………」いや、…誰かにセリフを取られた気がしたんだけど」

「?……………」わけがわからないよ」

\*\*\*\*\*

適度に冷房が効き、快適な温度を保っている黒色のボックスカーの

中にアイテムの四人はいた。

内部に【SOUND ONLY】と表示された液晶画面とスピーカー、集音装置が設置されている、暗部で任務中によくぶっ壊される大活躍する車の一つである。

そして、そのスピーカーから、アイテムにとって聞きなれた女性の声で一つの質問が発せられた。

『……………で、彼は？』<sup>八位</sup>

そう、我らが第八位鵜沼 恭弥の所在である。

電話は繋がらず、衛星で捕捉できず、監視カメラには映っていない。アイテムの下っ端が血眼になって探しているも、結果は芳しくない。

詰まる所、彼が第七学区のビルの上でレモンスカッシュを飲みながら寛いでいることなど彼女達は知らないということだ。

「……………超行方不明です」

「……………私の能A I M ストーカー 力でも見つからない……………」

「……………チッ……………」

「……………いつも通り自由人って訳よ」

上から、絹旗最愛、滝壺理后、麦野沈利、フレンダ、セイヴェルン。各々呆れや苛つきを滲ませ、暗部を舐めているとしか思えない八位の自由っぷりに頭を抱えていた。

というか、能力者ならば誰もが発するAIM拡散力場を感知するのが滝壺の『<sup>AIMストーリー</sup>能力追跡』であるのだが、それにすら捕まらないことが何よりもおかしい。能力の基本は脳であり、それが活動している間、つまり普通に生きて生活している間はAIM拡散力場は必ず放出される。

その感知が不能ということは、九割方死亡したということと等しいのだが、あの自由人が死んだとは到底考えられない。そんなAIM拡散力場が補足できないというふざけた現象。

つまるところ、弾き出された結論として恭弥は頭のネジが吹っ飛んでいるとしか思えないのだ。

そんな彼に対し、上司の女は遂にブチ切れた。

『ハア!?あの子、私に暗部舐めんなとか言ってたよね!?言ってたよね!?……お前の方が舐めてんじゃねえか!!!』

マジである子なんなの!?過去のデータも閲覧レベル高すぎて見れないし!犯罪行為も見過ごされてるし!!いや、まあ確かにしようもない程度の犯罪だけどさ!!つか超自由だし!なんでアイテムに入れたんだああああ!!』

が、それ以上にプツンしている人がいた。

「うるッッッせえええええ!!ふざけた返答と共に電話切られた私がそう言いたいわ!!何が壊れかけのレディオだよ!!つかサッサと話を進めろ!これ以上私をイラつかせんな!!」

遂に麦野のボルテージがメーターを振り切って爆発したのだ。

思い返してみれば、彼女への恭弥の対応は中々に酷いものだった気もする。

彼女が怒り心頭なものも、もっともな事であった。

そんな麦野を見て、

『あ、はい……すみません……。』

ええと……それじゃあ任務の内容を説明するわ』

上司の女は一瞬で頭が冷え、我に返った。

自分より怒り狂っている人を見るとかえって冷静になる、とよく言われるが、まさにその言葉通り。

もっとも、麦野にビビっただけだと言えなくもないが。

とにもかくにも、任務は既に始まっている。故に、一つ間を置いてから彼女は説明を始めた。

『今回の任務はある組織の殲滅よ。ま、組織とは言っても少人数だけだね』

一同の気持ちを切り替えに伴い、車内の空気も一変する。アイテムの面々は幾度も経験し、慣れてしまったが、一般人が相席していたならば意識を手放したくなってしまっただろう冷えきった重い雰囲気。

暗部独特のそんな雰囲気の中でなされる説明に、絹旗は生まれた疑問を解消するために画面の向こうにいる上司へと質問を投げかけた。

「何人ほどの組織なのでしょうっか」

それに対し、上司の女性は丁寧に答えていく。

『十人よ。下っ端も含めれば2、3倍に増えるだろうけどね。彼等は元々、『パレット』っていう学園の暗部組織の一つだったんだけど、………先日、ある装置とそれに関するデータと共に蒸発したわ。………物理的にはないわよっ。』



重苦しい雰囲気が霧散した。  
もちろん物理的にはない。

「超分かりきった事を言わないで下さい」  
「恭弥みたいな思考するなって訳よ」

即座にツッコむ絹旗とフレンド。

誰がどう考えても話の流れからして『人間の蒸発』は比喻であろう。  
物理的な方向を想像するのは若干頭の残念な八位くらいだ。

もっとも、文脈うんぬんを抜きにすれば、物理的にも『人間の蒸発』  
が起こりうるのが学園都市であることは否定できないのだが。

だが、この場でそれはない。そんなアイテム同の思いを代表した  
彼女達のツッコミに上司の女性は、驚愕。

『えっ!?あの子と同じ思考回路!?ちょっとショック!!』

それもそうだろう。

恭弥と同じ思考回路だよ、ということとは、頭のネジ飛んでるよ、と  
いうことと同義なのだから。

そんな絹旗とフレンドが突きつけた現実に打ちひしがれていた彼  
女に対し、降りたはずの血が再び頭に昇った麦野沈利が一喝。

「サッサと内容を話せー!ブチコロスぞ!!」

流石にこれ以上時間を無駄にするのはマズイと思ったのか、上司の  
女性は麦野の怒りを流して話を戻す。

『あー、はいはい、それじゃ続けるわよ。』

間違いないく、『パレット』は学園の敵に回ったわ。だから一人残さず殺す方向で頼んだわよ。

そして、その装置の名はGHOST。一応、AIM拡散力場に関して働きかける装置ってことは分かっているけど、まだ正確なところは分からないわ。

で、依頼された内容はさっき言ったように、『パレット』の殲滅が最優先事項。出来れば装置が壊れないようにして欲しいけど、別に壊れてしまっても構わないって『

一通り任務の説明を終え、暫しの沈黙。彼女はそこでアイテムの面々からの質問を待つ。

すると、フレンダが受け取った情報をまとめながら、人差し指を顎に当てて上司に問う。

「んー、さっきデータがどういって言ったけどー、……それはいいの？」

『そのデータは、『パレット』壊滅後に、依頼主が自ら処分するらしいわよ。ま、聞く限り大して重要ではないようね』

「ふーん」

一応納得したのか、そんな返答をするフレンダ。続いて絹旗が尋ねる。

「そのGHOSTという装置はどのような形状をしているのでしょうか？」

『ある程度大きなものとは聞いたけど、詳しい事は教えてもらえなかったのよね。そんなわけだから、壊れないように気を配る必要はな

さそうね。壊れなかったらラッキー程度にしか向こうも考えてないみたいよ』

「分かりました」

『もう質問はないかしら？』

絹旗の返答の後の数秒の沈黙から、もう質問はないと判断した彼女達の上司は念押しとしてアイテム一同にそう問いかけた。それに対して頷くことで答える面々。

『じゃ、依頼は以上よ。後は任せたわ』

「……ええ」

「超了解です」

「分かったって訳よ」

「……………」

麦野沈利の冷徹な返答。

絹旗最愛の静かな返答。

フレンダ＝セイヴェルンの自信満々な返答。

滝壺理後の沈黙による返答。

かくして『アイテム』の四人は行動を開始する。

<sup>LEVEL5</sup>超能力者の第四位、『<sup>マルチダウン</sup>原子崩し』。

<sup>LEVEL5</sup>超能力者の第八位、『<sup>アーセナル</sup>因果律』（欠席）。

<sup>LEVEL4</sup>大能力者の『<sup>オフエンサマー</sup>窒素装甲』、『<sup>AEMストーリーカー</sup>能力追跡』。

そして、無能力者なれど卓越した爆弾使い。

学園都市トップクラスの戦力が反逆者共に牙を剥く。

人が次第に朽ちゆくように、国もいずれは滅びゆく。

現在まで栄えた学園都市すらも、今や腐敗し生き地獄  
人の形の魑魅魍魎が、我が物顔で跋扈する。

天が裁けぬその悪を、闇の中で始末する。

彼等全員、殺し屋稼業。

p r r r r r ピッ

『なんちゃって』

「あの、恭弥さん、超意味不明な事言っていないで超超超早く来て欲しい  
んですけど」

『やなこっブツツツツツ』

「超自由！ってかせめて最後まで言えよおおおお!!」